

①

学位論文

卒業期に来談する大学生の臨床心理学的特徴についての研究
— 来談時期から見た学生相談事例の検討 —

鶴田和美

目次

第1章 問題と目的	1
1. 1 先行研究の展望と本研究の目的	1
1. 1. 1 先行研究の展望	
(1) 学生相談の歴史と理念	
(2) 本研究での用語の定義	
(3) 従来の研究における学生期	
(4) 現代における学生期の位置	
1. 1. 2 本研究の目的	
(1) 学生期の下位時期・来談時期への注目	
(2) 来談学生の全体像への注目	
(3) 面接過程への注目	
(4) 長期継続事例にとっての卒業期への注目	
1. 2 研究対象の特徴と研究の方法	7
1. 2. 1 研究対象の特徴	
(1) A大学の学生全体の特徴	
(2) 来談学生の特徴	
1. 2. 2 研究の方法	
1. 2. 3 本研究の経過	
第2章 卒業期に来談する大学生の臨床心理学的特徴	10
2. 1 来談時期から見た卒業期来談学生の特徴（研究Ⅰ）	10
2. 1. 1 目的	
2. 1. 2 先行研究の展望	
(1) 学年への注目	

(2) アイデンティティ・ステイタス研究から見た学年	
(3) わが国の研究	
(4) 下位時期ごとの特徴	
2. 1. 3 方法	
2. 1. 4 結果	
2. 1. 4. 1 来談形態の特徴	
(1) 来談学生数	
(2) 来談経路	
(3) 来談月	
(4) 平均面接回数	
(5) 面接の終わり方	
(6) 来談形態の特徴から見た卒業期の特徴	
2. 1. 4. 2 相談内容と面接の主題	
(1) 卒業期に来談した事例の特徴	
(2) 他の時期に来談した事例の特徴	
2. 1. 5 考察	
(1) 卒業期来談学生の全体的特徴	
(2) 卒業期来談学生の来談形態の特徴	
(3) 卒業期来談学生の相談内容と面接の主題	
(4) 大学院修了期との比較	
(5) 領域別の心理学的特徴	
(6) まとめ	
2. 2 卒業期来談学生の全体像 (研究Ⅱ)	----- 45
2. 2. 1 先行研究の展望	
2. 2. 2 目的と方法	
2. 2. 3 結果	
2. 2. 3. 1 卒業期来談学生の特徴	
(1) A型 (自己探究型)	

(2) B型 (確認型)	
(3) C型 (内面整理型)	
(4) D型 (混乱対処型)	
(5) 卒業期来談学生のまとめ	
2. 2. 3. 2 他の下位時期に来談した学生の特徴	
(1) 入学期に来談した学生の特徴	
(2) 中間期に来談した学生の特徴	
(3) 大学院学生期に来談した学生の特徴	
2. 2. 4 考察	
(1) 4類型の特徴	
(2) 卒業期の特徴	
(3) 2つの軸から見た来談学生の特徴	
(4) 卒業期と大学院修了期の来談学生の比較	
(5) 援助の方法	
(6) まとめ	
2. 3 卒業期来談学生の面接過程 (研究Ⅲ)	----- 62
2. 3. 1 先行研究の展望	
(1) 学生生活の終点	
(2) 社会生活への移行	
(3) 卒業期に来談する意味	
(4) 卒業期の学生相談の面接過程	
2. 3. 2 目的と方法	
2. 3. 3 結果	
2. 3. 3. 1 A型の事例	
(1) 事例1	
(2) 事例2	
(3) A型の事例の面接過程の特徴	
2. 3. 3. 2 B型の事例	

- (1) 事例3
 - (2) 事例4
 - (3) B型の事例の面接過程の特徴
 - 2. 3. 3. 3 C型の事例
 - (1) 事例5
 - (2) 事例6
 - (3) C型の事例の面接過程の特徴
 - 2. 3. 3. 4 D型の事例
 - (1) 事例7
 - (2) 事例8
 - (3) D型の事例の面接過程の特徴
- 2. 3. 4 考察
 - (1) 4類型の面接過程の特徴
 - (2) A型とC型の面接過程
 - (3) B型とD型の面接過程
 - (4) 大学院修了期の面接過程
 - (5) 面接関係の特徴
 - (6) まとめ
- 2. 4 卒業期以前からの継続来談学生の卒業期の特徴 ----- 92
(研究IV)
 - 2. 4. 1 目的と方法
 - 2. 4. 2 先行研究の展望
 - 2. 4. 3 結果
 - 2. 4. 3. 1 A型の事例 (事例9)
 - (1) 事例の概要
 - (2) 面接過程
 - (3) 卒業期の面接過程の特徴
 - 2. 4. 3. 2 C型の事例 (事例10)

(1) 事例の概要	
(2) 面接過程	
(3) 卒業期の面接過程の特徴	
2. 4. 3. 3 D型の事例 (事例 1 1)	
(1) 事例の概要	
(2) 面接過程	
(3) 卒業期の面接過程の特徴	
2. 4. 4 考察	
(1) 長期継続事例にとっての卒業期の意味	
(2) 学生相談における時間の意味	
(3) まとめ	
第3章 総合的考察と今後の課題	1 1 7
3. 1 まとめと総合的考察	1 1 7
3. 1. 1 研究のまとめ	
3. 1. 2 総合的考察	
3. 2 今後の課題	1 2 1
引用文献	1 2 2

第1章 問題と目的

1.1 先行研究の展望と本研究の目的

1.1.1 先行研究の展望

ここでは、学生相談の歴史を展望し、従来の研究において学生期がどのようにとらえられて来たかを概観する。

(1) 学生相談の歴史と理念

1) アメリカ合衆国における学生相談の歴史

学生相談においては、従来、「精神障害学生への援助」の理念と並んで、「成長・発達促進」の理念が強調され、学生生活への援助を通して学生の人格的成長に寄与することが主要な目的とされてきた。

アメリカ合衆国における学生相談の起源には、学生の成長・発達援助に基盤を置いたものと、学生の病理の治療に基盤を置いたものがあった。Reinhold, J. E. (1991) は、アメリカの大学における精神保健プログラムの起源として、SPS (Student Personnel Services: 厚生補導) をあげ、その歴史について、植民地時代に宗教法人が設立した大学において始まったこと、19世紀に入って、教育の宗教からの分離、大学入学者数の増加、ドイツ式教育の影響によって初期のSPSの時代が終わったこと、1870年代に、Harvard大学、Johns Hopkins大学に学修、課外活動のアドバイスをする機関としてSPSができたことを指摘している。そして、「独立し専門化した機能としてのSPS」と、「精神医学の発展、精神衛生運動の出現、専門職としての心理学の展開」の2つが学生相談の起源となったことを指摘している(4頁)。

学生相談のその後の発展については、Stone, G. L. & Archer, J. Jr. (1990) およびHeppner, P. P. & Neal, G. W. (1983) が、大学におけるカウンセリングセンターの歴史を、次の4つの時期に分けて述べている。①開始期(1945年以前) : カウンセリング、進路指導、

S P Sが未分化な時代であり、しだいに臨床的カウンセリングの必要性が認識されるようになった時期。②移行と専門化期（1945-1955年）：職業指導のために、多くの大学でカウンセリングセンターが設立され、S P Sからカウンセリングが専門的職業として分化した時期。③拡張と充実期（1955-1970年）：カウンセリングセンターの役割が拡張し、個人カウンセリングの重要性が増加した時期。④拡張期（1970-1982年）：カウンセリングセンターの役割が広がり、学生個人でなく、キャンパスという環境全体が対象となった時期。

（Stone & Archer, 540-541頁）。

このように、アメリカ合衆国における学生相談の歴史においては、学生の成長・発達援助に基盤を置いたものと、学生の病理の治療に基盤を置いたものがあった。そして、S P Sから個人カウンセリングが分化し、しだいに個人カウンセリングの割合が増えた。そして今日では、学生相談は大学全体を対象とした活動をめざすようになってきている。

2)わが国における学生相談の歴史

都留（1994）によれば、わが国の学生相談には、4つの起源がある。第1の起源は、教育的見地からの相談であり、師弟関係一般における、師の弟子への人格的、教育的役割としての相談である。第2の起源は、訓育的見地からの相談である。岨中（1995）によれば、学生相談は、第2次世界大戦以前においては学生への補導的側面ももつものであった。ここでは学生を一定の道徳的、思想的な型にはめ込むことが教育の使命と考えられ、学生を訓育する手段として相談があった。第3の起源は、サービスの見地からの相談であり、戦後行われた学生への生活援助に始まる。戦後のわが国の学生相談は、小柳（1989）によれば、S P Sの考えがアメリカ合衆国から1951年に導入され、1953年（昭和28年）に東京大学、山口大学で、1956年（昭和31年）京都大学、東北大学、名古屋大学で学生相談室が開設されたことに始まる。当時のS P Sの考えを示す『学生助育総論』（1953）には、
「学生助育（注：S P Sの訳語）とは、学生を各種の人間の欲求をもつて生活し成長する主体であると思なす観点に立ち、その発達と成熟を助長し援助するいっさいの活動を意味する」とある（序言）。わが国の学生相談は、学生生活の援助、学生の成長・発達援助に基盤を置いたS P Sから発展して来ている。第4の起源は、カウンセリングの見地からの相談であり、臨床心理学に基づいたカウンセリングの機能が強調されるようになって来ている。

このようにわが国の学生相談は、教育的見地からの相談を基盤とし、戦前に行われた訓育的見地からの相談への反省の上に立ち、戦後、理念としてSPSの考えを取り入れ、方法としては臨床心理学に基づいたカウンセリングを取り入れて、現在に至っている。

3)近年のわが国の学生相談研究の特徴

近年のわが国の学生相談の実践報告と研究の特徴は以下の通りである。

第1に、SPSの理念についての記述が多いことに比べて、この理念に基づいた実践についての記述と研究が少ない。第2に、SPSの理念においては、学生への成長・発達の援助が強調されているが、実践報告や研究においては、精神的健康度が低く対応が困難な学生へのカウンセリングの報告が多く、比較的健康な大学生の心理的発達援助についての記述と研究が少ない。特に、成長・発達促進の理念を具体的な事例を通して示した実証的な研究が少なく、SPSの理念と、カウンセリングを基盤とした学生相談の実践活動とが統合されていない。第3に、来談学生の全体像が明らかにされていない。そのため、個々の事例の記述が全体像の中に位置づけられていない。第4に、下山他(1991)が指摘したように、治療構造を前提とする心理療法を主とした事例の報告が多く、大学という組織の中で学生への援助方法を開発することが行われてこなかった。

以上述べたように、わが国の学生相談の特徴は、SPSの理念と、カウンセリングや心理療法に基づく実践活動とが必ずしも一致してこなかったことである。

(2)本研究での用語の定義

本研究では、大学生が大学に入学してから卒業するまでの期間を、安藤(1991)にならいい、「学生期」と呼ぶ。そして学生期を、便宜的に学年に即して、入学期、中間期、卒業期という3つの下位時期に区分する。「入学期」とは、大学入学後1年以内の期間を言う。「中間期」とは、入学期と卒業期を除いた学生期の中間の期間を言う。「卒業期」とは、卒業前1年以内の期間を言う。また、大学院への入学から修了(博士前期および後期課程)までの期間を、「大学院学生期」と言う。そして大学院学生期のうちの、修了(博士前期および後期課程)前1年以内の期間を「大学院修了期」と言う。また広い意味で、大学学部の卒業期と大学院修了期を合わせて「卒業期」と呼ぶ場合がある。

本研究では、わが国の4年制大学の学生および大学院学生を対象として論を進めるが、

4年制以外の大学の学生についても、入学後1年以内の期間を入学期と呼び、卒業前1年以内の期間を卒業期と呼ぶ。そのため、2年制の短期大学の学生は中間期をもたず、6年制の学部の学生は長い中間期をもつことになる。

(3)従来の研究における学生期

学生期および大学院学生期は、従来の学生相談の研究では、発達上、「青年から成人への移行期」(Levinson, D. J., 1978)に位置し、「アイデンティティ (Identity) の確立」(Erikson, E. H., 1959)などの重要な課題に直面する青年期の一時期として一括して扱われて来た。

1)発達心理学の立場から

発達心理学の立場から、Havighurst, R. J. (1953)は、ライフサイクル (Life Cycle) を6段階に分け、学生期に相当する青年期の発達課題として、同年齢の男女との洗練された交際を学ぶこと、男性として女性としての社会的役割を学ぶこと、身体を有効に使うこと、両親などから情緒的に独立すること、経済的な独立について自信をもつこと、職業を選択し準備すること、結婚と家庭生活の準備をすること、市民として必要な知識と態度を発達させること、社会的に責任のある行動を求め成し遂げること、価値や倫理の体系を学ぶこと、という10項目をあげている。ここには青年期の前期から後期にかけての課題が含まれているため、学生期相当年代の課題と限定した形では明らかになっていないが、この10項目の多くが学生期の課題と重なると考えられる。また、Levinson, D. J. (1978)は、ライフサイクルを4段階に分け、その2番目の段階である成人前期 (17~45歳)を、成人への移行期 (17~22歳)、大人の世界へ入る時期 (22~28歳)、30歳の移行期 (28-33歳)、一家を構える時期 (33~40歳)と分けている。学生期および大学院学生期は、年齢的に「成人への移行期」から「大人の世界へ入る時期」に相当すると思われる。これらの期の課題として、「未成年の世界から卒業すること」、「おとなの世界へ入る準備段階の第一歩を踏み出すこと」(南訳, 135頁)、「自己とおとなの社会とを無理なく結びつけてくれる生活構造をはじめて形づくる」こと(南訳, 145頁)があげられ、子供から大人への移行期間とされている。

以上述べた文献に代表される発達心理学の見解では、学生期は大人になるための準備期間とされている。

2)精神分析の立場から

精神分析の立場から、Erikson, E. H. (1959) は、学生期に相当する青年期では、アイデンティティの確立と拡散が課題となるとしている。そして、アイデンティティについて、「各個人が青年期の終わりに、成人としての役割を身につける準備を整えるために、成人になる以前のすべての経験から獲得していなければならない一定の総括的な成果」であると述べ（小此木訳, 131頁）、学生期に相当する時期を含む青年期後期が、アイデンティティの拡散が統合に向かう時期であることを指摘している。また、ユング心理学の立場から樋口 (1981) は、イニシエーション (Initiation) の視点から学生期をとらえ、大学時代は「心理的さなぎ状態で、子供から大人になる過渡期」であるとし (255頁)、この時期に重要なことは、「新しい自己の発見であって、それまでの両親によって形作られた古い仮の自己が死んで、これと全く異なった新しい自分の中心ともなるべき自己を発見すること」であると述べ (265頁)、古い自己の死と新しい自己の発見が学生期の課題であることを指摘している。

以上の文献に代表されるように、精神分析学においても、学生期に相当する年代は一括して扱われ、子どもから成人への移行期として位置づけられている。

(4)現代における学生期の位置

近年、欧米およびわが国では、社会の変化にとともない、青年期が時代とともに長期化していることが指摘されている (Erikson, E. H., 1959, Keniston, K., 1971, 笠原, 1976)。また、欧米の大学だけでなくわが国の大学においても、社会人入学学生などが増加する傾向にあり、学生期および大学院学生期の年齢幅が広がる傾向にある。

学生期は、かつては青年期の終点に近い位置にあったが、近年では、このような青年期の長期化と学生期の年齢幅の広がりによって、青年期後期の後半に近い一時期、青年期の終点に近い一時期にあると考えられるようになってきている。そのため現代のわが国においては、学生期を終わることは、青年期後期の一つの大きな節目を通過することであるが、必ずしも青年期を終えることを意味しないと考えられている。

現代のわが国の大多数の大学生にとっての学生期は、高等学校卒業後の10歳代後半から20歳代前半の時期にあたり、大学院学生期は、20歳代前半から中盤の時期にあたる

ため、本研究では、学生期および大学院学生期を、主としてこの時期にいる大学生を中心に考える。しかし、社会人入学などによって入学した学生の場合、学生期が必ずしも青年期後期に位置していない場合がある。社会人を体験した後に再入学した学生について、Johnson, E. A. & Schwartz, A. J. (1989) は、「学生自身のライフサイクルと他の多くの大学生が位置している青年期というライフサイクルの両方を生きる難しさがある」ことを指摘している(330頁)。また、長期留年などによって学生期が延長する場合がある。これは多くの場合数年以内であり、学生自身のライフサイクルと他の学生のライフサイクルとが大きく変わらない場合が多い。しかし、ライフサイクル上の位置が大きく異なる場合には問題となる場合がある。

1.1.2 本研究の目的

本研究では、卒業期について、以下の4点に注目する。

(1) 学生期の下位時期・来談時期への注目

研究Ⅰの目的は、大学生の学生相談室への来談時期に注目して、学生期を下位時期によって分け、卒業期来談学生の心理学的特徴を、他の時期に来談した学生との比較を通して明らかにすることである。

(2) 来談学生の全体像への注目

研究Ⅱでは、来談学生の事例の類型化を通して、来談学生の全体像に注目する。具体的には、卒業期の来談事例を類型化することを通して、精神的健康度の高い学生も含めた全体像を明らかにし、卒業期大学生への援助の方法について検討することを目的とする。

(3) 面接過程への注目

研究Ⅲでは、卒業期の学生相談に特有の面接過程に注目する。卒業期は青年から成人への移行期であり、卒業期の学生相談では、青年期あるいはそれ以前の発達課題を見直し成人期に入るための準備が行われると思われるが、学生相談の面接過程の特徴について、特に卒業期の学生相談の面接過程の特徴について記述した文献は多くない。そこで本研究で

は、第3に、卒業期来談事例の面接過程の特徴を明らかにする。

(4) 長期継続事例についての卒業期への注目

研究IVでは、長期継続事例にとって卒業期がどのような意味をもつかに注目する。卒業期以前に来談した長期継続事例においては、大学キャンパスの時間的枠組みを意識することによって、下位時期ごとの面接過程の特徴が明らかになると思われる。そして特に、卒業期の面接過程の特徴が明らかになると思われる。本研究では、第4に、長期継続事例の面接過程を記述し、長期事例についての卒業期の意味を検討する。

1.2 研究対象の特徴と研究の方法

1.2.1 研究対象の特徴

(1) A大学の学生全体の特徴

本研究の対象は国立A大学の学生である。A大学は9学部、11大学院研究科（前期および後期課程）からなる総合大学であり、学生数はおよそ学部9,500人、大学院3,500人であり、学生の男女比はおよそ7対2である（1995年12月）。

「新入生アンケートの結果」（1994）などの既存資料から、同規模の国立大学および私立大学と比較したA大学学生の特徴として、第一志望で入学した地元出身者が多いこと、学生生活の目的として「専門的知識の習得」と「交友」をあげる者が多いこと、学生生活への満足度が比較的高いこと、大学院進学者が多いことがあげられる（1995年度 24.4%）（43頁）。

A大学の各学年の在学学生1,576名にたいして質問し調査を行った「学生生活状況調査報告書（第16回）」（1995）による学生の特徴は以下の通りである。東海3県（愛知、岐阜、三重）に家庭がある学生が7割を越えていること（71.8%）。大学生活の目的として、文系学部では、「良き友人を得る」（58.1%）、「豊かな教養を身につける」（46.4%）と答えた学生が多く、理系学部では、「専門知識・技術を身につける」（58.5%）、「学問・研究をする」（49.1%）と答えた学生が多かったこと（10選択肢から3項目を選択）。また、学生生活への満足度は、5段階評定で、「満足している」（53.5%）と「まあ満足

している」(16.9%)と答えた学生が7割以上(70.4%)であり、全体として大学生生活に満足している学生が多く見られたこと(4-25頁)。

(2) 来談学生の特徴

また、来談学生の特徴としては、「学生相談実施状況」(1994)から、新入生と高学年(4年生および大学院学生)の来談が多いこと、「修学」「対人関係」「精神衛生」の相談が多いことがあげられる。1994年度の学年別の来談傾向は、1年生(22.3%)、2年生(11.1%)、3年生(11.1%)、4年生(17.6%)、大学院学生・研究生(37.8%)であった(41-42頁)。

1.2.2 研究の方法

これまでの学生相談の研究では、新入生の適応や留年などについての質問紙による調査研究や、対応が困難な一事例についての事例研究が見られるものの、多数の事例の面接過程を継続的に扱った実証的な研究は見られていない。豊嶋・遠山・芳野(1994)は、大学生研究の問題点として、①全体像の把握を先送りし、人の部分機能・断片的特性に標的を絞ってそれらの相互関係を解明しようとしていること、②個別事例の内面的ダイナミクスに過度に密着するあまり、対象とする現象群を普遍化し全体像に迫る視点に欠けがちであること、などをあげている(6頁)。

本研究では事例研究法を用い、来談事例の全体像を概観し、類型化し、代表的な事例の面接過程を記述する。鏑・名島(1991)は、事例研究法的方法的妥当性について述べ、事例研究法は以下の過程を経て、科学的な資料を蓄積していくと指摘している。①カウンセラーや心理臨床家が個別的な経験の蓄積、臨床経験の吟味を行い、そこから仮説的なひとつの発見がなされる。②その発見はさらに個々の事例を通してカウンセラーによって吟味されていく。③吟味された経験の図式はひとつの定式として仮説的に表現される。④観点を同じくする別のカウンセラーによって同様のプロセスを経て吟味されていく。⑤仮説が確認され、次元の高い仮説ないし理論的構築となる。⑥心理臨床家全体によって吟味のプロセスが展開する(284頁)。本研究では、卒業期来談学生との個別的な臨床経験から得られた仮説的な発見を、来談事例の全体像、来談時期ごとの事例の全体像、来談事例の類型化、代表的な事例の記述を通して吟味し、一つの定式として仮説的な理論を構築すること

を目的とする。

なお、本研究の面接はすべて筆者が担当した。本研究の目的が来談学生の臨床心理学的特徴を明らかにすることにあるため、面接関係および面接者からの働きかけについては必要最小限を記述した。

1. 2. 3 本研究の経過

本研究の経過を簡潔に述べる。筆者はまず卒業期に来談した個別相談事例に注目し、卒業という節目を前にした大学生が「内面的世界の卒業論文を書く」ような心理的作業を行うことを記述した(1990)。また、大学2年生の事例を取り上げ、この時期は大学から求められる枠組が比較的緩やかで、学生が内面的な課題に取り組みやすく、「曖昧さの中の深まり」が見られることを指摘した(1991a)。次に、入学期の事例を取り上げ、1年生の時期は今までの生活から新しい生活への移行期であり、学生がさまざまな悩みや課題を契機として学生の側からのオリエンテーションに取り組むこと、そしてその取り組み方が4つの型に分けられることを指摘した(1991b)。次に、卒業期に来談した45事例を精神的健康度に基づいて4群に分け、それぞれの群の特徴を記述し(1992)、卒業期学生相談の終わり方(1993a)を記述し、筆者が自己探究型と呼ぶ比較的健康な事例を報告した(1994b)。そして、学年という視点から来談事例全体のまとめを行い(1993b)、学年に基づいた心理的模式図を提出する過程を通して学年よりも柔軟で幅の広い学生生活サイクルを提唱した(1994a)。また、学部学生に対比する形で、大学院学生の相談事例の特徴を記述し(1994c)、卒業期学生相談における時間の意味について考察した(1995a)。また、卒業期の来談学生についての文献を概観し(1994d)、面接過程を記述し(1995b)、研究全体をまとめた(1996)。

第2章 卒業期に来談する大学生の臨床心理学的特徴

2.1 来談時期から見た卒業期来談学生の特徴(研究 I)

2.1.1 目的

研究 I では、卒業期来談学生の心理学的特徴を、他の時期の来談学生との比較を通して明らかにすることを目的とする。

学生期および大学院学生期は、従来の学生相談の研究では、青年期後期の一時期として一括して扱われて来た。しかし、学生相談の実践場面では、たとえば入学直後に来談した学生と卒業前に来談した学生とでは、心理学的特徴が異なるという印象をもつことが多い。研究 I では、大学生の入学後の時間的経過および学年の変化に注目する。そして、相談内容が似ていても、

学生の来談時期によってその意味が異なること、相談内容が異なっても、同じ時期に来談した学生には共通した心理学的特徴が見られることに注目する。本研究では学生期を区分し、それぞれの時期に来談する学生の心理学的特徴を明らかにすることを通して、来談学生の訴える問題をより広く理解することを目的とする。従来の学生相談の研究においては、学生の精神的健康度、あるいは病理水準という観点が重視されてきたが、本研究ではその観点に加えて、学生の来談時期に注目する。これは、学生の発達上および環境上の位置を重視した観点となると思われる。

一般には、来談時期という用語は、1年のうちで学生が来談する時期（何月に来談するか）という意味ももつが、本研究では、学年に基づく時期区分を言う。従来の学生相談の研究では、来談時期については、入学期に相当する時期の、大学への適応の問題に注目した研究が多く見られたが、それ以降の時期についての研究は少ない。本研究では、特に、従来注目されることが少なかった卒業期に来談する学生に注目する。

また、本研究は、学生相談室への来談学生の心理学的特徴と、健康な一般学生の心理学的特徴との共通点を見出そうとするものである。

2. 1. 2 先行研究の展望

(1) 学年への注目

近年、「大学生のライフサイクル」(Medalie, J. D., 1981)、「大学生の発達課題」(Grayson, P. A., 1989)という観点から、学年によって大学生が直面する課題が異なることが指摘されている。

Medalie, J. D. (1981) は、大学生が入学してから卒業するまでの発達の過程を人間の一生のライフサイクルにたとえ、入学から卒業までの学生期の中にサイクルがあるという考えを示している。つまり「大学時代は、さまざまな段階をもつミニ・ライフサイクル」であるとし、「学生が大学生のライフサイクルのどこに位置するかを理解することは、学生の訴えの底に横たわる葛藤やストレスを理解するための重要な手がかりとなる」と述べている(75頁)。そして大学生のライフサイクルを学年によって分け、1年生では、「家族から大学への移行期において、幼児期以来の結びつきを捨てて学生生活に足を踏み入れること」が、2年生では、「分離の課題の統合と関心や目標の選択」が、3年生では、「仕事への精通と参加」が、4年生では、「将来への予測」、つまり「将来を予測して、現実的な課題を立てること」、「なじみ深くて比較的安全な大学という世界から離れること」ともなう悲しみを経験すること」が中心的な課題となるとして、4年間の変化過程を示している(75-78頁)。

また、Grayson, P. A. (1989) は、青年期から成人期への移行期にいる大学生の発達課題として、「両親や家庭からの分離」、「同一性の形成」、「同年輩の友人との親密さの獲得」の3つをあげている(9-10頁)。そして各学年の課題として、1年生では「分離と新しい環境への適応」を、2年生では「自己吟味と選択」、「同一性形成あるいはスランプ」を、3年生では「同一性形成と将来が結びつく」ことを、4年生では「大学の友人、恋人、生活様式からの別れ」、「家族からの分離」、「同一性の形成」、「大学を終えることをめぐる両価性」をあげている(11-13頁)。

(2) アイデンティティ・ステイタス研究から見た学年

アイデンティティ・ステイタス(Identity Status)研究には、大学生を被験者とする多くの研究があり、質問紙や半構造化面接などを用いた客観的資料をもつものが多い。そし

て、学年の変化、学生期の下位時期に言及したものがあ

一般に、学年が進むにつれてより高いアイデンティティ・ステイタスへと移行するという報告がある (Waterman, A. S., Geary, P. S., & Waterman, C. K. (1974)、Waterman, A. S., & Goldman, J. A. (1976))。Waterman & Goldman (1976)は、大学1年生から4年生にかけてのアイデンティティ・ステイタスの変化について質問紙による研究を行い、年齢や学年が進むに従ってより高いステイタスへと移行するという結果を報告している。

一方、Adams, G. R. & Fitch, S. A. (1982)は、大学1年生から3年生の学生の、1年後のアイデンティティ・ステイタスの変化を分析し、約半数の学生のステイタスが1年後に変化していたこと、そこにはより下位のステイタスへの移行も含まれたことを報告している。

このように、大学生のアイデンティティ・ステイタス研究には、学年の進行にともなうアイデンティティが確立されるという報告と、アイデンティティ・ステイタスは変動しやすく、必ずしも学年の進行とは関係しないという報告がある。これらの資料に基づいて鈴木 (1995)は、「全般的なアイデンティティの達成は青年期の課題であり、大学生では卒業が近づいた大学生活の後半でこの課題の達成が焦点となる」が、「同じ大学生でも専攻している学問領域や性別、或いはアイデンティティの個々の領域などの違いにより、異なった達成パターンがみられる」としている (53頁)。

(3)わが国の研究

以上の研究は、主としてアメリカ合衆国を中心とした外国の大学生の研究であり、わが国の大学制度、大学生とは異なる点も多いと思われる。わが国において、学生期の下位時期および学年に注目した研究としては、以下のものがある。

まず、教育制度に注目したものとして、下山他 (1991)は、わが国の大学生は、入学後においてそれまでの思春期の「管理された予期的社会化」のあり方から大学生活に適したあり方への転換を行う課題に直面し (五月病など)、次に猶予期において「遷延された思春期」の問題 (友人・異性関係や進路決定の問題、親子関係の問題など) が出現し、さらに模索期において、ある程度の「アイデンティティ確立」を達成していなければ卒業の準備が整ったことにならない (留年やアパシー)、と述べ、わが国の学生の学生期が受験体制を中心とした社会のあり方を反映するものであること、学生期がいくつかの期に分けられ、それぞれに異なった課題があることを指摘している (63頁)。

次に、学生相談の経験から学年についての印象を記述したものとして以下の文献がある。乾（1984）は、大学生の精神衛生相談について、「入学初期の時期に来るのか、2、3年生で来るのか、4年生で来るのかによって、それぞれの（中略）パターンがあるよう」と述べ（230頁）、学年の変化と学生の来談傾向に注目している。同様に、讃岐（1991）は、1年生では、「これまで抱えてきたさまざまな葛藤が浮上してくる」こと（38頁）、4年生では、「卒論、就職という大きなハードル（中略）に取り組むプロセスの中に、学生がこれまでに培った力が現れる」こと（39頁）を指摘している。吉良（1993a）は、学生期への全体的な視点として、「大学という場で20歳前後の4箇年を過ごす青年たちの姿を具体的個別的に理解し、彼らの成長・発達に教育的に関わる姿勢を模索していくためには、単に彼らを青年期というこの年代の一般的な発達段階の用語でひとまとめにして位置づけるのでは不十分であり、大学という固有の社会的状況・心理的状況の中に生きている存在として見ていく必要がある」と述べ、大学生が置かれた発達の、環境の状況に注目することの意義を強調している（49頁）。また、土川（1984）は、「学生の精神健康上の問題が初発する時期は、学業の進捗、進路などと関係があり、従って学年、学期との関連性も出て来る」と述べ（8頁）、1年生では、不本意入学、学生の抑うつⅠ型（入学後の挫折初体験型）、試験恐怖、再受験が問題となりやすく、2年生では、自殺、教養部留年が、3年生では、スチューデントアパシーが、4年生では、小集団内対人関係困難、学生の抑うつⅡ型（卒業恐怖）、自殺、卒業留年が、大学院では、モラトリアム入学、小集団内対人関係困難などが問題となりやすいことを指摘している（8-10頁）。また、山木（1990）は、大学入学直後の1学期には、入学以前に発症した学生と、入学後に新しい環境に適應できずに発症した学生の来談が多いこと、大学2・3年生では、入学後適應の努力を試みたが改善がない学生と、何らかの理由を契機に不適應に陥った学生の来談が多いこと、4年生では、就職活動、職業選択に直面して不安、葛藤を処理しきれなくなった学生の来談が多いことを述べ（499頁）、来談時期によって学生相談の特徴が異なることを指摘している。斎藤（1993）は、学生の心理発達プロセスを、教養学部時代（1～2年生）、専門学部時代（3～4年生）、大学院時代と分け、それぞれの特徴を示している。それによると、1年生では、「大学への適應、新生活の構築、自立への歩み」が、2年生では、「本質的な模索、幅広い体験、自己を見つめること」が、3年生では、「専門分野への参画、学部への適應」が、4年生では、「進路決定、就職・受験準備、卒業論文を通した本格的な自立」が、大学院前期課程1年生では「研究生生活への基盤づくり、研究室への適應」が、前

期課程2年生では、「修士論文への集中、再度の進路選択」が、後期課程では、「経済的・身分的な不安を抱えつつ研究活動を行うこと」が課題であるとされている(3-7頁)。この報告の特徴は、学年だけでなく、大学と学部の特徴に注目していることである。

学生期の下位時期ごとの特徴については、以上に述べた形での、学生相談の担当者が印象を記述した報告が多い。具体的な資料に基づいた研究としては次のものがある。早川他(1994)は、771名の女子学生を対象にして、不安と悩みについて質問紙によって調査している。そしてその結果を学年別に見て、1年生では「成績」、「大学の勉強法」、「授業について行けない」など学業についての不安や悩みが多いこと、2年生では、「クラブ・サークル活動」や「人つきあいとうまくゆかない」など対人関係の問題が他学年より多く、同時に「自分の身体にひげめを感じる」ことや「食べ物のことが頭から離れない」など身体へのこだわりが多いこと、3年生では「卒論」、「就職」、「女性としての将来の道」など、将来の進路についての不安が大きく、一方で、「劣等感」や「周りの人の評価」に関する悩みが多いこと、4年生では「卒論」、「就職」の悩みが中心であるが、「卒論」は3年生より少なく、就職や進路、性格などの悩みがもっとも少ないことを指摘している。そして全体をまとめて、学業についての悩みでは、卒論への不安や悩みが高学年に多いこと、成績についての悩みは、1年生に多くて学年が進むにつれて減少すること、将来の進路への不安は、4年生よりも3年生に多いこと、3年生が悩みの数や程度が他の学年よりも高く最も悩み多き学年であること、学業、対人関係、将来などの学生生活の領域ごとに学年による変化が見られること、などを特徴としてあげている(13-15頁)。これは、学生の悩みが学年によって異なることを示す数少ない調査研究である。

(4)下位時期ごとの特徴

ここでは学生期の下位時期ごとの特徴について、先行研究を概観する。

1)卒業期

a)卒業期の現実的課題

まず、卒業期の現実的課題が学生にとって大きな意味をもつことが指摘されている。森田(1989)は、学生相談機関に来談しない精神的健康度の高い4名の卒業期の女子学生を紹介し、就職が契機となって、今までの生き方、自分を取りまく環境や状況、これからの人生について考えることが課題となったことを指摘している。垣田・石田(1991)は、学

生相談センター精神科における、4年生64名の来談形態を他学年と比較し、4年生では、受診者数が全体の3割強と多いこと、自発来談以外の学生（3分の1）が他の学年に比べて多いこと、進路、就職、卒業論文、卒業試験、社会への出立などを契機として訪れる学生が多いこと、などを報告している。これは、学生相談センターの精神科医のもとに受診した学生についての数量的資料である。山田（1985）は、卒業期の現実的課題である就職、卒業を前にした学生の「就職恐怖・卒業恐怖」に注目し、40名の卒業期大学生を不安葛藤型と回避退却型にわけ、「幼・少年期をひきずった弱点、親依存をつよく残したひずみなどと関連した、性格を背景にして、この種、就職・卒業恐怖はみられる」としている（118頁）。これは直感的な研究であり、主として精神的健康度の低い学生に注目したものである。

b) 学生生活からの別れ

次に、卒業期には学生生活からの別れが課題となることが指摘されている。Grayson, P. A. (1989) は、4年生は、「新入生と同じようにもう一度すべてから分離しなければならぬ」と述べ、「大学における自分の成果を再検討し、これからの生活の準備をし、（略）アイデンティティ形成をいっそう押し進めること」が課題であり、「大学を終えることをめぐる両価性」が問題となると述べ（13頁）、卒業期に学生生活をまとめることの意義を強調している。Margolis, G. (1980, 1989) は、「移行の際に過去を確認し見直す」ことを強調し、「完結し分離すること」が課題であり、「学生はこれによって生および死への感覚を深める」と述べている（1980, 336頁）。またMedalie, J. D. (1981) は、「1年生の移行期に分離の課題が避けられた事例では、学生と両親との間の比較的調和のとれた関係が、4年生の急性の葛藤によって突然台無しになるだろう」と述べている（78頁）。

第3に、将来が課題となることが指摘されている。Medalie, J. D. (1981) は、4年生の課題として、「将来を予測して現実的な計画を立てること」をあげている。そして、「学生のうまくいっている主領域がつまづきを見せるのは、成人への移行がもはや避けられなくなった時である」と述べ、「4年生が不安定な感情をもつことは正常である」、「健全な学生においては、倦怠と悲しみ、および急性の不安が起こった場合、移行を予期したことがこのような苦しみとなったことを認識することによって、耐えられるものとなる」と述べ、「4年生がカウンセリングを求めてやってきた場合には、現在の訴えがどのようなものであれ、学生時代の終わりが迫っていることと何らかの形で関連している」ことを指

摘している（78頁）。

c) 卒業期大学生への援助

卒業期大学生への援助について、Margolis, G. (1980) は、①学生の苦しい状態の細部を明らかにすること。②卒業といった大きな変化につきものの、悲しみ、怒り、恐れ、興奮といった多面的な感情の表出を励ますこと。③変化を予測することによって、かつての移行期や喪失によって生じた、未解決な感情や記憶や考えを再活性化すること。④学生が援助を求めるのが、（中略）どの時点であるかによって、どこに問題があるかに気づくこと、という4点をあげ、卒業を前にした学生の感情の変化に注目している（337-338頁）。また、Margolis, G. (1989) は、「4年生にとって卒業はしばしば、治療の終結、治療という特別の関係を終えること、別の形で死を経験することを意味する」と述べ、卒業によって相談面接が終了することの意味が大きいことを指摘している。そして、「卒業が近づいた時、重要な生育史上の苦痛、犠牲、罪の問題が初めて話題になることは珍しくない」、「卒業が近づいた時、重要な生育史上の苦痛、犠牲、罪の問題が初めて話題になることは珍しくない」と述べ、「4年生が大学生活を情緒的に完結するのを援助すること」が大切であるとしている（87-88頁）。また、Medalie, J.D. (1981) は、「カウンセラーの役割は、学生が大学のライフサイクルで期待されている時間割から解放されるための援助をすることである」と述べ、場合によっては卒業期のさまざまな課題から学生を一時的に解放することが必要であることを指摘している（78頁）。

わが国では、山木（1990）が、卒業によって面接が中断する場合に、十分な分離の準備を行うことが必要であるとして、「症状が治癒、または軽快して就職していく場合でも、自己肯定感と安定した対象関係が、生活のどこかで保てているか、何らかの連続性（住居、交友関係、趣味など）が保持されているかを確認する」、「症状が治癒しない場合は、それまでの問題を整理し、社会に出て行く不安を取り上げ、少しでも自己評価が高くなるように支持的に接する。必要があれば卒業後も続けられる治療者を紹介する」、という2点をあげている（504頁）。

2) 入学期

a) 新しい生活への移行

Medalie, J.D. (1981) は、入学期を「家族から大学コミュニティの成員への移行期」と

とらえ、「過去を脱ぎ捨て、新しい生活へと足を踏み入れること」が課題であるとしている。そしてこの移行によって、「失ったものを悲しみ、新しい世界に入ることが面接の主題となる」と述べている(75-76頁)。Grayson, P. A. (1989) も同様に、この時期について、「子供時代の立場や生活様式を手放さなければならないと同時に、新しい環境と適合する方法を学ばなければならない」と述べている(11-12頁)。

b) 入学期の具体的課題

Margolis, G. (1989) は、入学期について、「これほど難しい発達上の瞬間があるだろうか」と述べ、3つの課題を指摘している。第1に、この時期は、「学生がなじみ深く(きわめて両価的であったとしても)安全と体験しているすべてのものから離れる分離の過程そのものであり、分離の過程を象徴している瞬間である」と述べ、「なじんだ世界からの分離」が課題であるとしている。第2に、「生活のほとんどの側面について自分で決めることが許されている」と述べ、「自由の中での自己決定」が課題であるとしている。第3に、「大学という新しい環境の中で、知的、社会的および身体的な側面についての、今までの能力が試される」と述べ、「能力の獲得」がこの時期の課題であるとしている(73頁)。このように、Margolis, G. は、新しい自由な環境の中で新入生が試されることを指摘している。また、Grayson, P. A. (1989) は、この時期の課題が達成されない場合には、問題が「ホームシックとか孤立といった形で明るみに出てくるし、学業低下といった問題からも推測することができる」と指摘している(12頁)。また、Margolis, G. (1981) は、入学直後の期間に焦点を当て、最初の数週間にさまざまな形で不安を示す学生が多いこと、この期間に新入生は、自分がどこにいてどうしていったらよいかを知るためのフィードバックを必要としていると述べ、「古い能力を再調整して新しい能力へと変えること」が求められるとしている(634頁)。

わが国において大学新入生に関する調査研究は数多くあるが、学生相談の経験に基づいた報告は少ない。光岡(1979)は、新入生の精神的な状況として、「受験勉強からの解放感、親からの独立と自主的な生活、マス講義と人間的接触の乏しさ、将来の進路への摸索、意欲の喪失、エリート意識とその挫折、精神障害の発生」が特徴であると述べている(32-38頁)。

吉良(1993b)は、185名の大学1年生に対して、「大学入学後1年の間に、どのような事柄で心理的混乱を感じたか」について記述することを求めている。その結果、1年生が

混乱しやすいのは、「日常生活場面」、「自分のあり方や性格」、「入学後の新しい友人関係全般」、「大学での学業面」、「入学後の新しい異性友人関係」についてであり（53頁）、「日常生活、対人関係、活動遂行」の領域で混乱が体験されていると指摘している（60-61頁）。また、吉良（1993a）は、1年生で来談した3名の男子学生の面接過程を記述し、学生期の前半は、「家族からの本格的な分離の時期」であり（49頁）、「彼らの体験する迷いや混乱、葛藤は、新たな段階へと成長する最中に起こる向こう傷のような面をもっている」と述べている（59頁）。

以上の文献から明らかなように、入学期の相談面接においては、新入生がいかにして過去の生活から離れ、新しい大学生活を開始するかという視点をもつことが意味をもつと思われる。

入学期の大学生への援助について、Margolis, G. (1989) は、カウンセラーが留意すべき点として、「発達上の好機について理解する際に、死と悲嘆という言葉を使い、当てはめること。このことによって、学生の悲しさ、怒り、興奮といった多面的な感情に共感できる」と述べ（75頁）、新入生の喪失と分離の体験に注目した援助が必要であることを指摘している。

入学期の大学生との相談面接では、どのようにして今までの生活から離れて新しい学生生活を開始しようとしているかに注目することが大切であり、このような課題への対応を学生とカウンセラーが言葉で確認し合って共通の認識とすることが意味をもつと思われる。

3) 中間期

a) 中間期の特徴

中間期にあたる2年生と3年生の時期は、一般に、入学期や卒業期と比べて大きな変化がない時期である。

2年生と3年生の共通点と相違点については、次の報告がある。福井（1995）は、大学2年生と3年生の123名に対して、大学生活の中で心理的に混乱を感じた事柄を5つあげ、その第3位までを具体的に記述するよう求めた。その結果、2年生と3年生では、「自己確立志向」、「親密関係形成志向」、「個人行動志向（将来、能力など）」が見られたこと、2年生では、友人、異性、クラブ・サークル活動などの横の人間関係での混乱が見られたこと、3年生では、将来や能力など現実的で個人的なことに混乱が見られたことを指摘している。

以下、2年生と3年生に分けて、文献を概観する。

b) 2年生の特徴

2年生では、自分らしさやアイデンティティの探究が行われ、将来の目標に向かって前進する側面と、無気力やスランプという後退する側面があることが指摘されている。

アイデンティティを探究する方向について、Arnstein, R. L. (1984) は、「1年生では分離の課題が最も生じやすく、2年生ではアイデンティティの問題が生じやすい」と述べて(649頁)、この時期にアイデンティティの問題が中心的な課題となることを強調している。Margolis, G. (1976) は、「希望にあふれた1年生と比べるとアイデンティティの危機、抑うつ」に陥りやすく、「学問が成長の指標とならない」、「少数の友人、異性との付き合いにおいて親密さへの要求が高まる」、「自分とは何かを問う」時期であるとしている(133-134頁)。

また、この時期の2つの側面を指摘したものとして以下の論文がある。Grayson, P. A. (1989)は、2年生は、一方では「内省的に人生について問う」ことや、「専攻の選択を通して、目標を設定する」ことを行う「自己吟味と選択の期間」であるが、一方では「スランプ、無気力、無関心に陥りやすい」時期であるとしている。そしてこの期間に「大学での経験になじむことによって、日常的な存在から退いて、自分の人生を問うことを促す」、「人生の方向を選択し始める」ことが行われるとしている(12頁)。また、Medalie, J. D. (1981) は、2年生の特徴として、「関心を明らかにし、将来の目標にいくらか関わることによって仕事に精通すること」と「無気力、疎外、抑うつといった2年生のスランプ」という両極的な2つの特徴をあげている(77頁)。Margolis, G. (1989) も、「2年生はまた、大学から自分の専攻を明らかにすることをしばしば求められる。象徴的に言えば、再び時間を引き受けること、つまり自分の将来を引き受けることを求められる」と述べている。しかし一方では、「2年生は概して落ち込んでおり、しばしばみずから落とし穴と呼ぶ状態にいる」と述べ、独特の抑うつをともなった状態を強調して、「興奮は退屈によって変わられ、役割の中に挑戦が入っていない」と述べている。そして2年生は「実存的な不安」や「意味の探究」を通して、「深い内面に目を向ける」と述べている(77頁)。

このように2年生は、大学からの課題が比較的少なく、今までの表面的な適応から自由になりやすく、一時的な不適応という形をとりながら真の適応への準備をする時期である。

c) 3年生の特徴

3年生では、対人関係が深まり、卒業が視野に入ることが指摘されている。Medalie, J. D. (1981) は、3年生の課題として、「個人的な関係が深まり相手を選ぶようになること」、「自分の能力を発揮するために必要な背景や研究方法を身につけること」、「成人世界における自分の位置に目を向け始めること」、「大学生活の終点に目を向け始めること」をあげ、特に卒業後の生活への注目を強調している(77-78頁)。Grayson, P. A. (1989) は、「3年生では引き続きアイデンティティの問題が強調される」、「卒業をめぐる問題が出始める」ことを指摘している(12-13頁)。

また、Margolis, G. (1989) は、3年生では、「親密さ」と「職業選択」と「精神性」が課題となることを指摘している。そして親密さについて、「親密になることから生じるストレスには5種類の源泉がある」として、「他人に関心をもち始め、親密になりたい欲望や欲求が生じてくると、不安を感じるようになる」、「親密な関係を結ぶためには、(略)あらゆる保護や、家や幼児期との絆を放棄しなければならない」、「多くの若い成人は、自分の両親との自律をめぐる戦いを、新しい関係へと転移させる。彼らは相手とつながりをもつことを望むが、しかし同時に自分の独自性を必要とし、要求する」、「学生にとっての親密さには、性的な感情や行動も含まれている」、「大学で仕事をする心理療法家は、親密な関係を終えて別れを迎えたさまざまな学生を相手にする」と述べている(81-83頁)。

次に、職業選択について、「第2の大きな主題は、職業上のジレンマ、つまり仕事をしている自分の姿を思い描き、仕事を実行に移し始めるという発達上の好機に関するものである」と述べ、「治療者はしばしば、両親や、仲間や教員といった他の人々の期待とまったく相反する形で職業決定をしようとしている学生と出会う」と述べている(83-85頁)。

また、精神性について、「第3の大きな主題は、精神および魂、つまり自己や神との関係を回復し作り出すような発達上の好機と関連したものである」と述べ、「学生生活のそれぞれの発達段階には、学生が、魂や想像力といった無意識や、崇高な力、神秘、宇宙といった神とのつながり(あるいはつながりのなさ)を自ら決定することが含まれている」として、この時期に学生が内面的世界と向き合うことの意義を強調している(85-86頁)。

また、わが国では小川(1989)が、女子学生にとっては、これまでと違った勉学態度や姿勢を求められる3年生の時期が大きな関門であり、これをうまく乗り越えられなくて適応困難をきたす女子学生がいることを指摘している。

中間期大学生への援助方法として、Margolis, G. (1989) は、学生の語る内面的話題を深く受けとめることの重要性を指摘し、「両価性やあいまいさといった深い感情の表現や、人生の意味を見出そうとすることから生じる避けがたい不安に対して、心の準備ができていなければならない」と述べている (79頁)。

4) 大学院学生期

学生相談の領域における大学院学生期の文献は多くない。Nelson, R. L. (1971) は、1960年代のアメリカ合衆国の大学院学生について、「青年期の混乱が障害となることはほとんど」なく、「学部学生に比べて、大学院生は、自分の問題にいつそうはつきりと気づいており、ふつう、自分から治療を求めてくるし、また、教職員や管理者に、自分の問題にいつそう介入させない傾向がある」と述べ (石井監訳, 267頁)、すでに青年期を通過した成人として記述している。しかし現代のわが国では大学院学生を成人と見る立場は少なく、例えば山田 (1981) は、「少年期の延長は、院生まで及んできた」、「学生の特徴が、大学院にそのままズレ込んでくる傾向がみえてきている」と述べ (81頁)、大学院学生の発達上の未熟さを強調している。中村 (1992) は、年を追うごとに学生相談機関への大学院学生の相談が増えていることを指摘し、「学業や進路問題が大きなテーマである」、「もう一つは対人関係にまつわる問題」と指摘している (16頁)。早坂 (1996) は、統計資料と面接資料に基づき、大学院学生の研究室への適応に焦点を当てて報告している。それによると、学部学生に比べて「進路」や「修学」の相談が占める割合が少なく、「心理性格」と「心身健康」の相談が多いこと、「心理性格」の相談では研究室への不適応を最初に訴える学生が多いこと、研究室がモラトリアムを保障する場となりにくいことを指摘している。

以上の文献から、大学院学生期では、将来の進路、研究室を中心とした対人関係が面接の主題となることが指摘されている。

また、大学院学生を取り巻く問題としては、大学院教育の目的の多様化、入学動機の多様化、再入学学生の増加、女子学生の増加、留学生の増加など大学院学生をめぐるさまざまな新しい問題がある。たとえば名古屋大学の自己評価報告書 (1993) において、大学院における学修目的として、「従来の研究者志向だけでなく、高度の専門家志向、更にはリフレッシュ教育志向も併せもつように多様化してきている」と述べられているように (100頁)、近年、大学院教育の目的が、狭い意味での研究者養成から、広い意味での専門家養

成へと多様化してきている。また、学生の入学動機も変化してきており、研究者としての自己確立、専門性の習得という目的が明確な者から、動機があいまいで社会に出る時間を引き延ばしていると思われる者までさまざまな学生がいる。

2.1.3 方法

筆者が面接した305事例を来談時期によって分け、それぞれの来談時期ごとに、来談形態の特徴、相談内容の特徴、面接の主題の特徴を記述した。305事例とは、筆者が1985年度から1991年度にかけてA大学学生相談室において相談を担当した学生の総数である(表1)。

表1 学年ごとの来談学生数

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	前期	前期	後期	研究生	計
					1年生	2年生	課程	他	
人数	142	51	22	28	17	17	11	17	305
%	46.5	16.7	7.2	9.2	5.6	5.6	3.6	5.6	100.0

来談時期の区分については、第1章で述べたように、便宜的に学年に基づいて、入学期、中間期、卒業期という3つの下位時期に区分し、大学院学生期を加えた。「入学期」とは、大学入学後1年以内の期間を言う。「中間期」とは、入学期と卒業期を除いた学生期の中間の期間を言う。「卒業期」とは、卒業前1年以内の期間を言う。また、「大学院学生期」とは、大学院への入学から修了(博士課程前期および後期課程)までの期間を言う。「大学院修了期」とは、大学院学生の卒業期にあたる、博士課程前期および後期の、修了前1年以内の期間を言う。

また、各下位時期の来談学生を、精神的健康度によって4群に分けた。I群(健康群)とは、神経症の問題などをもたない、心理的に比較的健康と判断された学生を言う。II群(神経症群)とは、神経症の問題をもった学生を言う。また、面接過程の進展上共通点が多いことから、軽度の抑うつ状態の学生も含める。III群(性格障害群)とは、性格障害の問題をもった学生を言う。IV群(精神障害群)とは、精神病的問題をもった学生を言う。

これは、DSM-IV（『精神障害の診断と統計のための手引き』, American Psychiatric Association, 1994）の第V軸である、GAF尺度（機能の全体的評定尺度, Global Assessment of Functioning Scale）では、およそI群（尺度 100-71, 比較的健康的な学生）、II群（尺度 70-61, 軽い症状をもつ学生）、III群（尺度 60-51, 中等度の症状をもつ学生）、IV群（尺度 50以下, 重大な症状をもつ学生）となる。群の評定は、面接記録に基づいて筆者が行った。

「相談内容」とは、学生が初回面接で述べた相談の内容を言う。先に述べたように、学生相談の相談内容の分類については、大学ごとに分類の方法が異なっており、統一されたものはない。下山（1989）ではそれらを統一する試みが行われ、心理性格（自己の心理状態や性格に関する相談）、対人関係（具体的対人関係に関する相談）、心身健康（心理面あるいは身体面の健康上の問題に関する相談）、進路修学（進路および進学に関する具体的相談）学生生活（学業以外の学生生活上の問題に関する相談）、その他、と分類されているが、現時点では広く普及するには至っていない。そのためここでは、学生が初回面接で述べた相談内容を記述する。

「面接の主題」とは、面接の中で学生が自主的に繰り返し語った話題を言う。ここでは面接の主題を、学業、進路、学生生活、対人関係、親子関係という、学生生活で重要と考えられる5つの領域に分けて述べる。「学業」とは、講義、研究、ゼミ、卒業論文などの、大学の教育課程に関する領域を言う。「進路」とは、現在の大学・学部・学科への入学、進路変更希望、専攻の選択、将来の進路選択、就職活動などの領域を言う。「学生生活」とは、クラブ・サークル、大学祭、研究室における生活、アルバイトなど、学業以外の学生の生活全般の領域を言う。「対人関係」とは、同性・異性の友人との関係、クラブ・サークルでの関係、研究室での先輩・後輩・教官との関係など、家族以外の人物との対人関係の領域を言う。「親子関係」とは、親子関係を主とした家族との関係の領域を言う。

領域ごとの主題の評定については、面接記録に基づいて筆者が行った。1回で終了した事例については、一つの話題が面接時間の4分の1以上を占めたものを主題とし、2回以上継続した事例については、一つの話題が面接時間の4分の1以上を占める回が2回以上あったものを主題とした。本研究は、筆者自身が相談面接を担当して、学生と相互的な関わりをもった事例の特徴について検討するものである。そのため評定については、主観的判断をまぬがれない点があるが、筆者自身が行った。

2.1.4 結果

主要な結果について、1. 来談形態の特徴と、2. 相談内容と面接の主題の特徴とに分けて報告する。

2.1.4.1 来談形態の特徴

来談形態の特徴について以下に述べる。ここで来談形態の特徴とは、来談学生数、来談経路、来談月、平均面接回数、面接の終わり方を言う。

(1) 来談学生数

「来談学生数」とは、各下位時期に来談した学生の数を言う。また、「I群の来談率」とは、各下位時期の来談学生の中で、健康群であるI群の学生が占めた割合を言う。各時期の来談学生数を表2および図1に示した。

表2 来談学生数

下位時期		入学期	中間期	卒業期	大学院学生期	大学院修了期
類 型	I群	118 (12) (83.1)	32 (7) (43.8)	7 (2) (25.0)	30 (4) (48.4)	7 (0) (41.2)
	II群	15 (1) (10.6)	22 (3) (30.1)	10 (1) (35.7)	15 (0) (24.2)	8 (0) (47.0)
	III群	5 (1) (3.5)	11 (3) (15.1)	4 (2) (14.3)	9 (2) (14.5)	1 (0) (5.9)
	IV群	4 (1) (2.8)	8 (3) (11.0)	7 (0) (25.0)	8 (1) (12.9)	1 (0) (5.9)
	計	142 (15) (46.5)	73 (16) (23.9)	28 (5) (9.2)	62 (7) (20.4)	17 (0) (5.6)

(注) 上段は来談学生数, ()は女子内数

下段 ()は%

大学院修了期とは、大学院学生期のうち前期課程2年生と後期課程3年生を言う。

(以下の表でも同じ)。

入学期の来談学生数は、全来談学生数の5割弱であり、その8割以上を健康群であるI群が占め、II群が1割で、他の群は少なかった。入学期には、比較的健康な学生の短期間

の来談が多く見られた。

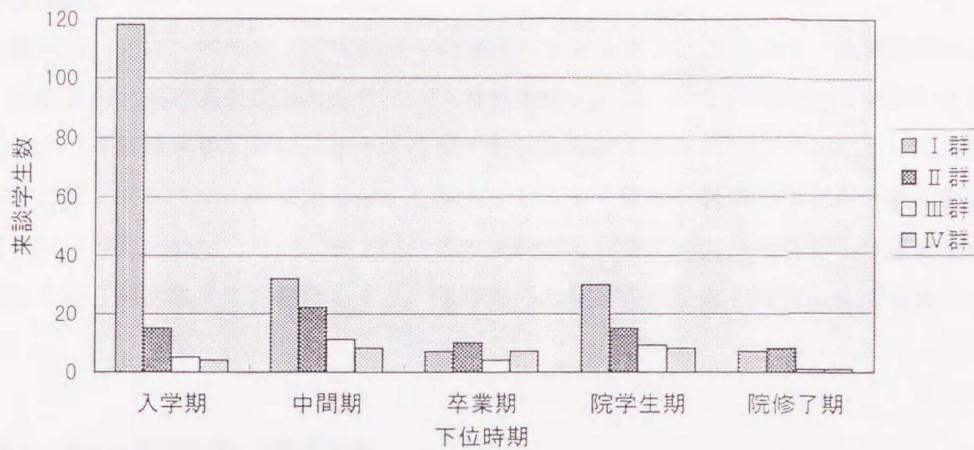


図1来談学生数

中間期の来談学生数は、全来談学生数の約2割であり、2年生(16.7%)が3年生(7.2%)よりも多かった。また、I群(約4割)とII群(約3割)が多く、III群とIV群はそれぞれ1割強であった。中間期には、比較的健康的な学生の来談と神経症的な学生の来談が多く見られた。

卒業期の来談学生数は、全来談学生数の約1割であった。他の下位時期に比べて、I群の割合(2.5割)が低く、II群(3.5割)とIV群(2.5割)の割合が高かった。卒業期には、健康群であるI群の割合が低く、神経症群、精神障害群の割合が高かった。

大学院学生期の来談学生数は、全来談学生数の約2割であり、I群が約5割と多く、II群が2.5割であった。前期1年生では、情報を求めて来談した比較的健康的な学生が多く見られた。前期2年生では、神経症群が多いことが特徴であり、学生期における卒業期の特徴と似ていた。後期課程では群間の特徴は見られなかった。

このように、入学期に健康群であるI群が多く、I群の来談率は学年が上がるにつれて下がる傾向が見られ、卒業期では低かった。また大学院学生期でも、入学後にI群が多く、学年が上がるにつれてI群の来談率が下がる傾向が見られた。II群の割合は、大学院修了期、卒業期、中間期の順に高く、卒業期および大学院修了期には、神経症的問題をもつ学

生が、卒業や修了を前にして来談して内面的作業を行った。Ⅲ群とⅣ群については、下位時期ごとの特徴はなく、各下位時期において一定数の学生が来談した。

(2) 来談経路

「来談経路」とは、学生の学生相談室への来談の仕方を言う。ここでは、来談経路を大きく、自発来談と非自発来談とに分けた。「自発来談」とは、学生が自発的に来談した場合を言う。「非自発来談」とは、学生が家族や教職員や友人からの紹介などによって来談した場合、および学生本人が来談しなくて学生を取り巻く家族や教職員などが来談した場合を言う。「自発来談率」とは、各下位時期の来談学生（学生本人が来談しない場合を含む）の中での自発来談学生の割合を言う。各時期の自発来談学生数と自発来談率を表3に示した。

表3 自発来談学生数と自発来談率

下位時期		入学期	中間期	卒業期	大学院学生期	大学院修了期
類 型	I群	109 (92.4)	29 (90.6)	7 (100.0)	29 (96.7)	7 (100.0)
	II群	10 (66.7)	19 (86.4)	6 (60.0)	9 (60.0)	4 (50.0)
	III群	4 (80.0)	6 (54.5)	4 (100.0)	5 (55.6)	0 (0.0)
	IV群	2 (50.0)	4 (50.0)	4 (57.1)	6 (75.0)	1 (100.0)
	計	125 (88.0)	58 (79.5)	21 (75.0)	49 (79.0)	12 (70.6)

(注) 上段は自発来談学生数
下段()は自発来談率(%)

入学期では、自発来談率が他の下位時期と比べてもっとも高かった(88.0%)。I群が多く、その9割が自発来談であった。自発来談率は、Ⅲ群、Ⅱ群、Ⅳ群の順で低くなった。入学期の非自発来談としては、家族からの紹介および家族の相談が見られた。

中間期の自発来談率は8割弱であった。他の下位時期に比べてⅡ群の自発来談率が高く、

神経症的な問題を契機として自発的に来談する学生が多く見られた。非自発来談としては、教職員からの紹介が見られた。

卒業期の自発来談率は7.5割であり、I群とIII群では全員が自発来談であり、II群とIV群では非自発来談の割合が各約4割と高かった。卒業期には、健康群で自発的に来談する学生と、神経症的、精神障害的問題を契機として、周囲から勧められて来談する学生がいた。

大学院学生期の自発来談率は約8割と高く、I群の学生が多く見られた。前期1年生では、自発来談が多く(88.2%)、前期2年生(自発来談率70.6%)と後期課程(自発来談率72.7%)では、指導教官からの紹介と学生の問題についての教官の相談が見られた。

このように、自発来談率は入学期、中間期、卒業期の順に高く、卒業期では他の時期に比べて低かった。大学院学生期では、入学直後の前期1年生が他の学年に比べて高かった。また、自発来談の学生数は各下位時期において異なったが、非自発来談の学生数は各下位時期においておよそ一定であった。

(3)来談月

「来談月」とは、学生が初めて学生相談室に来談した時期を言い、ここでは学生が来談した月で表す。また、「新学期的来談率」とは、各下位時期の来談学生の中で、新学期である4月と5月に来談した学生の割合を言う。各時期の新学期的来談学生数と来談率を表4に示した。

入学期では、新学期的来談率は、7割弱(66.2%)と他の下位時期に比べて高く、入学直後から夏期休暇前までの期間に来談した学生が多く見られた。I群(約7割)とII群(6割)およびIV群(5割)で高く、入学後のさまざまな問題を契機として来談した学生と、入学以前からの問題を契機として来談した学生が見られた。III群では来談月の特徴は見られなかった。

中間期では、新学期的来談率は3.5割(35.6%)と入学期に比べて低く、II群で新学期的来談率が比較的高かった(5割)が、他の群では新学期以外の来談が多く見られた。

表4 新学期の来談学生数と来談率

下位時期		入学期	中間期	卒業期	大学院学生期	大学院修了期
類 型	I群	83 (70.3)	10 (31.3)	0 (0.0)	11 (36.7)	3 (42.9)
	II群	9 (60.0)	11 (50.0)	1 (10.0)	1 (6.7)	1 (12.5)
	III群	0 (0.0)	3 (27.3)	0 (0.0)	2 (22.2)	0 (0.0)
	IV群	2 (50.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	1 (12.5)	0 (0.0)
	計	94 (66.2)	26 (35.6)	1 (3.6)	15 (24.2)	4 (23.5)

(注)

上段は新学期の来談学生数
下段()は来談率(%)

卒業期では、新学期の来談率は他の下位時期と比べて極めて低く(3.6%)、新学期以外の、年度の後半の来談が多く見られた。I群では、進路決定の前後の来談が見られ、II群では、それに加えて神経症状の発現後の来談が見られた。III群とIV群では、就職や卒業論文といった卒業期の現実的課題に対処する際の来談が見られた。

大学院学生期では、I群で新学期の来談が比較的多く見られた(約4割)他は、来談月の特徴は見られなかった。前期1年生では、I群とIII群で新学期の来談が多く見られた。前期2年生では、I群で進路決定前後の来談が多く、II群では進路決定の前後および神経症状の発現後の来談が多く見られた。後期課程では、来談月の特徴は見られなかった。

このように、新学期に来談した学生の割合は、入学期で高く(66.2%)、卒業期には低かった(3.6%)。大学院では前期課程1年生で高かった。入学期では、入学直後の来談が多く、卒業期では卒業を前にした来談が多く見られた。

(4)平均面接回数

「平均面接回数」とは、相談面接の開始から終わりまでの面接回数の平均を言う。簡単な情報提供の事例を除いて、1回の面接時間は約50分間であった。各時期の平均面接回数を表5に示した。

入学期の平均面接回数は他の時期に比べて少なかった。I群では、入学後の学生生活への助言で終了した短期間の来談が多く見られた。また、人数は多くないが、継続面接の中で一つの心理的作業を行った学生がいた。II群とIV群では、長期間にわたって面接を継続する学生が見られた。

表5 平均面接回数

下位時期		入学期	中間期	卒業期	大学院学生期	大学院修了期
類 型	I群	2.1	3.8	7.3	5.0	(6.9)
	II群	36.8	16.6	13.1	20.2	(20.6)
	III群	14.2	23.2	25.5	31.6	(8.0)
	IV群	29.5	2.8	4.4	5.5	(3.0)
	計	7.0	10.5	11.3	12.3	(13.2)

(注) 数字は平均面接回数

中間期では、平均面接回数は10.5回であり、III群とII群の平均面接回数が多いことが特徴であった。

卒業期では、平均面接回数は11.3回と比較的多かった。特に、III群とII群で多く、IV群で少なかった。他の下位時期と比較したI群の面接回数は多く、自分を見つめるために来談した学生が見られた。II群では、神経症的問題を契機として自分を見つめる学生が多く見られた。

大学院学生期では、III群とII群の平均面接回数が多かった。前期1年生では、II群で多く、前期2年生では、II群とIII群で多く、IV群とI群で少なかった。後期課程では、II群とIV群が多かった。

このように、平均面接回数は、大学院学生期、卒業期、中間期、入学期の順に多く、学年が上がるにつれて多くなる傾向が見られた。また、各下位時期を通して、II群とIII群の平均面接回数が多いことが特徴であった。

(5)面接の終わり方

「面接の終わり方」とは、相談面接の終わり方を言う。1回で終わった場合は、その回の終わり方を言い、継続の場合は、最終回の終わり方を言う。ここでは面接の終わり方を、終了と中断とに分ける。「終了」とは、学生とカウンセラーが面接を終ることを確認して終わった場合を言う。助言で終わった場合や、学生を取り巻く人々への助言で終わった場合を含む。「中断」とは、学生とカウンセラーが面接を終ることを確認することなく終わった場合を言う。「面接の終了率」とは、各下位時期の来談学生の中で、終了した学生の割合を言う。各時期の面接の終了率を表6に示した。

表6 面接の終了率

下位時期		入学期	中間期	卒業期	大学院学生期	大学院修了期
類 型	I群	110 (93.2)	29 (90.6)	7 (100.0)	28 (93.3)	7 (100.0)
	II群	10 (66.7)	17 (77.3)	6 (60.0)	12 (80.0)	6 (75.0)
	III群	3 (60.0)	6 (54.5)	1 (25.0)	4 (44.4)	1 (100.0)
	IV群	3 (75.0)	6 (75.0)	3 (42.9)	6 (75.0)	0 (0.0)
	計	126 (88.7)	58 (79.5)	17 (60.7)	50 (80.6)	14 (82.4)

(注) 上段は終了学生数
下段()は終了率(%)

入学期の面接の終了率は9割弱と高かった。中でもI群では終了率が9割強と高く、助言で終了した学生と、短期間に一つの心理的作業を行って終了した学生がいた。II群以下では、6割から7割の学生が終了し、3割から4割の学生が中断した。

中間期の終了率はおよそ8割であり、入学期より低かった。I群が高く、II群とIV群が続き、III群の終了率が低かった。

卒業期の終了率は約6割と低かった。I群では、全員が一つの心理的作業をして終了した。II群では、6割の学生が一つの心理的作業をした後に終了し、4割の学生が中断した。

Ⅲ群とⅣ群では、中断や紹介など、終了しない事例が多く見られた。

大学院学生期では、約8割の学生が終了した。前期1年生のⅠ群では、助言による終了が多く見られた。前期2年生の、Ⅰ群の全員およびⅡ群の7割強の学生が一つの心理的作業の後に終結した。後期課程のⅠ群とⅡ群では終了が多く、Ⅲ群とⅣ群では中断が見られた。

このように終了率は、学生期では入学期、中間期、卒業期の順に高かった。大学院学生期でも、入学後の方が大学院修了期よりも高かった。また、各下位時期を通して、Ⅰ群の終了率が高かった。これは、比較的健康的な学生への助言による終了が多かったためである。Ⅱ群以下では、終了と中断が見られた。

(6) 来談形態の特徴から見た卒業期の特徴

各時期の来談形態の特徴を表7に示した。

表7 来談時期から見た全体的特徴と来談形態の特徴

	入学期	中間期	卒業期	大学院学生期	大学院修了期	
全体的特徴	比較的健康的な学生の入学に伴う短期間の相談。入学以前から抱えてきた未解決な問題の相談。	学生生活の情報を探求めて来談。比較的安定した学生生活の中での未解決な課題への取り組み。	卒業前の現実的課題への取り組み。卒業を前にした内面の見つめ直し。	大学院入学後の適応、将来の問題への取り組み。研究、対人関係などの困難な現実的問題。	研究、進路などの修了期の現実的問題への取り組み。修了を前にした内面の見つめ直し。	
来談形態の特徴	来談学生数 ()は女子内数	142 (15)人 46.6%	73 (16)人 23.9%	28 (5)人 9.2%	62 (7)人 20.3%	17 (0)人 5.6%
	Ⅰ群の来談率	83.1%	43.8%	25.0%	48.4%	41.2%
	自発来談率	88.0%	79.5%	75.0%	79.0%	70.6%
	新学期の来談率	66.2%	35.6%	3.6%	24.2%	23.5%
	平均面接回数	7.0回	10.5回	11.3回	12.3回	13.2回
	終了率	88.7%	79.5%	60.7%	80.6%	82.4%

- (注) ・Ⅰ群の来談率とは、各期の来談学生の中でのⅠ群(健康群)の学生の割合を言う。
 ・自発来談率とは、各期の来談学生の中での自発来談学生の割合を言う。
 ・新学期の来談率とは、各期の来談学生の中での4月と5月の来談学生の割合を言う。
 ・終了率とは、各期の来談学生の中での面接の終了を確認して終わった学生の割合を言う。

他の下位時期と比較した卒業期の来談学生の来談形態の特徴は、精神的健康度の低い学生が多いことと、継続面接が多いことであった。

来談学生数の割合は、およそ入学期に5割、中間期に2割、大学院学生期に2割であるのに対して、卒業期は1割と少なかった。I群の来談率、自発来談率、終了率は、精神的健康度の高さを示す指標と考えることができるが、入学期、中間期、卒業期の順に、自発的に来談して終了する健康な学生の割合が高い傾向にあった。大学院学生期でも、I群の来談率、自発来談率については大学院入学後の学生の方が大学院修了期の学生よりも高かった。平均面接回数は、心理的作業の継続度を示す指標と考えられるが、大学院学生期、卒業期、中間期、入学期の順に継続的な面接が行われた。新学期の来談率は、新学期である4月と5月に来談する学生の割合を示す指標であるが、入学期、中間期、卒業期の順に新学期の早い時点で来談する学生の割合が高かった。大学院学生期では、時期による違いは見られなかった。

2. 1. 4. 2 相談内容と面接の主題

(1) 卒業期に来談した事例の特徴

卒業期に来談した事例の相談内容と面接の主題を、表8に示す。

1) 相談内容

I群では進路、学生生活、対人関係、恋愛と相談内容は多岐にわたった。II群では無気力、不登校、抑うつなどの神経症的な相談内容が大半を占め、他に将来への不安を語った。III群では現実生活での卒業研究、進路決定を前にした混乱、対人関係を、IV群では精神障害をめぐる問題を語った。

卒業期のI群では、相談内容の特徴は見られず、卒業を前にしたさまざまな問題を語った。II群以下では、主として心理的、精神的問題を語った。

2) 面接の主題

a) 学業の領域

I群では、進路との関連で専攻をめぐる問題を語った。II群では、神経症的問題のため

卒業研究や論文がうまく進まないことを語った。Ⅲ群とⅣ群では、研究や進路などの卒業期の現実的課題を前にした混乱、卒業の延期、留年について語った。

学業の領域では、卒業研究の主題の決定、就職や進学のための準備、卒業研究への集中、卒業論文の完成が主題となった。この時期の心理学的特徴は、研究という知的生産活動の体験的学習をすることであった。

表8 卒業期に来談した事例の相談内容と面接の主題

	I 群	II 群	III 群	IV 群
人数	28(5)	10(1)	4(2)	7(0)
	(25.0%)	(35.7%)	(14.3%)	(25.0%)
相談内容	進路 2 学生生活 3 対人関係 1 恋愛 1	無気力 3、不登校 2 抑うつ 2、違和感 1 対人緊張 1 将来への不安・決められなさ 1	混乱状態 2 (卒論、就職を前に) 対人関係 2	精神障害 3 学生生活の難しさ 1 不登校 1 医療機関への不満 1
面接の主題	・学業 2 進路との関連 ・進路 6 進路決定をめぐる不安、親子の葛藤 ・生活 4 学生生活を振り返る社会生活への抵抗 ・対人 3 研究室での関係、異関係 ・親子 4 進路との関連。父親への反発から受容	・学業 8 神経症的問題のため研究の困難 ・進路 8 進路の迷い、決定後の不安 ・生活 5 学生生活を振り返る ・対人 4 孤立、対人関係を振り返る ・親子 8 親との関係を整理	・学業 3 取り組みなさ ・進路 4 将来の不安 ・生活 3 休学 ・対人 4 難しさ、不信感 ・親子 4 親への不信感	・学業 5 取り組みなさ ・進路 5 将来の不安 ・生活 5 生活の難しさ ・対人 5 希薄さ、被害感 ・親子 2 少ない

(注) 数字は人数，() は女子内数

b) 進路の領域

I 群と II 群では、進路の決められなさや迷いなどの進路決定をめぐる問題、就職試験後の不安、進路決定過程における親の期待と自分の意志とのズレについて語り、III 群と IV 群では、精神障害にともなう現実的な不安、症状と進路、留年について語った。

卒業期の来談学生にとって、進路の問題はすべての群で中心的な話題となり、研究室への所属感、卒業後の進路選択、卒業後の進路のための準備活動、進路の決定が主題となった。心理学的特徴としては、卒業期の現実的課題に対応すること、進路選択をめぐる親子の葛藤（職業、就職後の居住場所など）、選択しない進路との別れの作業、卒業への抵抗感などが見られた。

c) 学生生活の領域

I群とII群では、卒業期のさまざまな課題、社会人となることへの抵抗感などを語り、学生生活を振り返る作業を行った。III群とIV群では、現在の学生生活の困難さを語った。

学生生活の領域では、学生生活の終了、友人との別れが主題となった。心理学的特徴としては、学生生活の振り返り、新しい生活への準備など、学生生活からの移行の問題が見られた。Grayson, P. A. (1989) は、卒業期大学生の心理学的特徴として、学生生活を終わることをめぐる両価的感情を指摘している。

d) 対人関係の領域

すべての群で対人関係の主題を語った。I群では研究室での対人関係、失恋体験を、II群では対人関係の難しさ、III群では他人への不信感を、IV群では対人関係の希薄さを語った。II群では現在の問題と重ねる形で過去の対人関係を語った。

対人関係の領域では、研究室などの小集団の中での対人関係、卒業による別れが主題となった。心理学的特徴としては、教官や先輩との縦の対人関係が主題となりやすいこと、卒業を前にして大学時代および過去の対人関係を振り返ることがあげられる。Grayson, P. A. (1989) は、学生がこの時期に再び分離を体験することを指摘している。

e) 親子関係の領域

I群では、進路と関連する形で親子関係を語った。I群とII群では、親への否定的感情を語ることからしだいに親を受け入れる方向へと変化する事例が見られた。特に卒業期では、父親を受け入れることが主題となる事例が比較的多く見られた。入学期には、親（特に母親）からの分離が主題となることが多いのに対して、卒業期、大学院学生期では、親（特に父親）を受け入れることが主題となった。これは、卒業期には社会生活へと移行すること、職業をもつことが課題となり、学生が父親的存在を通して自分の社会性を問い直すことを行ったためと思われる。III群では、親への不信感を語った学生がいた。IV群では、親子関係について語った学生は少なかった。

親子関係の領域では、進路をめぐる話し合い、親との関係の再構築が主題となった。心理学的特徴としては、進路、将来設計をめぐる学生の意志と親の期待とのズレ、父親を受け入れることが見られた。

f) まとめ

卒業期には、卒業を前にして未解決な問題に取り組んだ学生と、卒業前の混乱を示した学生がいた。卒業期には、学生生活の終了と社会生活への移行、現実生活の課題を通した

内面の整理が主題となった。心理学的特徴としては、面接の中で、もう一つの卒業論文を書くような心理的作業を行った学生がいたこと、将来への準備をすることがあげられる。

(2)他の時期に来談した事例の特徴

相談内容と面接の主題について、卒業期と比較する形で、各下位時期ごとの特徴を以下に述べる。

1)入学期

入学期に来談した事例の相談内容と面接の主題をまとめたものが表9である。

表9 入学期に来談した事例の相談内容と面接の主題

群	I群	II群	III群	IV群
人数 計142	118 (12) (83.1%)	15(1) (10.6 %)	5(1) (3.5%)	4(1) (2.8%)
相談内容	学業 36 進路変更・将来の進路 51 学生生活 20 対人関係 7 家族 4	対人緊張・対人恐怖 8 無気力 2 不潔恐怖 2 吃音 1 その他 2	不登校 2 自己臭 1 教官とのトラブル 1 進路変更 1	精神障害 2 抑うつ 1 その他 1
面接の主題	<ul style="list-style-type: none"> ・学業 42 入学期の修学の問題単位、履修方法 ・進路 53 進路変更をめぐる情報、迷い、決意 ・生活 61 とけ込めなさ、勧誘事故 ・対人 15 友人との別れ、関係のもてなさ ・親子 10 進路をめぐる葛藤、家族の障害、離婚 	<ul style="list-style-type: none"> ・学業 5 神経症にともなう集中困難、意欲減退 ・進路 6 進路変更、入学後の進路の迷い ・生活 15 神経症的問題のため生活の難しさ ・対人 13 関係のもてなさ、対人恐怖 ・親子 7 親からの自立、親子関係の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ・学業 2 意欲減退 ・進路 2 入学後の進路の迷い ・生活 5 大学生生活の難しさ ・対人 3 引きこもり、不信感 ・親子 2 家族への両価的感情 	<ul style="list-style-type: none"> ・学業 2 障害と学業、講義 ・進路 0 ・生活 4 とけ込めなさ、違和感 ・対人 3 関係の難しさ ・親子 2 親の期待との葛藤

(注) 数字は人数, () は女子内数

相談内容として、進路、学業、学生生活など、新しい生活の開始にともなう問題を語った。また、II群以下（II群、III群、IV群）では、学生が入学以前から抱えてきた問題を語った。

面接の主題として、学業の領域では、受験勉強から離れること、カリキュラムに慣れる

こと、大学での初めての試験を経験すること、学生が自分の関心領域を選ぶことが主題となった。進路の領域では、入学した大学や学部への所属感、学科や専攻の選択が主題となった。学生生活の領域では、学生生活を新しく開始する上でのさまざまな問題（下宿、クラス、クラブ・サークル、アルバイトでの問題）が主題となった。対人関係の領域では、今までの友人から別れて、新しい対人関係を開始することが主題となった。親子関係の領域では、学生が親や家族から物理的、心理的に離れて、しだいに対等な関係を作ることが主題となった。

このように入学期では、学生は大学への入学にともなう問題と、学生が入学以前から抱えてきた問題を語り、入学以前の生活からの分離と新しい生活の開始が主題となった。Ⅰ群では、来談時期によって相談内容や面接の主題に特徴が見られた。Ⅱ群以下では来談時期による相談内容、面接の主題の特徴は見られなかった。心理学的特徴としては、自由の中で自己決定を行うことが課題となり、入学後の高揚感と落ち込みを語った。

2) 中間期

2年生と3年生で来談した事例の、相談内容と面接の主題をまとめたものが、表10、表11である。

相談内容は、Ⅰ群では、進路変更、将来の相談と、対人関係、学生生活の相談が多く、Ⅱ群以下では相談内容の学年ごとの違いは見られなかった。

面接の主題は、学業の領域では、中だるみ、学業以外の領域への関心の広がり、専攻の決定をめぐる問題が主題となった。進路の領域では、学科や専攻への所属感、研究室の選択、将来への展望が主題となった。学生生活の領域では、自分らしい学生生活の展開と、新規課題が少ない生活の中でのスランプが主題となった。対人関係の領域では、同性・異性との対人関係の広がりや深まり、リーダーシップなど集団の中での役割が主題となった。親子関係の領域では、変化が少ない時期であった。

中間期の来談学生は、一方で、無気力やスランプを語り、一方で、生活の充実感や生きがいを語った。また、対人関係をめぐる話題を多く語った。この時期は、中だるみの時期であると同時に学生生活を展開する時期であり、自分らしさを探究する時期であった。心理学的特徴としては、曖昧さの中での内面的深まりが見られること、同年代との親密な対人関係を築くことが見られた。

表10 中間期(2年生)に来談した事例の相談内容と面接の主題

	I 群	II 群	III 群	IV 群
人数 51(11)	24(6) (47.1%)	17(2) (33.3%)	7(2) (13.7%)	3(1) (5.9%)
相談内容	学業 2 進路変更 8 将来の進路 3 対人関係 4 留年2、トラブル 3、家族 1、 社会人入学 1	進路 2 留年後の学生生活 2 無気力 3 対人関係(孤立など) 5 過食 1、その他 4	学業 1 進路 2 対人関係 2 自分への違和感 1 無気力 1	留年 1 通院 1 大学生生活・将来への不安 1
面接の主題	・学業 12 意欲減退、関心の変化 ・進路 13 進路変更 ・生活 8 留年後の生活、トラブル、事故、家族 ・対人 4 異性関係、クラブでの役割 ・親子 3 家族の障害、病気	・学業 10 学習困難、留年後の学業 ・進路 7 進路変更、将来の決められなさ ・生活 13 神経症的問題、無気力、目的のなさ ・対人 8 対人緊張、関係のもてなさ、リーダーシップ ・親子 4 親への内面的感情	・学業 4 単位取得留年 ・進路 5 決められなさ、留年 ・生活 4 無気力、内閉的生活 ・対人 6 対人恐怖トラブル ・親子 4 親への否定的感情	・学業 2 集中困難単位取得 ・進路 1 将来への不安 ・生活 3 うまくいかなさ ・対人 1 関係の希薄さ ・親子 0 なし

(注) 数字は人数, () は女子内数

表11 中間期(3年生)に来談した事例の相談内容と面接の主題

	I 群	II 群	III 群	IV 群
人数 22(5)	8(1) (36.4%)	5(1) (22.7%)	4(1) (18.2%)	5(2) (22.7%)
相談内容	進路変更 1 休学 1 事故・トラブル 3 対人関係 2 家族 1	進路変更 1 対人緊張・不安 3 自分の性格 1	不登校 1 対人関係のトラブル 3	抑うつ 1 被害感 1 不登校 1 復学後の大学生生活1 通院 1
面接の主題	・学業 2 進路との関連 ・進路 2 将来と進路変更、休学と親子関係 ・生活 7 事故の処理、家庭教師の悩み ・対人 2 サークルの関係、リーダーシップ ・親子 3 家族の障害、病気、離婚	・学業 3 神経症にともなう学業困難 ・進路 2 進路変更、将来への焦り ・生活 3 味気なさ、貧しさ ・対人 3 雑談の回避、緊張、関係の薄さ ・親子 3 親との関係を整理	・学業 2 学習困難不登校 ・進路 1 決められなさ ・生活 3 サークルのトラブル ・対人 3 孤立 ・親子 2 否定的感情	・学業 3 退院後の学業 ・進路 1 将来への不安 ・生活 4 通院と大学生生活 ・対人 3 被害的、内閉的生活 ・親子 0 なし

(注) 数字は人数, () は女子内数

3)大学院学生期

前期課程1年生、前期課程2年生、および後期課程で来談した事例の相談内容と面接の主題をまとめたものが、表12、表13、表14である。

大学院学生は近年、再入学学生が増加するなど、その年齢幅が広がりを見せているが、本研究では、45名中1名が30歳代前半であるのを除いて、全員が20歳代であった。なお、研究生その他の学生が17名いたが、学部卒業後の研究生、前期課程修了後の研究

表12 前期課程1年生で来談した事例の相談内容と面接の主題

	I群	II群	III群	IV群
人数 計17	8(1) (47.1%)	3(0) (17.6%)	4(1) (23.5%)	2(0) (11.8%)
相談内容	他大学からの入学者の 研究室・大学生活への適応 5 進路・将来への不安 1 恋愛・失恋 2	進路の迷い 1 対人恐怖 1 心身症 1	不登校 1 不安 1 トラブル(教官、家 族との) 2	精神病 1 トラブル 1
面接の主題	・学業 3 研究中心の生活への戸惑い ・進路 3 進路変更、将来の迷い ・生活 5 大学院への違和感、研究生活への戸惑い ・対人 4 異性関係、失恋、研究室での関係 ・親子 1 親の期待と自分の意志のズレ	・学業 2 テーマ未定の苦しさ 実験のストレス ・進路 2 将来への不安、就職への不安 ・生活 2 研究生活の難しさ 内閉的生活 ・対人 2 対人恐怖、対人緊張 ・親子 2 親への両価的感情	・学業 1 手につかなさ ・進路 1 振り返り ・生活 2 トラブル 不登校 ・対人 3 教官との衝突 ・親子 2 両親との喧嘩、不信感	・学業 0 なし ・進路 0 なし ・生活 2 トラブル 通院 ・対人 2 希薄な関係 ・親子 1 希薄な関係

(注) 数字は人数, () は女子内数

生、後期課程修了後の研究生名など、年齢、身分が多様であったため、本研究では表で示さなかった。

相談内容は、前期1年生のI群では、他大学からの入学者の入学時の適応に関する相談が多く、II群以下では、進路の問題と心理的・精神的問題を語った。前期2年生のI群では、修了を前にした進路の迷いを、II群以下では、神経症症状などの心理的・精神的問題

を語った。後期課程では、どの群でも、進路の問題、心理的・精神的問題に加えて、教官

表13 前期課程2年生で来談した事例の相談内容と面接の主題

	I群	II群	III群	IV群
人数 計17	7(0) (41.2%)	8(0) (47.1%)	1(0) (5.9%)	1(0) (5.9%)
相談内容	進路の迷い 4 大学生生活 2 学業への意欲 1	対人緊張 2、不登校 1 無気力 1、吃音 1 将来への不安 1、失恋 1 家族 1	混乱(学会を前に) 1	精神病 1
面接の主題	・学業 4 研究意欲の低下、関心の变化、劣等感 ・進路 5 最後の迷い、親子の葛藤 ・生活 5 研究中心への違和感生活パターン ・対人 6 教官、研究室の関係失恋、雑談のできなさ ・親子 2 教官との関係と重なる	・学業 4 修論の完成困難、緊張 ・進路 7 決定前後の不安、失敗への恐怖、家族 ・生活 7 他大学から入学した違和感、雰囲気 ・対人 7 教官との関係、横の関係、過去の関係 ・親子 5 進路と関連(父親 3 母親 1、両親 1)	・学業 0 中心的不い ・進路 1 将来への不安 ・生活 0 なし ・対人 1 希薄さ ・親子 1 不信感	・学業 0 中心的不い ・進路 1 将来への不安 ・生活 1 内閉的生活、障害 ・対人 0 中心的不い ・親子 0 なし

(注) 数字は人数, () は女子内数

との関係、研究室での対人関係を語った。

面接の主題は、学業の領域では、研究主題の決定、研究方法の習得、研究成果の発表(学会発表、論文作成)、研究への集中が課題となり、これらがうまく行かないことが主題となった。精神的健康度が低くなるにつれて、研究を圧力と感じる学生が多く見られた。進路の領域では、研究室の選択、研究室への所属感、修了後の進路選択、進路決定が主題となった。学生生活の領域では、研究生活への違和感、経済的不安定さが主題となった。対人関係の領域では、研究室の中での対人関係の難しさ、異性関係が主題となった。大学院では、指導教官との関係が大きな位置を占めた。親子関係の領域では、修了後の進路や将来設計をめぐる親子の葛藤が主題となった。

大学院学生期には、入学後の適応、将来といった現実的課題のために来談した比較的健康的な学生と、研究意欲、指導教官との関係などを契機に継続来談した学生がいた。各学年

において相談内容はさまざまであったが、前期1年生では入学、研究生生活の開始にともな

表14 後期課程で来談した事例の相談内容と面接の主題

	I 群	II 群	III 群	IV 群
人数 計11	4(0) (36.4%)	2(0) (18.2%)	2(0) (18.2%)	3(0) (27.3%)
相談内容	進路の迷い 1 経済生活と進路(留学生) 2 教官との対人関係 1	研究室の対人関係 1 失恋後のうつ状態 1	自傷行為 1 研究室の関係 1	被害妄想 1 うつ状態 2
面接の主題	・学業 2 進路と関連した形で語る ・進路 2 研究生生活へのためらい ・生活 2 経済的不安 ・対人 1 指導教官との関係 ・親子 1 父親との関係	・学業 1 指導教官からの評価 ・進路 1 将来への不安 ・生活 1 他大学から来たときどき ・対人 2 指導教官との関係、失恋 ・親子 1 父親との関係	・学業 2 混乱、論文の完成 ・進路 0 なし ・生活 0 なし ・対人 2 研究室の対人関係 ・親子 1 親への不信感	・学業 3 論文、教官の評価 ・進路 3 就職、将来への不安 ・生活 3 不登校 ・対人 2 教官との関係、被害感 ・親子 1 家族への罪悪感

(注) 数字は人数, () は女子内数

う主題が、前期2年生では論文、進路など修了にともなう主題多く語られ、後期課程では研究や研究室での対人関係が主題となることが多く見られた。大学院学生期においても、学生の学年によって、相談内容の意味が異なった。

2.1.5 考察

(1) 卒業期来談学生の全体的特徴

以上をまとめると、第1に、他の下位時期と比較した卒業期の来談学生の全体的な特徴として、現実的な課題を前にした精神的健康度の低い事例と、比較的健康的な学生が卒業を前にして自分を見つめ直した事例とが見られた。ともに卒業を前にした時期に来談したこ

とが特徴であり、精神的健康度の低い事例は、卒業期の現実的課題に押される形で来談し、精神的健康度の高い事例は卒業期の現実的課題に対処した後に来談した。

入学期では、比較的健康的な学生の入学直後の自発的で短期間の来談が多く、一方で入学以前から未解決であった課題について継続面接を行った者がいた。中間期では、学生生活上の情報を求めて来談した事例と、新規課題が比較的少ない生活の中での面接において、未解決な課題に取り組んだ事例が見られた。また、大学院学生期では、入学後の適応、将来といった現実的課題のために来談した比較的健康的な学生と、研究意欲、指導教官との関係などを契機に継続面接を求めて来談した学生がいた。

このように、どの下位時期においても、下位時期ごとの特徴が見られた。また、どの下位時期においても、「現実的作業」を行った学生と、「内面的作業」を行った学生とがいて、その割合は下位時期によって異なった。学生が面接の中で主として現実的作業を行うか内面的作業を行うかは本研究の重要な観点であり、第2節の研究Ⅱで詳しく扱う。

(2) 卒業期来談学生の来談形態の特徴

第2に、他の下位時期と比較した卒業期の来談学生の来談形態の特徴は、精神的健康度の低い学生が多いことと、継続面接が多いことであった。入学期、中間期、卒業期の順に、自発的に来談して終了する健康な学生の割合が高い傾向にあり、卒業期の割合は低かった。また、大学院学生期、卒業期、中間期、入学期の順に平均面接回数が多く、継続的な面接が行われた。入学期、中間期、卒業期の順に新学期の早い時点で来談する学生の割合が高く、卒業期では来談時期は一定していなかった。

(3) 卒業期来談学生の相談内容と面接の主題

第3に、相談内容は、I群では来談時期による違いが見られたが、他の群では来談時期による違いは見られなかった。

他の下位時期と比較した卒業期来談学生の面接の主題としては、学生生活の終了をめぐる問題と、卒業後の社会生活への移行をめぐる問題が多く語られた。入学期には、入学後の高揚感と落ち込み、新しい生活の開始をめぐる問題、家族や友人からの分離、以前からの課題の再整理が語られた。中間期には、学生生活の展開にともなう中だるみ感、対人関係の広がりや深まりにともなう問題が語られた。大学院学生期には、職業人としての自己

形成、社会人への移行、小集団での対人関係をめぐる問題が語られた。

精神的健康度が高いⅠ群およびⅡ群では、下位時期ごとに共通した主題が見られたが、Ⅲ群およびⅣ群では下位時期ごとの特徴は明確でなかった。

(4) 大学院修了期との比較

第4に、卒業期と大学院修了期の来談学生には、多くの共通点が見られたが、卒業期の来談学生の方がⅠ群の来談率、終了率が低く、精神的健康度が低いことが推察された。

大学院学生期の相談内容、面接の主題は、学生期の相談内容、主題と同じものがみられ、第二の学生期、遷延された学生期と考えられる場合もあったが、全体としては、学業・研究、進路、対人関係などにおいて、学生期に比べて、より具体的でより社会生活に近い主題が語られた。

(5) 領域別の心理学的特徴

1) 学業の領域

学業の領域では、大学時代は、知識の消費者から生産者へと移行することが課題となった時期である。つまり、受け身的に何かを吸収して自分のものとする能力だけでなく、能動的に課題に関わり自らが何かを生み出す能力、課題を自分のものとして主体的に達成する能力をもつことが求められる時期であった。

入学期では、受験勉強から自分の興味や関心にそった勉強へと切り替えることが、中間期では、概論の学習から各論の学習への移行が、卒業期では、知的生産を体験的に学習することが、大学院学生期では、知識の消費者から生産者への移行、つまり知識を受け身的に学習する存在から、知識を生み出す存在へと移行することが課題となった。

2) 進路の領域

進路の選択と決定は、今までの生活をまとめ、将来への準備をする作業であった。進路選択の経緯を聞くことによって、学生の興味や能力の変化過程だけでなく、家族との関係、自己像、社会像が明らかになった。学生は進路決定の前後に、選択しない進路との別れの作業をする場合があった。選択しない進路には、親の期待や学生自身の幼い頃からの願望などが込められており、どのように別れの作業を行おうとしているかに注目することが意

味をもった。

入学期では、入学した大学への所属感をもつこと、入学後の目標の喪失が課題となり、中間期では、進路と内面のズレがあらわれやすく、職業人としての自己像をもつことが課題となり、卒業期では、現実的な進路選択への対応、内面と現実の統合が課題となり、大学院学生期では、社会人への移行が課題となった。

3) 学生生活の領域

入学期では、学生生活に移行して新しい生活を開始すること、自由の中で自己決定をすることが、中間期では、自分らしい学生生活を展開することが、卒業期では、学生生活から社会生活へと移行すること、学生生活を終わることをめぐる両価的感情が、大学院学生期では、職業人への移行期が課題となった。

4) 対人関係の領域

学生期の前半では、クラス、クラブ・サークルなどの小集団の中で横の関係を作ることが課題となり、同性の友人関係、異性関係が学生の心を占め、うまく行かない場合には、友人が出来ない、クラブ・サークルに入れない、雑談ができないといった問題が生じた。学年が上がるにつれて、研究室などでの縦の対人関係が加わり、教官との関係、研究室の中の対人関係が学生の心を占めるようになった。

入学期では、同年代の同性との関係が、中間期では、同性および異性との関係、リーダーシップなど集団の中での役割が、卒業期では、研究室での教官、先輩との関係、卒業による別れが、大学院学生期では、専門家小集団である研究室の中での対人関係、および異性関係が課題となった。

5) 親子関係の領域

親子関係では、親からの心理的分離と親子関係の見直しが課題となった。進路の問題が親子関係を見直す契機となることが多く見られた。大学時代の前半の時期では、家や親からの心理的分離が課題となる場合が多く、後半では、家族や親を再確認して受け入れることが課題となる場合が多く見られた。一般に、新入生の時期には母親からの分離が面接の主題となることが多く、卒業の時期には父親との関係が主題となることが多く見られた。

入学期では、入学を契機とした親子関係の見直し、特に母親からの分離が、中間期では、内面的親子関係の振り返りが、卒業期では進路をめぐる話し合い、父親との関係の見直しが、大学院学生期では、父親の受容、自己受容が課題となった。

(6)まとめ

以上の研究 I では、卒業期来談学生の特徴として、全体の精神的健康度は低いながら、比較的健康で継続面接の中で自分を見つめ直す作業を行った学生がいること、学生生活の終了と社会生活への移行が面接の主題となったことなど、大学院修了期の来談学生と共通点が多いことがあげられた。同じ下位時期に来談した学生には来談形態および面接の主題において共通した心理学的特徴が見られること、精神的健康度が高いほど下位時期ごとの特徴が明確であることを示した。

2.2 卒業期来談学生の全体像(研究Ⅱ)

2.2.1 先行研究の展望

学生相談に来談する学生の全体像についての研究は少ない。しかし来談学生の分類については、各大学の学生相談機関の年間報告等において詳しく報告されて来ている。そこでは、相談内容、来談時期、学部、性などによってさまざまな形で分類されている。もっとも歴史が古く、代表的なものとして、京都大学学生懇話室の分類(1985)をあげると、心理不適應相談(人生観、対人関係、恋愛問題、家族関係、言語障害、性格問題、心理障害、精神障害)、教育相談(学部・科・進路、学業、課外活動・教育)、職業相談(卒業後の進路、職種選択)、その他、と分けられている。また、わが国の学生相談の共通分類をめざした、下山(1989)では、心理性格(自己の心理状態や性格に関する相談)、対人関係(具体的対人関係に関する相談)、心身健康(心理面あるいは身体面の健康上の問題に関する相談)、進路修学(進路および進学に関する具体的相談)、学生生活(学業以外の学生生活上の問題に関する相談)、その他、と分けられている。以上に示した例に見られるように、現時点では、来談学生の全体像は、相談内容の分類という形で示されている。相談内容の分類には共通点が多いが、統一された分類方法はない。

2.2.2 目的と方法

先に述べた学生相談の歴史からも明らかなように、学生相談においては、従来、理念として、学生全体に対する成長・発達の援助が掲げられてきたが、実践上は、精神的健康度の低い学生や、特異な問題や症状をもつ一部の来談学生に注目する傾向があった。本研究では来談学生の全体像に注目する。

研究Ⅱの目的は、卒業期に来談した大学生の全体像を示すことである。そのため、卒業期および他の下位時期の来談学生を、「精神的健康度」と「面接で行われた作業」(現実的作業か内面的作業か)という2つの軸によって4つの類型に分け(図2を参照)、その特徴を記述し、学生への援助方法について検討した。

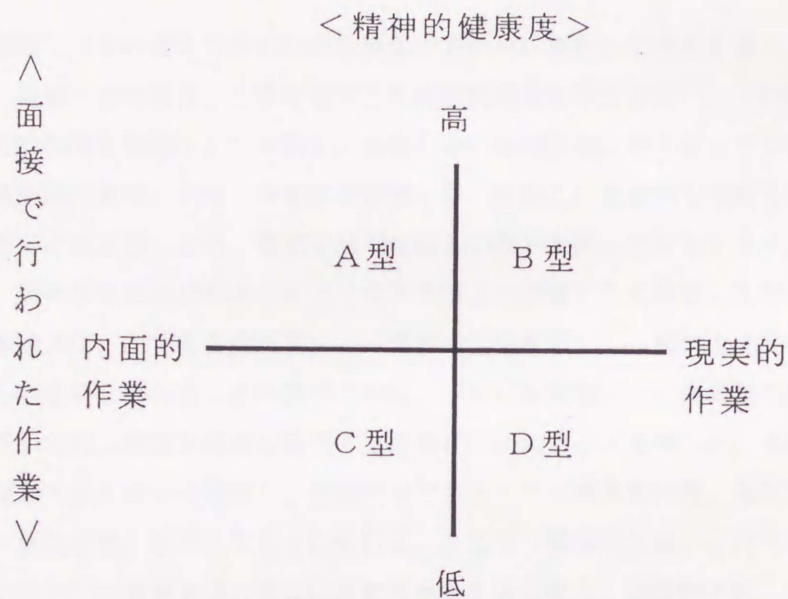


図2 卒業期来談事例の類型

第1の軸である「精神的健康度」については、先の研究Ⅰでは、Ⅰ群（健康群）、Ⅱ群（神経症群）、Ⅲ群（性格障害群）、Ⅳ群（精神障害群）という4つの群に分けて検討し、下位時期ごとの来談学生の心理学的特徴を述べた。その結果、精神的健康度を軸とした分類が、大学生を理解する上で意味のある分類方法の一つであることが明らかになった。しかし4群への分類は、学生相談の実際場面での分類としては細分化しすぎるきらいがある。そのため研究Ⅱでは、精神的健康度については、大きくⅠ群である健康群と、Ⅱ群である神経症群以下の2つに分けて検討する。

次に、学生相談の特徴を浮き彫りにし、実践場面で用いることができる第2の軸として、「面接で行われた作業」に注目した。面接で行われた作業とは、学生相談の面接の中で、学生とカウンセラーがどのような心理的作業を行ったかを言う。

鶴田（1992）は、来談学生を学生相談の面接の中で行われた心理的作業によって、「情報探索型」、「自己確認型」、「自己探究型」、「内面整理型」、「内面整理回避型」、「現実生活混乱型」、「精神障害混乱型」という7つの類型に分けて記述した。「情報探索型」とは、主として情報を求めて来談した学生を言う。「自己確認型」とは、大学生生活

上の問題で自分の考えが正しいかを確認するために来談した学生を言う。「自己探究型」とは、面接の中で自分らしさを追求した比較的健康的な学生を言う。「内面整理型」とは、神経症的問題を契機として来談し、未解決な内面的課題に取り組んだ学生を言う。また「内面整理回避型」とは、未解決な課題に取り組むことを途中で中断した学生を言う。「現実生活混乱型」とは、現実生活での混乱のため来談した学生を言う。「精神障害型」とは、精神障害および障害をめぐる大学生生活上の問題のため来談した学生を言う。そして「情報探索型」、「自己確認型」、「現実生活混乱型」、「精神障害混乱型」では、現実生活への援助を中心とした作業が行われ、「自己探究型」、「内面整理型」、「内面整理回避型」では、内面を探究し整理する作業が行われたことを示した。本研究では、これらの類型を大きく2つに整理し、面接の中で主として「現実的作業」を行う学生と、主として「内面的作業」を行う学生とに分ける。ここで「現実的作業」を行う学生とは、面接の内容が主として現実生活の問題に限定されたものを言う。具体的には、現実生活の話題が、面接時間の4分の3以上を占めたものを言う。「内面的作業」を行った学生とは、現実生活の問題を離れた、過去の出来事や精神的葛藤などの内面的話題を語ったものを言う。具体的には、内面的話題が、面接時間の4分の1以上を占めたものを言う。面接の話題の区分については、筆者が判定した。面接時間については、便宜上、面接記録の記述の長さに基づいて判定した。

本研究では、学生相談の面接で行われた作業を内面的作業と現実的作業とに分け、現実的作業の重要性に注目する。学生相談では、学生の内面的作業に注目したカウンセリングや心理療法だけでなく、さまざまな現実的作業が行われている。しかし、従来の学生相談では、カウンセリングや心理療法に比べて、現実的作業の重要性が十分認識されてこなかったきらいがある。本研究では、内面的作業だけでなく、現実的作業に注目して、学生相談の全体像を記述する。

面接で行われた作業を、厳密に「現実的作業」と「内面的作業」とに分けることは、学生が現実的な話題を語っていても、現実的な出来事を通して内面的な事柄を語る場合があるなど、実際には難しい場合がある。しかし、このような形で分類することによって、学生相談の意義や多様性を明らかにし、学生相談の特徴を明らかにすることができると思われる。

研究Ⅱでは、4つの類型の特徴について、主として来談形態の特徴から記述し、卒業期に来談した大学生の全体像について述べる。なお、面接過程については、研究Ⅲで述べる。

2.2.3 結果

2.2.3.1 卒業期来談学生の特徴

その結果として、第1に、卒業期来談学生の各類型の特徴と類型間の差異を次のように明らかにすることができた(表15)。

表15 卒業期来談学生の類型ごとの来談形態の特徴

型		A型	B型	C型	D型
来談形態の特徴	来談学生数	4人 14.3%	3人 10.7%	12人 42.9%	9人 32.1%
	自発来談率	100.0%	100.0%	66.7%	66.7%
	新学期の来談率	0%	0%	8.3%	0%
	平均面接回数	11.8回	1.3回	14.7回	6.1回
	終了率	100.0%	100.0%	50.0%	44.4%

(注) ・自発来談率とは、来談学生の中での自発来談学生の割合を言う。
・新学期の来談率とは、来談学生の中での4月と5月の来談学生の割合を言う。
・終了率とは、来談学生の中での面接の終了を確認して終わった学生の割合を言う。

A型とは、精神的に健康で、面接の中で内面的作業を行った学生をいう。B型とは、精神的に健康で、面接の中で情報を求めたり、自分の考えを確認したりする現実的作業を行った学生を言う。C型とは、精神的健康度がⅡ群以下で、面接の中で内面的作業を行った学生を言う。D型とは、精神的健康度がⅡ群以下で、面接の中で現実的作業を行った学生を言う。

(1)A型(自己探究型)

A型の来談学生数は4名(14.3%)であり、全員が自発来談であった。来談時期は9月から3月までの間であり、進路決定の前後から卒業までの間に来談し、平均面接回数(11.

8回) がC型に次いで多かった。相談内容は研究室の対人関係、決定した卒業後の進路への迷い、恋愛などであり、短期間に集中的に対人関係、学生生活、親子関係を振り返る作業を行い、全員が終了した。カウンセラーは卒業を前にした学生の戸惑いを受けとめ、内面の整理および自分らしさの探究を援助した。

A型の特徴は、来談時期が進路決定の前後から卒業までの間であること、卒業期の現実的課題を契機として短期間に集中的に内面を振り返る作業を行ったこと、全員が終了したことであった。なお、平均面接回数は他の下位時期のA型に比べてもっとも少なかった。

卒業期のA型の事例では、卒業を前にして自分らしさを探究することが行われた。「自己探究型」と呼ぶことができる。卒業期の来談事例については、面接過程を中心に第3節で詳しく述べる。

(2)B型(確認型)

B型の来談学生数は3名(10.7%)で、全員が自発来談であった。卒業期のどの時点で来談するかは明確でなく、1回から数回の面接で終了し、平均面接回数は1.3回と少なかった。就職、交通事故などの現実的な問題を契機に来談し、情報を求め、自分の考え方を確認した。現実的な問題の背後に、卒業を前にした不安を示す事例が見られた。カウンセラーは情報を提供し、考えの聞き手となり、時には助言を行った。

B型の特徴は、自発来談が多いこと、平均面接回数が少ないこと、情報を求め、自分の考えを確認する形の来談が多いこと、相談内容の背後に卒業期の問題がうかがわれた事例が見られたことであった。

卒業期のB型の事例では、情報を求め、自分の考えを確認する作業が行われた。「確認型」と呼ぶことができる。

(3)C型(内面整理型)

C型の来談学生数は12名(42.9%)であり、その約7割(8名)が自発来談であった。来談月は4月から2月までであったが、年度の後半に多く、A型よりも少し早い、進路決定の前後に来談し、平均面接回数(14.7回)は他の型に比べてもっとも多かった。終了率は5割であり、中断も見られた。進路の問題、対人関係の問題、神経症的問題(無気力、不登校、不安)などを契機に来談し、学生生活、対人関係、親子関係(特に父親との関

係)を振り返ることを通して、それまで未解決であった内面を整理する作業を行い、「内面的世界のもう一つの卒業論文」を書くような作業を行った。カウンセラーは内面的話題の聞き手となり、主として心理療法的面接を行った。

C型の特徴は、来談学生の中でC型の学生の占める割合が他の下位時期のC型と比べて高いこと、自発来談の割合が低いこと、来談時期が進路決定の前後であること、平均面接回数が卒業期の他の型よりも多いが、他の下位時期のC型と比べてもっとも少ないこと、終了率が低いことなどであった。

卒業期のC型の事例では、卒業を前にして未解決な課題に取り組み内面を整理することが行われた。「内面整理型」と呼ぶことができる。

(4)D型(混乱対処型)

D型の来談学生数は9名(32.1%)であり、その約7割(6名)が自発来談であった。来談時期は6月から3月にかけてであり、卒業期のどの時点で来談するかは明確でなく、平均面接回数はB型を除く他の型に比べて低く、終了率は他の型に比べてもっとも低かった。就職試験直前などの現実的混乱、および精神障害をめぐる問題を契機として来談した。面接では学生生活における混乱への対応が主となり、カウンセラーは危機介入的な面接を行い、現実生活を支えることが中心となった。学生を取り巻く周囲の人々への助言を行った事例もあった。

D型の特徴は、他の下位時期と比べて来談学生の中でD型の学生が占める割合および自発来談率ももっとも高いこと、他の下位時期と比べて平均面接回数、終了率ももっとも低いこと、来談時期が一定していなくて、就職、卒業論文などの現実的問題を契機とした来談が見られたことであった。D型の平均面接回数が少ない理由として、学生の来談意欲が低く、面接場面での信頼関係を成立させることが難しいこと、卒業までの残された時間が少ないことなどが考えられる。

卒業期のD型の事例では、卒業を前にした混乱への対処が行われた。「混乱対処型」と呼ぶことができる。

(5)卒業期来談学生のまとめ

卒業期のA型では、短期間に集中的に自分らしさを探究する作業が行われた。B型では、

就職などの現実的な問題を契機に来談し、情報を求め、自分の考え方を確認する作業が行われた。C型では、対人関係の問題、神経症的問題などを契機に来談し、それまで未解決であった内面を整理する作業が行われた。D型では、現実生活での混乱および精神障害をめぐる問題を契機として来談し、卒業を前にした混乱や現実的問題への対処が面接の中心となった。

2. 2. 3. 2 他の下位時期に来談した学生の特徴

ここでは、卒業期来談事例の特徴と比較するため、他の下位時期に来談した学生の特徴を記述する。

(1) 入学期に来談した学生の特徴

入学期に来談した学生の各類型の特徴と類型間の差異を次のように明らかにすることができた(表16)。

1) A型

A型の来談学生数は8名(5.6%)で、全員が自発来談であった。来談時期は入学期全般にわたり、平均面接回数が10回を越え、継続面接の中で一つの心理的な作業を行って終了する学生の割合が高かった。入学期のA型の事例では、大学入学を契機として自分を見つめる作業が行われた。

2) B型

B型の来談学生数は110名(77.5%)と多く、約9割の学生が入学後の比較的早い時期に自発的に来談し、少数回で終了した。健康な学生の、入学後の進路や学生生活などの現実的な問題をめぐる相談が多いことが特徴であった。B型の事例では、入学後の生活全般について情報を求めること、進路を確認することが行われた。

3) C型

C型の学生は17名(12.0%)であった。約7割の学生が、入学後の比較的早い時期に自発的に来談し、平均面接回数は他の型に比べてもっとも多かった。11名の学生は、入学期の現実的問題や神経症的な問題を通して、今まで未解決であった内面的課題の整理に着手した。6名の学生は中断した。

表16 入学期に来談した学生の類型ごとの来談形態の特徴

型		A型	B型	C型	D型
来談 形態 の特 徴	来談学生数	8人 5.6%	110人 77.5%	17人 12.0%	7人 4.9%
	自発来談率	100.0%	91.8%	70.6%	57.1%
	新学期の来談率	37.5%	72.7%	58.9%	42.9%
	平均面接回数	13.5回	1.3回	36.4回	17.6回
	終了率	87.5%	93.6%	64.7%	71.4%

- (注) ・自発来談率とは、来談学生の中での自発来談学生の割合を言う。
 ・新学期の来談率とは、来談学生の中での4月と5月の来談学生の割合を言う。
 ・終了率とは、来談学生の中での面接の終了を確認して終わった学生の割合を言う。

4)D型

D型の学生は7名(4.9%)であった。自発来談の割合は低く、来談時期は一定でなかった。平均面接回数は17.6回であり、約7割の学生が終了した。トラブルなどの現実的な相談内容を契機として来談した学生、精神障害の相談で来談した学生がいた。入学期のD型の事例では、入学後の混乱への対処が行われた。

5)入学期来談学生のまとめ

入学期に来談した学生の特徴としては、B型が8割を占め、A型、C型、D型が一定数いたことがあげられる。入学にともなう相談が多く見られた。

(2)中間期に来談した学生の特徴

中間期来談学生の各類型の特徴と類型間の差異を次のように明らかにすることができた(表17)。

表17 中間期に来談した学生の類型ごとの来談形態の特徴

型		A型	B型	C型	D型
来談形態の特徴	来談学生数	3人 4.1%	29人 39.7%	26人 35.6%	15人 20.6%
	自発来談率	100.0%	89.7%	84.6%	46.6%
	新学期の来談率	0%	34.5%	34.6%	26.7%
	平均面接回数	24.7回	1.7回	20.9回	6.7回
	終了率	66.6%	89.7%	53.8	73.3%

- (注) ・自発来談率とは、来談学生の中での自発来談学生の割合を言う。
 ・新学期の来談率とは、来談学生の中での4月と5月の来談学生の割合を言う。
 ・終了率とは、来談学生の中での面接の終了を確認して終わった学生の割合を言う。

1)A型

A型の学生が3名(4.1%)いた。全員が自発的に来談し、来談時期は一定でなかった。平均面接回数は他の下位時期のA型に比べてもっとも多く、継続的な面接の中で一つの心理的な作業を行った学生がいた。中間期のA型の事例では、学生は比較的变化が少ない現実生活の中で、内面的な問題にじっくりと取り組んだ。

2)B型

B型の学生が29名(39.7%)いた。約9割の学生が自発的に来談し、来談時期は一定でなく、平均面接回数は少なかった。約9割の学生が終了した。13名の学生が情報を求めて来談し、16名の学生が自分の考えを確認するため来談した。相談内容としては、学生生活におけるトラブルが多かった。中間期のB型の事例では、学生は生活全般について情報を求め、決意を確認するために来談した。

3)C型

C型の学生が26名(35.6%)いた。8割強の学生が自発的に来談し、来談時期は一定でなく、平均面接回数はA型に次いで多く、約半数の学生が終了した。中間期のC型の事

例では、学生は対人関係、親子関係を振り返ることを通して内面を整理した。

4) D型

D型の学生が15名(20.6%)いた。自発来談率は約5割であり、紹介などによる非自発来談学生の割合が高かった。来談時期は一定していなく、平均面接回数は低く、約7割の学生が終了した。トラブル、不登校などの相談内容で来談した学生と、留年、通院などの相談で来談した精神障害の学生がいた。中間期のD型の事例では、現実生活の難しさへの対処が行われた。

5) 中間期来談学生のまとめ

中間期は、大学への初期の適応が終わり、将来に向けての選択も迫っていない時期であり、大学から求められる課題が比較的少ない時期であり、学生生活の枠組みがもっとも緩い期間である。そのため、十分な時間をかけて、内面的な課題に直面する学生が見られた。中間期に内面的な課題に直面した後に、卒業期に現実的課題との統合が行われた事例がある。

(3) 大学院学生期に来談した学生の特徴

大学院学生期の来談学生の各類型の特徴と類型間の差異を次のように明らかにすることができた(表18)。

1) A型

A型の学生が5名(8.1%)いた。全員が自発来談で、新学期の来談は少なく、平均面接回数は他の型と比較してもっとも多く、全員が終了した。前期2年生が、修了を前にして来談しことは卒業期と同様であった。大学院学生期のA型の事例では、学生は、研究、進路の問題を契機として自分を問い直す作業を行った。

2) B型

B型の学生が25名(40.3%)いた。自発来談が多く、新学期の来談が4割であった。平均面接回数は少なく、約9割の学生が終了した。前期1年生と後期課程の来談が多く、特に他大学からの入学者の来談が多く見られた。大学院学生期のB型の事例では、入学期

に次いで新学期的来談が多く、前期1年生と後期1年生では、情報を求めて来談した学生が多く、前期2年生では、自分の考えを確認するために来談した学生が多かった。

表18 大学院学生期に来談した学生の類型ごとの来談形態の特徴

型		A型	B型	C型	D型
来談形態の特徴	来談学生数	5人 8.1%	25人 40.3%	16人 25.8%	16人 25.8%
	自発来談率	100.0%	96.0%	68.8%	56.3%
	新学期的来談率	20.0%	40.0%	18.8%	12.5%
	平均面接回数	23.2回	1.3回	16.6回	20.7回
	終了率	100.0%	92.0%	75.0%	62.5%

(注) ・自発来談率とは、来談学生の中での自発来談学生の割合を言う。
 ・新学期的来談率とは、来談学生の中での4月と5月の来談学生の割合を言う。
 ・終了率とは、来談学生の中での面接の終了を確認して終わった学生の割合を言う。

3) C型

C型の学生が16名(25.8%)いた。自発来談が約7割で、来談時期は年度の後半に多く、平均面接回数は16.6回であった。4分の3の学生が終了し、中断した学生もいた。C型の来談形態については、著しい特徴は見られなかったが、前期2年生の来談が多いこと、研究室での問題を契機とした来談が多いことが特徴であった。大学院学生期のC型の事例では、修了を前にして内面を振り返る作業が行われた。

4) D型

D型の学生は16名(25.8%)であった。自発来談率が低く、新学期的来談率も低かった。平均面接回数はA型に次いで高く、終了率は62.5%であった。大学院学生期のD型の事例では、カウンセラーは学生の現実生活を支える作業を行った。

5) 大学院学生期に来談した学生のまとめ

大学院学生期の特徴は、B型が多いこと、C型とD型の学生が一定数いることであった。また、大学院修了期では、C型とA型の学生が多く見られた。これは卒業期と共通する特徴である。

2.2.4 考察

(1)4類型の特徴

第1に、卒業期大学生の4つの類型（A型：自己探究型、B型：確認型、C型：内面整理型、D型：混乱対処型）を見出すことができた。そして各類型の特徴と類型間の差異を次のように明らかにすることができた。

A型の来談学生数の割合は14.3%で、全員が自発来談であった。進路決定の前後から卒業までの間に来談し、平均面接回数がC型に次いで多かった。相談内容は研究、進路、対人関係などであり、短期間に集中的に自分らしさを探究する作業を行った後、終結した。

B型の来談学生数の割合は10.7%で、全員が自発来談であった。卒業期のどの時点で来談するかは明確でなく、1回から数回の短期間で終了した。就職などの現実的な問題を契機に来談し、情報を求め、自分の考え方を確認した。

C型の来談学生数の割合は42.9%で、その6割が自発来談であった。来談時期は進路決定の前後であったが、A型よりも少し早い時期であり、平均面接回数は最も多かった。終了率は約5割であり、中断も多く見られた。対人関係の問題、神経症的問題などを契機に来談し、それまで未解決であった内面を整理する作業を行った。

D型の来談学生数の割合は32.1%であり、その7割が自発来談であった。卒業期のどの時点で来談するかは明確でなく、平均面接回数、終了率ともに他の型に比べて低かった。現実生活での混乱および精神障害をめぐる問題を契機として来談し、混乱や現実的問題への対処が面接の中心となった。

このように、A型では主として「自分らしさの探究」が、B型では「情報の探索および決心や決意の確認」が、C型では「未解決であった内面の整理」が、D型では「混乱や障害にともなう現実生活への対処」が行われた。

(2)卒業期の特徴

第2に、卒業期の来談事例では、他の下位時期と比べてC型とA型、およびD型の割合が多く見られ、B型の割合が少なかった(表19)。C型とA型は、共に内面的作業を行

表19 来談時期から見た類型ごとの比率(%)

期 型	入学期	中間期	卒業期	大学院 学生期	(大学院 修了期)
A型	5.6	4.1	14.3	8.1	17.6
B型	77.5	39.7	10.7	40.3	23.5
C型	12.0	35.6	42.9	25.8	47.1
D型	4.9	20.6	32.1	25.8	11.8

った事例であり、進路決定前後の来談が多いこと、平均面接回数が他の型に比べて多いこと、短期間に集中的な作業が行われたことなど、多くの共通点が見られ、精神的健康度、自発的来談率、終了率は異なった。また、D型の割合が他の時期に比べて高かったのは、卒業期の現実的課題を前にして心理的混乱を示した事例が多かったことを示していると思われる。卒業期の現実的課題は一方で内面を振り返る契機となり、一方で混乱を引き起こす契機ともなった。

4類型の割合を来談時期ごとに見ると、入学期ではB型が約8割を占め、健康な学生の現実的な問題をめぐる相談が多く、中間期、卒業期と、しだいに内面的作業をするC型とA型の学生の割合が増えた。大学院学生期では、B型、D型、C型が多く見られた。また、4類型の来談者数を来談時期ごとに見ると、B型が、入学期および中間期において多く、卒業期に少なかったため、卒業期のC型とA型の割合が高くなった。

(3) 2つの軸から見た来談学生の特徴

第3に、精神的健康度の高いA型とB型の計を下位時期ごとに比較すると、入学期 85.9%、中間期 56.2%、卒業期 28.6%、大学院学生期 50.0% (大学院修了期 41.1%) と、入学期、中間期に多く、卒業期には少なかった(表20)。大学院学生期でも、前半は少

表20 来談時期から見た<A型+B型>と<A型+C型>の比率(%)

	A+B	A+C
入学期	85.9	14.8
中間期	56.2	31.5
卒業期	29.0	53.6
大学院学生期	50.0 (41.1)	33.9 (64.7)

()は大学院修了期

なく、修了期に多かった。従来、比較的健康な来談学生についての研究は少なく、これらの型に注目することは、一般学生と来談学生との共通点を見出す上で大きな意味があると思われる。

次に、内面的作業を行ったA型とC型の計を下位時期ごとに比較すると、入学期 14.8%、中間期 31.5%、卒業期 53.6%、大学院学生期 33.9% (大学院修了期 64.7%) となり、他の時期に比べて卒業期および大学院修了期に多く見られた。これは、卒業を前にしたこれらの時期に、さまざまな現実的課題を通して内面を振り返る学生が多いためと考えられる。

(4) 卒業期と大学院修了期の来談学生の比較

第4に、卒業期と大学院修了期の来談事例を比較すると、ともにC型の割合が高いことは共通していたが、卒業期ではD型の割合が高く、大学院修了期ではB型の割合が高いなど、一部相違点が見られ、全体として卒業期来談事例の方が精神的健康度が低かった(表

21)。

表21 大学院修了期来談学生の類型ごとの来談形態の特徴

型		A型	B型	C型	D型
来談形態の特徴	来談学生数	3人 17.6%	4人 23.5%	8人 47.1%	2人 11.8%
	自発来談率	100.0%	100.0%	50.0%	50.0%
	新学期の来談率	33.3%	50.0%	12.5%	0%
	平均面接回数	14.0回	1.5回	20.6回	5.5回
	終了率	100.0%	100.0%	75.0%	0%

(注) ・自発来談率とは、来談学生の中での自発来談学生の割合を言う。
・新学期の来談率とは、来談学生の中での4月と5月の来談学生の割合を言う。
・終了率とは、来談学生の中での面接の終了を確認して終わった学生の割合を言う。

(5)援助の方法

第5に、各型ごとに行われた心理的作業に対応する形で、来談学生への援助の方法が異なった。

比較的健康的なA型の学生に対しては、学生が自分らしさを探究して心理的に成長することを援助した。卒業期では、卒業前の課題を前にした学生の戸惑いを受けとめ、内面の整理、自分らしさの探究を援助した。入学期では、入学にともなう戸惑いを受けとめることが中心となり、中間期では、生活上の変化は比較的少なく、学生が内面を見つめることを援助した。大学院学生期では、研究上の困難や社会生活への移行を契機として、学生の内に対しては、学生の自己探究を促進するための援助が行われた。これは下山他(1991)による援助活動の方法の分類では、人格の成長および能力の開発を目標とした「教育啓発」にあたるものである。教育啓発とは、病的レベルの問題が見られない者に対する人格の成長を目的とした援助を言う。

B型の学生に対しては、カウンセラーは必要に応じて現実的な問題を整理し、情報提供や助言を行い、学生の決心の聞き手となった。入学期と大学院学生期の前期および後期課

程1年生では、入学後の学生生活についての情報を求める相談が多く見られたが、卒業期固有の相談内容の特徴は見られなかった。現実的な問題を契機として来談し、自己探究へと移行した学生も見られた。下山他（1991）では、「教示助言（ガイダンス）」にあたるものである。教示助言とは、情報提供、ガイダンス、アドバイスなどによる具体的、現実的な援助を言う。

C型の学生に対しては、心理療法的援助が行われ、学生生活を支え、内面の整理を援助した。学生の来談契機となった相談内容は来談時期によってさまざまであったが、卒業期をはじめとしたどの時期においても、内面探究を中心とした心理療法的援助が行われた。これは、下山他（1991）の分類では、「心理治療」にあたるものである。心理治療とは、心理的行動的問題を起こしている者に対する心理療法を中心とした援助を言う。学生期の心理療法的援助では、学生の発達を支えつつ内面の探究を行うことが必要である。乾（1980）は、精神分析の観点から、学生期に相当する青年期の特徴について、「ライフサイクルの中で、乳幼児期とともにもっとも活発な成長力を発揮し、もっとも大きな発達の变化をあらわす時期である。しかし、それと同時に青年期は乳幼児期の葛藤の再現・反復する時期である」と述べ、青年期の心理療法の特徴として、「治療者は発達・成長の方向を支持し促進すると同時に、青年期発達の危機的状況にもなって反復される幼児期的葛藤を治療関係を通して処理し解決すべきである」（249頁）と述べている。

混乱や障害への対処が行われたD型に対しては、危機介入的な面接を行い、現実生活を支えるための援助を行い、障害をもちながら学生生活を送ることを援助した。周囲への助言を行った事例もある。卒業期には現実的課題が混乱の契機となることが多く見られたが、来談時期による大きな違いは見られなかった。これは下山他（1991）の分類では、「危機介入」、「療学援助」にあたるものである。危機介入とは、緊急の援助を必要としている者に対する援助を言う。療学援助とは、精神障害のため医学的治療をうけている者への大学生活全般にわたる援助を言う。

D型の学生に対しては、現実的援助が必要な場合が多い。学生相談では、さまざまな現実的援助が行われている。下山（1994）は、スチューデントアパシーの学生への援助方法として、学生をとりまくさまざまな関係をつなぐ「つなぎモデル」を提唱している（9-10頁）。松原（1990）は、スチューデントアパシーの学生に対して、アパシーそのものの改善をはかるよりは、生活を分析して目標を明確にすることによって生活全体の改善をはかる「生活分析的カウンセリング」を提唱している（215頁）。また、田嶋（1991）は、境界

例の学生に対して学内外のネットワークを活用して、「複数で抱えること」を提唱している(39-41頁)。峰松他(1989)は、精神病学生への援助方法として、「健康で積極的な側面をよりどころとしながら、大学における教育(就学)援助を行う」、「教育を受けたい、研究を行いたいという、生活のなかの希望や願いの実現を、その援助の柱とする」療学援助を提唱している(222頁)。療学援助とは、病理を抱えた学生に対して、単に病理の治療を行うのではなく、あくまでも大学生としての人間的成長を援助することを目標とし、その学生の学生生活全般の援助を行うことを言う。

以上述べたように、特にA型においては、学生の成長・発達を促進する方法が取られたが、C型やD型においても、心理療法的援助や現実生活への援助と並行する形で、学生の成長・発達を促進する方法が取られた。

(6)まとめ

研究Ⅱでは、卒業期来談学生を2つの軸によって4つの類型に整理し、各類型の特徴を述べた。また、他の下位時期に来談した事例との比較から、卒業期来談事例の特徴を明らかにし、卒業期には内面的作業を行うC型とA型、および精神的健康度の低いC型とD型が多いことを明らかにした。また、下山他(1991)が並列的に示した5つの援助方法を2つの軸で整理し、各型ごとに来談学生への援助の方法が異なること、さまざまな援助方法と並行して、学生の成長・発達を促進する方法が取られたことを示した。

2.3 卒業期来談学生の面接過程(研究Ⅲ)

研究Ⅲでは、卒業期および大学院修了期の来談学生の面接過程の特徴を明らかにする。

2.3.1 先行研究の展望

卒業期に来談する学生の心理学的特徴としてはこれまで、「大学から離れることにとともなう悲しみの体験」(Medalie, J. D., 1981, 78頁)、「以前の喪失・移行期の再現」、「比喩的な死の体験」(Margolis, G., 1980, 336頁、1989, 88頁)、「学生生活の終了をめぐる両価的感情」(Gray-son, P. A., 1989, 13頁)などが指摘されてきた。これらはいずれも重要な指摘であるが、面接過程の記述を含めた事例研究に基づくものではない。以下に、卒業期来談学生の特徴についての文献を概観する。

(1) 学生生活の終点

卒業期は入学から卒業までという学生生活の時間的枠組の終点を前にした時期である。そのため卒業期の学生相談では、終点を意識した心理的作業が行われると思われる。Margolis, G. (1980) は、卒業期について、「(大学を) 離れることは、成長しつづけるために、学生が認識し学ぶ必要がある技術である」、「離れることや別れを告げることを学ぶことは、変化を認識することであり、違う言い方をすれば死を認識することを意味する」と述べ、「学生生活からの分離」と「今までの生活の死」という側面を強調している(336頁)。そして後にはより明確な形で、「卒業期の学生との面接の中で、学生が比喩的な死の体験をする」と指摘している(Margolis, G., 1989, 87頁)。

また、卒業期の学生相談は、時間が決められた時間制限療法(Time Limited Therapy)であるという見方がある。丸田(1981)は、短期療法に適切なクライアントの条件として、①普通以上の知能、教育、性的適応、責任感などを含む自我の強さ、②基本的信頼感がもてる能力、③初回面接で治療者との間に関係を樹立できる能力、④心理的な洞察力、⑤自分が何を感じているかを表出できる能力、をあげている(308-309頁)。これは学生相談の対象である大学生の多くに当てはまる条件であると思われる。しかし、学生の精神的健康度によっては、この条件に当てはまらず、卒業期に終点、卒業を意識しない学生もいる。

May, R. (1988) は、「大学にいる治療者は常に時間制限という枠組みの中で仕事をして

いる」と述べ、「時間の境界が認識され有効に利用されているか、曖昧なまま認識されていないか」が重大な問題であるとし、「避けることができない終了が、家からの分離や卒業して大人の世界に入るという発達過程に有効に働き、興奮と悲哀の混じった感情をともなう」としている(64頁)。乾・シュア(1978)、上地^{うえち}(1980)は、学生相談をブリーフ・サイコセラピー(Brief Psychotherapy)の観点からとらえ、分離がテーマとなりやすいこと、治療目標を制限することが重要であることを指摘している。治療目標については、Mann, J. (1973)は、分離と喪失に限定することを、Sifneos, P. (1979)は、エディプス・コンプレックスに限定することを、Malan, D. (1976)は、面接の中で何に焦点を合わせるかを常に吟味することの重要性を指摘しているが、学生相談の治療目標については、Rockwell, W. J. K. (1984)が、「治療の焦点と強調点は、(精神病理的問題よりも)発達上の問題に置かれるべきである」(637頁)と述べている。

(2)社会生活への移行

卒業期は、学生生活から社会生活への移行を前にした時期である。そのため卒業期の学生相談では、移行にともなうさまざまな心理的作業が行われると思われる。Margolis, G. (1980)は移行期の特徴として、「移行の際に、私たちは過去を確認し、見直す。私たちは過去の記憶、感情、イメージを蓄積すると同時に将来を予測する」(336頁)と述べている。また、Medalie, J. D. (1981)は、学生時代の終点であるこの時期には「将来への予測」をすることが課題であると述べている(78-79頁)。

南・澤田(1991a, 1991b)は、人生の変節点、転機に多く見られる記念物の作成や記念行事の執行などの現象を「記念の作業」と名付け、「対象喪失」(小此木, 1979)および「危機的人生移行」(山本・ワップナー, 1992)という文脈からとらえ、「卒業という誰でもが経験する比較的普通の移行事態」の中にも、「死別や後天的な障害などのような危機性の高い移行と共通する心理的力動性を読みとることができる」としている(1991b, 141頁)。そして大学卒業という移行期において記念の作業が行われる過程を事例を通して検討し、「記念対象の形成に伴い、移行体験の分節化・距離化が進む」、「記念の作業および記念対象は、移行期の心理的危機性を和らげる緩衝作用をもたらす」(1991a, 45頁)、「卒業期の移行体験を象徴的に構造化する作用を内包している」(1991b, 144頁)と述べている。そしてこのような作業は、Butler, R. N. (1963)が老年期の心理的作業として指摘

した「ライフレビュー（Life Review）」に通じることを示唆している。

また、澤田他（1992）は、学生から社会人への移行について、職業選択と就職活動に注目して、「大学から職場への移行の前後2年余りの間は、（中略）具体的活動を行いながら、心理的には（中略）職業を中心に自己同一性を組み直す、人生周期上重要な時期」であると述べている（207頁）。そして大学から職場への移行を、①職業選択と就職活動、②卒業論文作成、③卒業式・入社式、④研修、というサブ移行過程に分け、社会人への移行前の節目の重要性に注目している。また、澤田他（1988）は、大学のある地域から離れた15名の卒業生の、卒業前の2月と卒業後の5月と10月の時点でのパーソナル・プロジェクト（Personal Project：個人的な目標の達成を意図した一連の相互に関連した活動）を調査し、移行前に個人がもつパーソナル・プロジェクトは、学生生活の終わりに際して、「最後のモラトリアムを楽しんでおく」、「友人たちと一緒に過ごす」などの娯楽的活動と、「身の整理をする」、「世話になった人に挨拶に行く」などの身辺整理的活動が中心になっていたことを報告している（171-180頁）。

これらの研究から、社会生活への移行期である卒業期には、進路決定や就職活動などを通して、心理的移行過程が語られることが明らかになっている。

（3）卒業期に来談する意味

卒業期の学生相談を扱った事例は多くないが、学生が卒業期に来談することの意味について述べている論文として次のものがある。

田畑（1978）は、「授業であてられると声が出ない」ことを主訴として来談した4年生の女子学生との18回の面接過程を報告し、「青年期に至るまで未解決のまま背負ってきた課題が、ここで改めて問われている」ことを指摘している（16頁）。そして、母親との葛藤、同胞との関係、友人との関係、父親との関係、自分らしさの獲得など、「クライアントの中に秘められ、持ち越されてきた問題は、“大学卒業”という節目を迎えて噴出し、カウンセラーの援助の下で、対人関係における諸問題はかなりの改善をみた」と述べている（18頁）。これはわが国でもっとも早い時期に卒業期の面接の意味を指摘した文献である。渡部（1990）は、卒業を前にしてクリニックへ来談した4年生男子との8回の面接過程と、学生相談室に来談した短期大学2年生女子の2事例をあげ、卒業期の学生相談では、「適応援助の機能とは多少異なる、次の発達段階への通過援助の機能」があることを指摘

している(176頁)。一丸(1995)は、卒業期に来談した大学生の事例報告へのコメントの中で、「(卒業までの)時間的な制限は、必ずしも不利というわけではなく、面接に意図的に組み込むことで、通常の心理療法では得られないような成果を挙げることも出来る」、「この時期(大学4年の夏)に心理療法を受けようと自発来談したこと自体に、重要な情報がある」(39頁)と述べ、卒業期という時期に来談したことに意味があることを指摘している。

(4)卒業期の学生相談の面接過程

卒業期の学生相談の面接過程に焦点を当てたものとして次の論文がある。上地^{かみじ}(1992)は、「性格、対人関係、卒業後の進路」の問題で4年生の春に来談して、24回の面接を行った男子学生の事例と、「乗り物恐怖、外出恐怖」の問題で4年生の春に来談して41回の面接を行った男子学生の事例を、父親コンプレックスに焦点を当てて報告し、「このような(卒業研究、就職活動など)岐路に立って自己の同一性の不確かさを意識させられた」(14頁)、「カウンセリングは、父親コンプレックスからの離脱、母親からの心理的自立、父親的支えへの希求の自覚を促進したようである」(19頁)と述べ、卒業期の親子関係に注目している。また、林(1984)は、「大学がおもしろくない、人を避けている」と来談した4年生との48回(卒業後17回)の面接過程を報告し、教官などへの批判に終了した時期から、指導教官、飲み屋の主人、カウンセラーといった特定の人との関係の中で内省を深めた時期へ、さらに実際の対人交流を求めた時期へと、学生の対人関係が変化したことを報告し、4年生は「初めて研究室に所属して、メンバーとの深い交際が始まり、さらには自らの就職か大学院進学かの選択を迫られるという、まさに大学生活での岐路に立つ時期であり、一般的にいつでも不安な感情に支配されやすい時である」と述べている(217頁)。長尾(1991)は、卒業論文の題目提出を前にして、「自分が今まで一体何をしてきたのか」という後悔と「将来何になるのか」という不安を訴えて4年生の9月に来談した女子学生との38回の面接過程を報告し、導入期では卒業論文への助言などの現実的課題を達成することへの援助が中心となったこと、転換期では自分についての反省や将来への不安を語り、過去の対人関係や出来事を振り返り、卒業論文の完成後自分を見つめたこと、終結期では、現実生活での対人関係を通して再び自分を見つめ直したことを報告している。また、大河内・杉若(1993)は、「抑うつ気分、入眠・起床困難、単位不足」を

訴える男子学生との26回の面接過程を報告し、卒業期には、進路決定と指導教官との人間関係が中心的課題であったこと、卒業期の学生相談ではこれらの課題への援助が必要であることを指摘している。また、現実的課題の達成と内面の探究との関係について山崎(1988)は、「社会に出て行くのに不安がある」と訴える4年生の男子学生との12回の面接過程を報告し、「卒業、就職という現実的課題と自己の内面や価値への探究というクライアント自身の2つの課題を限られた面接期間の中でいかに調和し、解決していくか」について考察し、学生が卒業期の現実的な問題の処理の後、精神性を求める方向へと向かったことを報告している(278頁)。このように、卒業期の学生相談では、現実的な課題と内面的な課題が交互に面接の中に登場し、次第に統合されていく場合が多い。

また塚田(1992)は、「他人から悪口を言われ、人間関係がうまくいかない」と来談した短期大学2年生の女子学生との8回の面接過程を報告し、短期大学の卒業期の学生相談では学生の心理的な問題点や適応状態などを的確に把握し援助の焦点を絞ることが必要であることを指摘している。

2.3.2 目的と方法

研究Ⅲでは、卒業期および大学院修了期の来談学生の面接過程の特徴を明らかにする。

そのため、研究Ⅰで示した305事例の中の、卒業期の28事例および大学院修了期の17事例(表2.2)から、研究Ⅱで述べた4つの類型ごとに代表的事例を選び、その面接過程を検討した。ここに大学院修了期の事例を加えたのは、卒業を前にした事例と大学院の修了を前にした事例とは共通点が多いと思われるためである。

2.3.3 結果

2.3.3.1 A型の事例

ここでは、卒業期に来談したA型の事例を取りあげ、卒業期の相談面接の中で行われた心理的作業を記述し、その意味について考察する。2.2節で述べたように、A型とは、精神的に比較的健康で、面接の中で内面的作業を行った学生を言う。A型の来談事例は、卒業期4名(14.3%)、大学院修了期3名(17.6%)の計7名(15.6%)であった。ここでは2事例を示す。

表22 卒業期および大学院修了期における類型ごとの来談学生数(下段は%)

	A型	B型	C型	D型	計
卒業期	4 (14.3)	3 (10.7)	12 (42.9)	9 (32.1)	28 (100)
大学院修了期	3 (17.6)	4 (23.5)	8 (47.1)	2 (11.8)	17 (100)
計	7 (15.6)	7 (15.6)	20 (44.4)	11 (24.4)	45 (100)

(1)事例1

卒業の直前に恋愛の相談で来談し、卒業までの短期間の面接で、一つの心理的作業を行った男子学生の事例を示す。

1) 事例の概要

事例1は、卒業後に企業への就職が内定している文系学部4年生の男子学生であり、卒業直前の3月に、「好きな女性ができたが相手にされない」と、恋愛の相談で来談した。父親(50歳代)、母親(50歳代)、祖母と兄の5人家族である。生育歴については、面接過程の中で一部を語ったのみである。

2) 面接過程

来談後一気に、「いつも放心状態で別世界にいるよう。片思いに近く、相手からの反応がない」と恋愛について語った。一段落した後、「大学の4年間で自分の写っている写真がほとんどなく、人間関係がもてなくて不満だった」と学生生活を振り返り、「その不満を一気に取り戻してくれそうな恋愛」と述べた。そして「昔の記憶がない」と語った後に、幼い頃の家族関係を振り返り、「家族に品がなく、友人に会わせたくなかった」と述べた。次の回では、「彼女と話す機会があったが、共通の話題が何一つなかった。自分の時間を大切にしよう言われた。対等に

見てもらえない」と、うまく行かない恋愛について語った。そして、「母親にない洗練されたものを彼女に求めた」と話し、「子供から乳離れしていなくて何にでも口を出してくる」母親への不満を語った。しかししだいに、「品がないというのは、働くだけが生きがいで遊びがないから」などと、母親と家族を肯定的に語った。第3回では、学生生活を振り返り、「幼いころから成績が一番だったことを心の支えにして大学に入った」こと、新入生のころの「田舎の少年が都会に出て、個性の強い人に圧倒されて自分が小さく見え、極力人と会わないようにした」戸惑い、3年生で勉強に熱中できなくなり「優等生が破局を迎え、無気力状態になった」こと、就職をめぐる「コンプレックスを一流企業に入ること満ちそうとし、それは叶えられたが心理的には満たされなかった」ことなど、4年間の学生生活を一気に振り返り、「振り返ってみるとずいぶん変わったのか」と述べた。そして最後の第4回では、「今までは感情が爆発することがなかったが、恋愛をして変わった」、「幸せな雰囲気漂わせている女性に挑戦したが、叶えられなかった」、「子供扱いされるのも仕方ない」と述べ、しだいに叶えられない恋愛を大切な経験として受け入れた。そして「今までは上昇すれば幸せが手に入ると思って来たが、どうも違う」と語り、これからの職業、将来の生活について語った後に終了した。

3) 本事例の面接過程の特徴

事例1は、4年生の卒業式の直前に、自分の気持ちを整理するために来談した事例であり、短期間に内面的な作業が行われた。

相談内容は恋愛についてであり、面接では、恋愛という現実的問題について語ること、母親との関係を中心とした今までの親子関係を振り返ること、学生生活を振り返ることが行われ、最後に将来について語った。

現実的問題である恋愛については、片思いの気持ちを語った後、しだいにそれが失恋であることを受け入れ、その意味を整理した。母親との関係については、母親への不満を述べることから、しだいに母親を客観的にとらえる方向へと変化した。学生生活については、入学期の戸惑い、中間期の無気力状態、卒業期の進路選択を振り返り整理した。

このような作業を通して、学生は自分が学生生活で得られなかったものを恋愛に求めていたことに気づいた。今までの親子関係を振り返る作業の後、学生生活を振り返る作業が行われた。学生は、卒業を前にして学生生活に「ふんざり」をつけ、失恋を受け入れて面接を終了した。

(2)事例2

ここでは、進路決定の直後に進路の迷いの相談で来談して、卒業までの期間に父親との関係を整理した男子学生の事例を示す。

1)事例の概要

事例2は、理系4年生の9月に、「大学院に受かったが、行かない方が良いのではないかと、自分のして来た選択に問題があるのではないかと確かめに来た」と、進路の迷いで来談した男子学生である。父親(50歳代)、母親(40歳代)、弟、祖母の5人家族である。生育歴としては、小学時代までは特に問題がなく、中学、高校時代は教師や父親に反発し、浪人時代にも父親と衝突した。大学では第2志望の学科に入学したが、1年後に再受験して同じ学部の第1志望の学科に入り直した。

2)面接過程

ここでは、面接過程を4期に分ける。第1期(9月~10月、面接回数6回)では、相談内容を語った後、「小さい頃から父や教師と折り合いが悪く、いつも勝たねばと思いつけてきた」、「この大学の学生は人をある限度内に入れず、異質で拒絶される感じ。そういう世界でこの先やって行けない」と、父親や教師への反発と、同じ大学の学生への違和感を語った。そして、「親から抜け出そうとしたのに、気がつくとすぐ後に父がいて抜け出せない」、「今までの自分ではやって行けないと感じてここへ来た」と、反発を軸とした生き方への戸惑いと将来への不安を語った。この時期はカウンセラーに対して、一方で「黙っていられると困る。どうも今までと違う」と語ったり、「このことをどう思うか」と質問するなど挑戦的であり、一方で面接が終了しにくくなり、依存している感じが見られた。カウンセラーが父親について質問すると話題を変えた。

第2期(10月~11月、7回)では、「頑張って大学院に合格したが、頑張りが続くかどうか不安。身内にモデルがいなくてどうしてよいか分からない」、「今までの自分の考えは失敗作。しかしいざとなるとしがみつくと」、「精神的に限界を越えて何も出来ない時期があった」と、今までの生き方を振り返り、戸惑いを語った。そして父親について、「浪人時代に3回けんかをした。知らないくせに知ったふりをする。父とつき合う苦勞をした人はいない」、「反発がエネルギーにならない」と、反発と戸惑いを語った。この時期カウンセラーは、抽象的な議論を受けとめながら、話を具体化しようとした。学生はしだいに、「自分は60年代の学生」などといった

さまざまなたとえを通して、反発の奥にある戸惑いや内面を語り始め、今までの自分を見つめ直すようとする動きを見せた。

第3期（12月～2月，6回）では、公務員か企業かという将来の進路の話の後、「大学からの帰り道に長い距離を一人歩いて心を鎮めた」ことを話し、その後さみしさ、戸惑いを中心に学生生活を一気に振り返った。そして、父親への反発を繰り返し語った。カウンセラーが、「お父さんの性格に対してどうすることも出来ない辛さが伝わって来た」ことを伝えると、「今まで教えてくれる人がいなかった。親から何段跳びもできない。父は性格が悪く、さんざん悪く言ったが、死んで天国へ行ける人間。小さな会社で苦勞して、大学に行きたくても行けなかったが、そのことを言わずに、子供には行かせてくれている。このことは申し訳ない」と、父親への反発の奥にある肯定的な感情を語り、その後「怒らなくなった」と述べた。学生生活の辛さと父親への反発がよく伝わってきたことを伝えると、挑戦的態度が消えた。そして「前回と話がつながるようになった」と、面接場面での変化を語った。このころ学生は、研究室を中心とした現実生活を重視し始め、初めて遅刻するなど面接から距離を取り始め、カウンセラーはしだいに、時々帰る繋留点のような存在となった。

第4期（2月～6月，10回）では、卒業後の対人関係への不安を語る一方で、「自分は一流の人間ではないが、祖母にかわいがられたのは良い思い出」と、祖母との思い出を語った。その後、「父には反発のための反発しかして来なかった。父は原因であってそれがどうということではない」と、父親への見方の変化を語った。さらに家庭教師の女子中学生への淡い恋愛感情について、「感化されて素直になった」と語り、「人間はどこかで甘えたい。昔は反抗と甘えが表と裏だったが、今は甘えたい自分を認める」と語った。その後、「父は苦勞しているのに報われていない」、「父の性格は嫌いだが苦勞は認める。好きだけど嫌い」と、父親への両価的な感情を語った。そして「重心が移った感じ。考え尽くしたからでもあり、他人に肯定されたからでもある」と述べ、29回で終結した。（卒業後6月までフォローアップ面接を行った。）カウンセラーとの安定した、少し距離のある関係の中で、祖母に受け入れられた体験や中学生への恋愛感情を語るとともに、父親を受け入れた。そして「なんだかんだ言っても、自分にも人と一緒のところがある」と、自分を受け入れた。

3) 本事例の面接過程の特徴

これは、卒業研究や進路決定といった現実的な課題を処理する能力のある学生が、進路決定直後の9月に将来の進路の迷いを相談内容として来談した事例であり、29回の面接

が行われた。

当初の相談内容は将来の進路についてであったが、今まで未解決であった内面的課題の一つである父親との問題に取り組み、父親との関係をめぐってさまざまな感情を言語化した後、学生生活を振り返り、「内面的な世界の卒業論文」、「もう一つの卒業論文」を書くような心理的作業を行った。そして、学生生活を振り返る作業と、大学入学以前の生活を振り返る作業が交互に行われた。

現実的な相談内容である将来の進路については、最初は「今までの自分ではやっていけない」と強い不安を語り、相談内容の中心であったが、その後、面接の進展とともに中心的な話題ではなくなった。父親との関係については、面接過程を通して、父親や教師への反発を軸とした今までの生き方を振り返り、反発の奥にある肯定的感情に気づき、父親への見方を変えて受け入れ、自分を受け入れた。当初の、学生のカウンセラーへの関わり方は、一方で挑戦的で一方で依存的であり、父親への関わり方と重なる部分があったが、学生の父親への見方が変化するとともにカウンセラーへの態度も変化した。学生生活については、最初は「異質で拒絶されている感じ」と、同じ大学の学生への違和感を述べたが、しだいに「限界を越えて何もできない時期があった」と、自分自身の学生時代を振り返った。また、第3期では、「大学からの帰り道に長い距離を一人で歩いて心を鎮めた」ことを語ったことを契機として、その後さみしさや戸惑いを中心に学生生活を一気に振り返った。このような作業の後、第4期で、全体をまとめて自分を受け入れた。父親について振り返り、学生生活について振り返る作業が一段落した後、学生は将来の進路を受け入れた。

(3) A型の事例の面接過程の特徴

卒業期に来談したA型の事例の面接過程の特徴は以下の通りである。

1) 学生とカウンセラーが、残された時間および学生生活の終点を意識することによって、短期間に集中的な作業が行われた。

2) 相談内容はさまざまであったが、面接の中では共通した心理的作業が行われた。それは、恋愛、進路、研究意欲などといった卒業期の現実的課題に対処すること、親子関係など学生期以前の生活を振り返ること、学生生活を振り返り意味づけることであった。そして、これらの作業が交互に行きつ戻りつする形で行われながら、しだいに統合された。特に親子関係を振り返る作業および学生生活を振り返る作業に大きな意味があった。

3) 親子関係を振り返る作業は、入学期に母親からの分離が主題となることが多いのに対して、卒業期には父親との関係が主題となることが多く見られた。また、大学院学生では、教官との関係を通して親子関係が主題となり、親を受け入れた後、自分を受け入れることが行われた事例が見られた。

4) また特に、学生生活を意味づける作業に意味があった。学生は学生生活を振り返る作業を通して、「もう一つの(内面的世界の)卒業論文」を書くような作業を行い、学生生活にふんざりをつけるような心理的作業を行った。

5) 面接過程の最後に、面接過程を振り返り、全体を統合する作業が行われた事例がある。

6) カウンセラーの役割は、親・教官・友人とは違う立場から移行的な対象としてクライエントの発達を見守ることであり、発達を援助することであった。面接関係ではカウンセラーをいくらか理想化することが見られた。

2.3.3.2 B型の事例

ここでは、卒業期に来談したB型の事例を取りあげ、卒業期の相談面接の中で行われた心理的作業を記述し、その意味について考察する。B型とは、精神的に比較的健全で、面接の中で情報を求めたり、自分の考えを確認したりするなどの現実的作業を行った学生を言う。B型の来談事例は、卒業期3名(10.7%)、大学院修了期4名(23.5%)の計7名(15.6%)であった。ここでは卒業期に来談した2事例を示す。大学院修了期の事例は卒業期の来談事例と大きく異なる点はなかった。

(1)事例3

自分が起こした交通事故によって、就職の内定が取り消されるのではないかと心配して来談した男子学生の事例を示す。

1)事例の概要

事例3は、理系4年生の8月に、「交通事故を起こしたが、将来にさしつかえないか」と来談した男子学生である。家族および生育歴については、相談の性質上詳しく語られなかった。

2) 面接過程

まず、「事故は人身および物損事故だが、比較的軽度で、相手は短期間の治療で直りそう。トラブルもない」と事故の様子を具体的に語った。その後、「ある企業に就職が内定しており、それは自分の希望に沿った進路である」と語り、続いて「事故の費用を保険でまかなおうとしているが、就職内定先の企業に分かってしまい、内定が取り消されるのではないか」という不安を語った。本人および両親が学外で照会したところ、そのようなことはないとのことであったが、不安になって来談したとのことであった。面接の焦点は、交通事故への現実的対応や事故を起こしたことへのショックの話題から、「自分の進路に傷がつくことへの恐れ」へと移り、しだいに「希望通りの大企業に就職できることになったが、うまくやって行かれるか不安」という将来への不安へと移った。全体の話を通して、学生の精神的健康度が高いことがうかがわれ、事故を契機として、将来への不安が増幅された形であらわれたことが明らかになったことを確認して、面接を終了した。

3) 本事例の面接過程の特徴

事例3は、4年生で交通事故の相談で来談した事例であり、1回の面接で終了した。

現実的課題である交通事故への対処が面接の中心となったが、しだいに相談の背後にある進路および将来への不安が語られた。短時間であったが、学生生活を振り返る作業が行われた。交通事故などのトラブルの相談は、学生相談では時々見られるものであり、法律上の問題、親子関係の相談、身体的および心理的問題が語られることが多いが、本事例では、事故そのものをめぐる諸問題よりも、背後にある4年生が抱える進路への不安が関連していることが明かとなった。

(2) 事例4

ここでは、退学の直前に、自分の決意を報告して確認するために来談した男子学生の事例を示す。

1) 事例の概要

事例4は、入学後7年目の理系4年生の7月に、「退学の方法を知りたい」と来談した男子学生である。父親(60歳代)、母親(50歳代)、兄の4人家族であった。1回の来談のため、生育歴は詳しく語らなかった。

2) 面接過程

相談内容を聞くと、「今日退学届けを出そうと思っている」と語った。退学手続きなどの方法については、指導教官とも相談して知っているとのことであった。その後、「去年の春、指導教官と相談して、あと一年頑張ることにしたがうまく行かなかった。実家に帰って家業を継ぐことにした。両親も早めに切り上げて帰って来るように言っている」と語った。結論は出ている様子で、退学という自分の決意を最終的に確かめるために来談した印象であった。単位などを確認して、退学以外の選択肢はなく、学生本人も退学を受け入れようとしていることを確認した。その後、話はしだいに学生生活を振り返る方向に向かった。そして、「2年生までは普通の生活をしてきたが、3年目から糸が切れたようになり、読書とアルバイトに没頭した。春にはがんばることができると、冬になるとがんばれない」、「少しずつ下宿中心の生活になり、風邪で寝ていたのをきっかけに大学に出なくなった。下宿で本を読む生活が多かった。逃げていた」と語り、最終的には、「父の怪我、母の入院で家に帰り、何度も話をするうちに親の気持ちも分かり、家に帰る決心をした。これでいい」と語った。卒業というハードルを越えられない心残りが語られたが、一方では決心をした直後のすがすがしさが感じられた。

3) 本事例の面接過程の特徴

事例4は、在学7年目で退学を前にした学生との短期間の面接であり、1回の面接で終了した。

短い時間であったが、退学の決意を最終的に確認する場所として学生相談室が選ばれた。面接の中で学生は、無気力状態にあった今までの学生生活を振り返り、両親との関係を振り返り、自分の考え、感じ方を確かめ、心理的に「ふんぎり」をつけて、これからの生活に旅立つための準備を行った。1回という限られた時間の中で、学生の心理的世界が凝縮して語られた面接であった。

(3) B型の事例の面接過程の特徴

卒業期に来談したB型の事例の面接過程の特徴は以下の通りである。

1) 学生は、情報の探索、情報の確認、決意の確認などのために自発的に来談した。そのため、面接回数が数回以内で、短期間で終了する事例が多く見られた。

2) 面接では、学生が来談に至った現実的課題への対処、必要な情報の提供、現実的課題についての学生の決意の報告などが行われた。

3) 現実的課題への対処方法については、情報の提供などを主として行った。決意の報告については、聞き手となった。現実的課題そのものは、来談の時点である程度解決している場合も多く、面接では心理的問題が話題となることもあった。現実的な課題の背後に、卒業期ゆえの不安などを示す者がいた。

4) 一部の学生は、A型やC型の学生と同様に、学生生活や親子関係を振り返る作業を行ったが、面接の中心的作業とはならなかった。

2.3.3.3 C型の事例

ここでは、卒業期に来談したC型の事例を取りあげ、卒業期の大学生が相談面接の中で行う心理的作業を記述し、その意味について考察する。C型とは、精神的健康度がⅡ群以下で、面接の中で内面的作業を行った学生を言う。C型の来談事例は、卒業期12名(42.9%)、大学院修了期8名(47.1%)の計20名(44.4%)であった。ここでは卒業期と大学院修了期の2事例を示す。

(1)事例5

ここでは、対人緊張の相談で来談し、短期間の面接によって、「時間に押し流される」という内的な時間感覚が変化した女子学生の事例を、特に時間感覚の変化に焦点を当てて示す。

1)事例の概要

事例5は、文系4年生の10月に、「他の人とうまくやっていけない。緊張、不安が人に伝わるのでは」と来談した女子学生であり、11回の面接を行った。家族は、父親(50歳代)、母親(40歳代)、祖母、兄の5人家族であり、幼い頃から人づきあいが下手で、中学、高校でも人と深く関わる事がなかった。大学に入ってクラブに入ったが、親しい友達ができなかった。相談室には前から来たいと思っていたが、何とかしないと卒業後も大変と思って来談した。

2)面接過程

ここでは、面接過程を2期に分けて報告する。第1期(10月～11月、面接回数5回)では、

初回に相談内容について語った後、しだいに内面的な話題となった。「滝に流されて行く感じ。他の人はしっかりしているのに、自分だけフワフワしている」、「年代年代にやらねばいけないことをやらずに来た」、「歳ばかりとって大人になれない」と自分自身の時間感覚を中心に語った。また、「私と母が池で水浴びをしていると、水が水銀に変わる」など3つの夢を報告した後、母親について、「甘えてしまいそうでうさそうにになってしまう。加減のいい交わりができない」と、今までの関係を振り返りながら語った。そして「ゆううつになると、どうしようもない感じがして、時間の感覚がなくなる」と語った。第3回では、「話すことがない。この場にそぐわないのでは。二人の時は話していないとつらい」と面接場面を通して自分の対人緊張について語った。就職試験に受かったことを報告した後、「首に喰いこんだ糸を切ったらいいと気付いてうれしかったが、切れなかった」という夢を報告した。連想を問うと「今の状況に似ている。黒い糸は時間で、困っていることが時間と共に押し寄せる感じ」と語った。そして、「嫌なことを先に延ばしてしまう。小さい頃金魚を飼っていて、水替えを一日延ばしにしているとある朝死んでいた。今でも水替えを忘れて死ぬ夢を見る」と語った。このように第1期では、しだいに停滞した時間感覚を中心とした話題となった。

第2期（12月～2月、6回）では、このような時間感覚がしだいに変化した。第6回で、「買い物に行って腕時計を落として悔しかった」と語った後、カウンセラーが「時間の話をした後で時計を落とした」ことを指摘すると、萩尾望都の『ポーの一族』という漫画について語り、「吸血鬼になった少年に自分は似ている。少年は、まわりが死んでもずっと生きている。自分の時は止まっているのに外の時間が流れて行くことに耐えられなくて、最後に時計が割れて火の中へ入る。死ぬことでしか止められない」、「私は変化が好きでない。少年は時の流れの中で完全に止まっていようと思うと死ぬしかなかった」と述べた。しかし次の回では、「『ポーの一族』を読み返した。少年たちを死なすことで作者は何かを越えたと感じた」と語った。その後、クラブのコンパで対人場面での緊張がいくらか変化したことを語った後、「バラの花束を自分のために買った。切り花は生臭く、蕾がすごいスピードで開く。今までは生きているものが部屋にあるのが嫌だったが、バラと付き合って、自分も生きていることが並行して感じられた。一人だと時間の感覚がなくなってしまうが、人が集まりそばにいて変わっていくのを見てみると、時間が感じられる」と、時間感覚の変化について語ったため、「時間を実感した？」と問うと深くうなずいた。卒業論文に取り組むため3回休みとした後、「私が吸血鬼の娘。退治されそうになった時、‘今度はいい人間になれるか’と聞くと、相手が‘きつとなれる’と言って杭を振り上げる。黒のドレスがきれいなピンクに変わって、きつとなれると思った」という夢を報告した。連想を問

うと「ドレスのピンクがうれしかった。感じて来たことと夢が合っている。この間のバラの出来事から、ふっと一人でやって行ける感じになった。人間は基本的には一人と分かった」と語った。学生の内的世界の変化を示す夢であった。最後に「卒業論文も、人間は一人というテーマ。書いていて時間が経つのが速く、大事な時間だった。時間と追いつ追われつしている感じだった」、
「これからはアルバイトをしたり旅行に行ったりしたい」と述べた。その後、「就職試験の頃は地元で絡めとられているようだったが、今はちょっと離れた」話から、いつも「したいことをするように」と支えてくれる父親について語った。卒業論文発表、卒業旅行のために3週間後を約束した。3週間後に、「就職のことで忙しい。一人でやっていける感じ」と電話があり、終了した。

3) 本事例の面接過程の特徴

事例5は、大学に入ってクラブに入り、学業上はうまくやって来た女子学生が、卒業が視野に入った進路決定の直前の時期に対人緊張の訴えで来談した事例である。面接過程の第1期では、研究室での対人関係を語り、母親との関係を振り返り、就職決定を報告した。また、「困っていることが時間とともに押し寄せてくる」など、時間に押し流される感じ、自分の時間が動いていないという時間感覚を語った。第2期では、学生は漫画や夢を通して、時間感覚がしだいに变化したことを語った。また、クラブの行事、卒業論文について語り、卒業論文の発表という現実的な行事の直後に終結した。卒業を前にした現実的な時間の流れに乗って面接が進み、学生は面接過程を通して一つの内的作業を行った。

相談内容である現実的課題については、初回に研究室での対人緊張について語った後は面接の中で語ることは少なくなり、夢や漫画などを通して内面的な時間感覚について語るが多くなった。そしてしだいに対人緊張を感じなくなっていることを報告した。

親子関係を振り返る作業については、第1期で、夢の連想から母親との関係を振り返る作業を行い、第2期の最後で、父親との関係について語った。

学生生活を振り返る作業については、前半では、「他の人に比べてしっかりしていない」、「やらねば行けないことをやらずに来た」などと、否定的な形で学生生活を振り返った。後半では、卒業論文のテーマの話から、卒業論文への取り組みや対人関係の話題となり、学生時代を肯定的に振り返った。

本事例では、面接の進展にともなって、学生の内的な時間感覚が大きく变化した。第1期では、学生は、「困っていることが時間とともに押し寄せてくる」などと、時間に押し

流される感じや、自分の時間が動いていない感じについて語った。第2期では、時計を落としたことを契機に、昔読んだ漫画を思い出し、「吸血鬼の少年の止まらない時間」の死を語った。その後、現実生活での対人関係や卒業論文での時間感覚の変化（「早く感じた」）を語り、「バラが開くのを見て時間、生きているのを感じられた」と語った。また、夢を通して時間感覚の変化を語った。このように事例5では、時間の流れを受け入れることができなかった学生が、面接過程を通して変化し、卒業を前にして時間の流れを受け入れるようになった。また、卒業論文の主題と面接の中で語られたことが重なっていた。

(2)事例6

ここでは、進路決定の直前に吃音を治したいと来談し、学生生活および家族関係について振り返った男子大学院学生の事例を示す。

1) 事例の概要

事例6は、理系大学院前期課程2年生の7月に「話し始めの一言が出ない。就職してから困るのではないか」と、吃音の相談で来談した男子学生である。父親（50歳代）、母親（50歳代）、兄の4人家族である。小学校低学年の時、友達から「何を言っているか分からない」と言われて吃音を自覚した。その後どちらかというが目立たない子供で、吃りは続いていた。高校の後半からC大学に入った頃にかけて、何とかしようと思ったが、結果としては吃音に変化がなかった。就職すると吃るのではと考えて大学院への進学を決め、A大学の大学院に入学した。

2) 面接過程

面接過程を3期に分けて報告する。第1期（7月～9月、面接回数9回）は、進路決定までの時期である。初回では、「就職活動が始まり、メーカーを希望しているが面接が不安。これ以上遅くなると吃音が治らないのではと思って相談に来た」と語った。緊張が高い様子であったが、面接場面での吃音はわずかであった。第2回の面接以降沈黙が増え、「今まで僕のような人はいたか、成果があったか」という質問が増え、カウンセラーに答を求めた。しかし、回を重ねるにつれて、「最初は緊張したが、自分のことを言えるようになった」と話し始めた。その後、「食堂で人が聞いていると、言いやすいメニューを注文してしまう」など、具体的な場面について語り、「しゃべる前に失敗するイメージができています」と語った。就職の面接が近づくと、「ちゃんとしゃべれるか」と不安を語り、「電話で約束すること、受け付けで名前を言うこと、行って

挨拶すること、面接で聞かれて答えることが不安。話し始めがうまく行くか」と語り、面接状況を想定して話し合った。その後、就職の面接を終え、「就職は大丈夫そう」と語った。就職の話題が一段落すると、「先生が直情型でついていけない」と、指導教官への不満を語り、「家が好きでない。両親と雑談しない。尊敬していない。父は考えても行動しないし、しゃべらない。母は何も考えずに行動する。もっとうまく育ててほしかった」と、父母への否定的な感情を語った。

第2期（9月～12月，10回）は、吃音の意味について考え、現実生活でも変化が見られた時期である。「打合せに行って、会社の人が澁刺としているのを見て吃音を治したくなった」と語り、その後、「意識し過ぎ」、「溺れることよりも溺れることへの不安が大きい」と、吃音の意味について学生自らが考えてきたことを報告する形で面接が進んだ。また、指導教官の性格の話から母親の話となり、「母と似ている」と母親の性格について語った。また、「社会という崖を登るのに、言葉に気を取られて、能力が出ない」と、将来への不安を語った。一方、「高校時代の友人に電話して1時間位しゃべった。今までなかったこと」、「人に愚痴を言ったことはない」と語った。そして「会社の面接でほとんど普通にしゃべれた」、「ここで毎週やっていることが大きい」と変化を語った。

第3期（12月～3月，6回）では、学生生活を中心に過去を振り返った。「少ない時間を利用してパチンコやボウリングやカラオケで遊んでいる」話から、しだいに対人関係の話となり、「日曜日は家にいない。親がうるさく、気分も滅入る」と親子関係について話した。その後学生生活を振り返り、「3年生の夏に女の子と付き合ったが、しんどくなって自分から振った。電話ができず二の足を踏んだ」と異性関係について語った。また、「テニスサークルに入ったが、自己紹介でつまってやめた」とサークルの話をした。しばらく「修士論文で疲れている」などといった話が続き、最終回の前の回では「修士論文を出し、区切りが出来て気分的には楽になった。ここへ来て体で覚えられた。野球で言えば、どう打てばいいかは分かっていたが打てなかった」と語った。最終回の第25回では、「最初は八方ふさがりだったが、ここでしゃべることで考えるようになった。今までなかった体験」と語った。そして、「時間をかけてこの1年を再確認したい。研究室の先生とのことで苦しんだことも過去のこととなりつつある」と語り終了した。

3) 本事例の面接過程の特徴

事例6は、進路決定を前にして吃音を治したいと来談した男子大学院学生が、学生生活、家族関係を振り返って整理した事例である。

第1期では、吃音を治す話題から、面接関係の話題となり、就職という現実的課題への

対応が一段落した後、教師や父母への感情を語った。第2期では、吃音の意味について考え、現実生活の変化と将来への不安、対人関係の変化を語った。第3期は、対人関係が広がった時期であり、親子関係、異性関係など、今までの対人関係および面接関係を振り返って終了した。吃音をめぐる問題に取り組むことと、今までの学生生活を振り返り、未解決な課題に取り組むことの両方が行われた。

現実的課題としては、最初は吃音への不安と就職活動への不安を主として語り、吃音については具体的な緊張場面について話し合った。就職内定後は、学生が吃音の意味について考えて来たことを報告する形で面接が進んだ。面接過程を通して、吃音はいくらか減少したが、それ以上に、学生が吃音を気にすることが減った。家族関係を振り返る作業については、就職内定後、父母との関係を振り返った。学生生活を振り返る作業については、後半で、研究室での関係、異性関係、サークルなどについて語った。

(3) C型の事例の面接過程の特徴

ここでは、卒業期に来談したC型の事例を取りあげ、面接の中で行われた心理的作業を記述した。その特徴は以下の通りである。

1) A型と同様に、学生とカウンセラーが残された時間、学生生活の終点を意識することによって、短期間に集中的な作業が行われた。面接過程はA型と共通する部分が多く見られた。

2) 相談内容は、神経症的な問題をめぐる学生生活についてである場合が多く、面接の中では、共通した心理的作業が行われた。それは、神経症的な問題への対処、卒業期の現実的課題への対処、学生期以前の生活を振り返ること、親子関係など未解決な内面的課題を整理すること、学生生活を振り返ることであった。

3) 神経症的な問題については、学生が学生期を通して考えてきた問題が多く、卒業期にそれらを整理する場として学生相談室が選ばれた。

4) 卒業期の現実的な問題としては、進路、卒業研究の話題が多く、現実的には問題がすでに解決している場合も見られた。そして、それらをめぐる感情を整理する作業が行われた。

5) 学生期以前の生活を振り返る作業については、親子関係を中心とした神経症的問題をめぐる過去の出来事や精神的葛藤が多く語られた。A型に比べて、より以前の生活を振

り返る作業が行われ、母親の主題を語る事例が見られた。

6) 学生生活を振り返る作業に意味があった。神経症の問題をもつ学生の場合、学業や対人関係などの領域において、学生生活の意義を見出すことが難しいと述べる学生もいたが、そのような学生生活に取り組んだことには意義があったと述べる学生が多くいた。

7) カウンセラーは、学生の現実生活と内面的世界を結ぶ役割を取り、心理療法的接近を行った。安定した面接関係を築くことが難しい学生もいた。

2. 3. 3. 4 D型の事例

ここではD型の事例を取りあげ、卒業期の大学生が相談面接の中で行う心理的作業を記述し、その意味について考察する。D型とは、精神的健康度がⅡ群以下で、面接の中で主として現実的作業を行った学生を言う。D型の来談事例は、卒業期9名(32.1%)、大学院修了期2名(11.8%)の計11名(24.4%)であった。ここでは、卒業期の2事例を示す。卒業期の来談事例と大学院修了期の来談事例とは大きく異なる点はなかった。

(1)事例7

ここでは、就職活動を目前にした混乱のために来談した男子学生の事例を示す。

1)事例の概要

事例7は、文系4年生の8月に「これから会社訪問に行くが、ここへ来て破綻した」と、スーツ姿で来談した男子学生である。父親(50歳代)、母親(50歳代)、兄の4人家族である。小さい頃から一人で遊ぶことが多く、転校が多くて友達がなくて、いつも先生にほめられようとしていた。勉強はできたが人間関係では孤独だった。大学に入っても友人ができず、一人で勉強をして来た。学部の教官に相談して学生相談室を紹介されて来談した。

2)面接過程

初回では混乱している様子で、「今、会社訪問を前にして動悸が激しくてうわの空で困ってる。にっちもさっちも行かない」、「会社で自分のことを聞かれても、何も答えるものがない。性格を変えたい」と語った。面接では、学生の混乱した気持ちを落ち着かせることに時間を費やした。次回に、「思っていたよりも会社訪問はうまく行った。聞いているのが主だった」と語ったが、その後の回では、「内定をもらって、かえって不安になった」と語った。また、「ゼミでグルー

発表をした。うまく行くか不安だったが、何とかできた」とも語った。現実生活はある程度こなしているが、それ以上に不安が高い様子であった。第5回以降では、「自分は異常か異常でないか教えてほしい。性格がおかしいのではないか」、「アドバイスがほしい」などとカウンセラーに答えを求めることが続き、試験が近づくと、「準備ができていなくて、焦りがある」と不安を語った。その後第7回では、母親からの求めで合同面接をした。学生の生活、将来について、母親と学生の考えが大きく異なったことと、母親の強い態度が印象的であった。その後、学生は父母と話し合い、「父は自分が今どういう状態か分かってくれ、最後はあきらめて自分の意見を聞いてくれた。母は分かってくれなかった」と語った。試験が近づくと、「本の字づらだけ追っている。試験勉強に集中できない。勉強が身に入らない」、「留年したい。準備が間に合わない」と語り、一方では、「卒業はしたい」と語り強い不安を示した。その後留年を決めて、就職活動をやり直すこととなった。新学期以降は、実家に帰り、不定期の父親面接が中心となった。時々不登校状態となり退学を希望したが、夏休み前から登校して、就職を決めて卒業した。

3) 本事例の面接過程の特徴

これは就職活動を前にして混乱を示した事例であり、19回の面接を行った。面接での話題は、就職面接、ゼミの発表、試験、留年などの現実的問題を中心に展開した。面接では、時に親子関係などの内面的問題が語られたが、学生の現実生活での不安を支えること、危機介入が中心となった。

(2) 事例8

ここでは就職の内定直前に、卒業研究に取り組む時点で、研究室で混乱して被害感を示した男子学生の事例を示す。

1) 事例の概要

事例8は、理系4年生の11月に、「卒業実験がうまく出来ず、大学に出られない。医師には精神障害と言われた。家に閉じこもっており、不眠で被害感が強かったが、今はいづらか落ち着いた。これからどうしたらよいか」と父親が来談した。家族は父親(50歳代)、母親(40歳代)、弟の4人家族である。父親によると、幼いころは手のかからない子供で、いじめの対象になりやすく、高校では友達がいなかった。大学では一時友達が出来たが、脅迫されたと言って関係を切った。就職の内定直前まで行っていた、とのことである。

2) 面接過程

面接過程を3期に分けて示す。第1期（11月～3月，5回）は、父親面接を中心に行った。父親は医療機関への不信感が強く、学生を何とか来談させて卒業に結びつけたいという意気込みが伝わって来た。ある回、父親についてきた学生は、「今は人の目が気になるくらい。復学すべきだが行けない。自分の胸の内を打ち明けたい。毎日行く所がない」と述べ、「大学を何とかしようというよりは、どこかで人と接触をもちたい」と述べた。カウンセラーは、父親からの相談の時点では、医学的な治療は現在の病院で行われるのが良いと判断し、父親への助言を中心にしていく方針を立てたが、学生からの「誰かと話したい」という気持ちが強く伝わってきたため、病院への通院を前提として、生活の話題を中心にして隔週で面接して行くこととした。その後学生は休学を決めた。

第2期（3月～10月，16回）は、学生が休学してから、退学するまでの時期である。「映画を見たり、プールに行っている」、「だらけている」と生活の様子を語り、「人間関係に飢えている。どこにも所属していないので社会と対立している感じ」と語った。父親は何とかしようとして、学生を「設備の整った病院」に連れていったりした。学生に父親について聞くと「今まで余り話さなかったが病気になってから仲良くなった」と語った。学生は夏休み後の時点で大学に出始めたが、数日しか続かず、それを機に父親と話して、大学を続けることは無理と、やや性急に退学という結論を出した。この時期学生は、生活、父親との出来事、医師との話の報告などを中心に話した。退学後「自分が社会でやって行けるかどうか教えて欲しい。やって行けると言って欲しい」とカウンセラーに保証を求めることが増えた。退学後もしばらくフォローアップ面接を行うこととした。

第3期（退学後1年目11月～2月，15回）は、学生が自分の過去を振り返った時期である。生活については「家の仕事を手伝っている。自分が宙ぶらりんだから人が悪く思っていると考えてしまう」と語り、過去については「相手の思っていることが頭の中に浮かんで来た」、「相手を敵か味方かすぐに判断してしまって人間関係がおかしくなった」と語った。また不安になるたびに「自分は遅れているか。どう見えるか」と確認を求めて来た。社会復帰のため塾などのアルバイトを始めようとするがうまく行かず続かないことが繰り返され、しだいに現在の自分を受け入れる作業が行われた。

3) 本事例の面接過程の特徴

事例8は、就職の内定直前に、卒業研究に取り組む時点で、被害感を示した男子学生の事例である。父親面接に始まり、学業および医学的治療をめぐって、父親と本人の調整を行った。その後、学生との面接を始め、生活の報告が中心の時期を経て、学生は退学を決意した。その後、経過観察の意味を込めてしばらく面接を続けた。学生はカウンセラーに保障を求めることが増えた。退学後は、発症時など、過去を振り返り、不安が強まる時もあったが、しだいに安定した関係が持てるようになった。後半では、社会復帰が主な話題となり、学生が自分の状態を受け入れる方向に向かった。

(3)D型の事例の面接過程の特徴

ここでは、卒業期に来談したD型の事例を取りあげ、面接の中で行われた心理的作業を記述した。その特徴は以下の通りである。

1) D型では、症状への対処と大学生活を中心とした現実生活への対処が面接の話題の中心となる事例が多く見られた。

2) 面接では、学生が直面する精神障害や心理的混乱の報告およびそれらへの対処、学生生活の報告が中心となり、現実的課題への対処が行われた。

3) 就職、卒業研究などといった卒業期の現実的課題が、不安や混乱を引き起こす契機となることが見られた。

4) 不安や混乱が落ち着いた後、学生期以前の生活を振り返る作業や、学生生活を振り返る作業が行われた事例がある。

5) カウンセラーの役割は、学生の現実生活を支えることであった。

2.3.4 考察

卒業期来談事例の面接過程の特徴は以下の通りである。

(1)4類型の面接過程の特徴

第1に、4つの型で面接過程が異なり、内面的作業を行ったA型とC型、現実的作業を行ったB型とD型の面接過程に共通点が見られた。

A型とC型では、学生とカウンセラーの双方が、ともに残された時間を意識し、学生生

活の終点であり面接の終点でもある卒業の時点を意識することによって、短期間に集中的な作業が行われた。そして特に、進路決定や卒業論文といった現実的な課題が一段落した直後から卒業までの短い期間が大きな意味をもった。この期間に面接が深まり、それまで現実生活の中で課題となっていたことが、内面的な課題と結びついた事例が見られた（事例2、事例5、事例6）。この期間に今までの学生生活をまとめ、新しい社会生活に入るための心理的作業が行われた。また、このような作業を通して、青年期特有の拡散した時間感覚から、しだいに現実的な時間感覚を受け入れる方向へと変化した事例が見られた（事例5）。

B型とD型では、現実的な問題が話題となることが多く、学生生活の終点を意識した話題や時間感覚の変化が直接語られることは少なかったが、現実的な問題の背後に、卒業や、卒業後の生活が意識されていることがうかがわれる事例が見られた。

また、面接の進展につれて、他の型から、精神的健康度が高く内面的作業を行うA型へと移行した事例が見られた。卒業期の事例では、2名がC型からA型へと移行し、大学院修了期の事例では、2名がB型からA型へと移行した。

(2)A型とC型の面接過程

1)A型とC型の事例の相談内容と心理的作業

A型とC型の事例では、来談契機となった相談内容はさまざまであったが、面接の中では共通した心理的作業が行われた。

A型の事例1では、恋愛の問題で来談した学生が、親子関係、学生生活を振り返り、その後失恋を受け入れた。事例2では、進路の問題で来談した学生が、父親との関係を中心とした親子関係を振り返ることを通して自分を受け入れた。

C型の事例5では、対人緊張の問題で来談した学生が、母親との関係を振り返り、時間感覚の変化を通して内面を見つめ、学生生活を振り返った。事例6では、神経症的問題で来談した学生が、学生生活、親子関係、面接関係を振り返る作業を行った。

このように、A型およびC型の事例の相談内容は、卒業論文・修士論文、進路、対人関係、神経症的問題などであり、卒業期固有の特徴は見られなかった。しかし、面接の中で行われた心理的作業には共通した特徴が見られた。それは、現実的な課題に対処すること、親子関係を中心とした過去の未解決な課題を振り返ること、学生生活を振り返ること、内

面的な課題と現実的な課題を結びつけることであった。学生はこのような作業を通して、過去と現在と将来を結びつけ、自分を客観的にとらえて受け入れる作業を行った。

2) A型とC型の事例の面接過程の特徴

以下、卒業期のA型とC型の事例の面接の中で行われた心理的作業の主なものについて述べる。A型とC型では、面接過程は、現実的課題への直面期、学生期以前の生活レビュー期、学生生活レビュー期、統合期と分けられた。

a) 現実的課題への直面期

「現実的課題への直面期」とは、面接関係が成立した後、学生が直面した現実的課題をめぐって面接が進展した時期である。学生とカウンセラーとの間で面接関係が成立した後、学生がしだいに現実的課題に直面する経過が見られた。

A型とC型の事例では、来談の契機となった現実的課題はさまざまであり、固有の特徴は見られなかった。また来談以前に、卒業研究、進路決定といった卒業期の現実的な課題をある程度処理して来た学生が多く見られたが、来談後に残された現実的な課題に直面した。そしてそのことを契機として、しだいに過去を振り返り、未解決な内面的課題に取り組んだ事例が見られた。

A型では、卒業期と大学院修了期の7名中6名が、C型では、20名中7名が進路決定の前後に来談した。これは、卒業期の学生にとって進路決定が大きな意味をもつことを示すものである。そして特に、精神的健康度の高い学生にとって進路決定が大きな意味をもつことが明らかになった。進路決定の時期は、学生が卒業を間近にした時期であり、卒業期の現実的な課題に取り組む時期であり、卒業までの残された時間を意識し始める時期であると思われる。

b) 学生期以前の生活レビュー期

「学生期以前の生活レビュー期」とは、大学入学以前からの未解決な問題を振り返り整理することが中心となる時期であり、主として親子関係が語られた。

A型とC型の事例では、学生期以前の生活を振り返る作業が進展するにつれて、親子関係を整理した後に親を受け入れ、その後自分自身を受け入れる過程が見られた。A型の事例1は、恋愛の話題から、幼児期の家族関係、特に母親との関係を振り返り、母親への不

満を述べた後、しだいに受け入れた。事例2は、学生生活への違和感と父親への反発を語った後、反発を軸とした今までの生き方への戸惑いを語り、反発の奥にある肯定的感情にしだいに気づき、父親を受け入れた。C型の事例5では、現実生活での対人緊張について語った後、夢の報告を契機として母親との関係を振り返った。そして時間感覚の変化について語った後、自分を受け入れてくれる存在として父親について語った。事例6では、就職という現実的問題が一段落して吃音への不安が減少した後、指導教官との関係を語り、その後両親、家族との関係を振り返った。

親子関係の話題はあらゆる学年で語られたが、学生の性差にかかわらず、一般に新入生の時期には母親（またはそれに代わる人）からの分離が主題となることが多く（14.8%）、卒業期には父親（またはそれに代わる人）との関係を整理し直すこと、受け入れることが主題となることが多く見られた（32.1%）。これは、卒業期には母親からの心理的分離が進み、社会生活への移行が課題となるためと思われる。また大学院学生でも、修了期に父親との関係を語る事例が多く見られたが、指導教官などの具体的な対人関係を通して父親の主題があらわれることが特徴であった。卒業期の父親との関係について、Margolis, G. (1989) は、「権威（父親）に対する未解決な問題を学部の指導教官との間で起こして、卒業研究で苦境に陥っている学生もいる」と述べている（87頁）。またRoulet, N.L. (1976) は、4年生が示す「成功することへの不安」が、「エディパルなライバルである父親を征服することをめぐる不安」であるとしている（232頁）。

c) 学生生活レビュー期

「学生生活レビュー期」とは、学生生活を振り返り整理することが中心となった時期である。

卒業期のA型とC型の多くの事例では、学生が面接を終了して大学キャンパスを離れるにあたって、学生生活を振り返る作業が行われた。A型の事例1では、恋愛の相談の後、幼児期の親子関係を語り、その後、学生生活を振り返った。学生は、「成績を支えにして来た優等生が破局を迎え無気力となった」、「コンプレックスをはね返すための就職」などと学生生活の否定的側面について語った後、「マイナスをがんばったことはプラス」と肯定的側面についても語り、恋愛に学生生活を埋め合わせる意味があったことを理解した。事例1にとって学生生活を振り返ることは、相談内容（恋愛）の意味を理解することと密接に結びついていた。事例2では、大学院入学をめぐる進路の相談から、父親への反発を

語り、その後しだいに父親を受け入れた。そしてそのことと前後して、「一人で長い距離を歩いた」話など、学生生活のさみしさを語り、その後学生生活を一気に振り返った。C型の事例5では、面接の中では時間感覚の変化を中心に語り、学生生活については卒業論文への取り組みなどという形で付随的に報告し、卒業論文の内容と学生の内面的世界が重なっていることが明かとなった。事例6では、現実的課題が一段落した後、対人関係と異性関係を中心に学生生活を振り返った。

卒業期の相談面接では、学生生活レビュー期に注目することが意味をもった。ここに示したA型とC型の事例に限らず、多くの事例において、学生生活を振り返る作業が、幼児期以来の生育歴を振り返る作業の前後に、生育歴を振り返る作業と重なる形で行われた。学生生活を振り返る作業の中であらわれた主題を詳しく見ると、生育歴を振り返る作業の中であらわれた主題と重なっている場合が多く見られた。卒業を前にして学生生活を振り返る作業は、過去の生育歴を振り返る作業とも、現在の課題に取り組むこととも重なる作業であり、現実的課題と内面的な課題との橋渡しを行い、過去と現在とを橋渡しするものであった。学生はこのような心理的作業を通して、学生生活に「ふんざり」をつけ、「もう一つの（内面的世界の）卒業論文」を書くような心理的作業を行った。

また、卒業期という移行期の面接の中では、以前の移行期において未解決であった課題、特に大学への入学の前後の時期に未解決であった課題が再びあらわれることが見られた。たとえば事例1では、母親からの分離の問題が、事例2では、入学時の進路変更の問題が、卒業期に再びあらわれた。Margolis, G. (1989) は、卒業期は「以前の喪失、移行の瞬間を呼び覚まし」、「生、死への感覚を深める」時期であると述べている。(87頁)

また、学生生活を振り返る作業の中で、特に進路決定をめぐる作業が大きな意味をもっていた。なぜなら、進路決定は、大学生にとって、今までの学生生活をまとめる作業であり、将来の社会生活への準備作業でもあるからである。学生が進路決定の前後に来談した場合、進路選択の過程を振り返ることが、面接の中心的な作業となった。また、進路決定の後に来談して、進路選択の過程を振り返る作業をした学生がいたことは注目に値する。

また、事例2のように、選択しなかった進路への別れの作業をするために来談したと思われる事例が見られた。事例2は、「父親を乗り越えるために上昇する」という生き方への別れの作業を行った。卒業期の進路をめぐる相談では、学生が選択しなかった進路に注目することが意味をもつ場合が多い。学生が選択しなかった進路には、親からの学生への期待や、学生の願望などが込められており、なぜ学生がこのような願望を持ち、どのよう

にしてこのような願望からの別れの作業を行ったかについて、丁寧に聞くことに意味があった。多くの事例は、このような作業の後、将来の進路について具体期に語った。「なぜ選んだか」という問いからは明らかにならないことが、「なぜ選ばなかったか」という問いから明らかになる場合が見られた。

d) 統合期

「統合期」とは、学生が来談の契機となった現実的課題と、面接過程の中で語った内面的課題とを統合した時期であった。進路決定、卒業研究といった卒業期の現実的課題が一段落してから卒業までの短い期間に、現実的課題と内面的課題を統合するような作業が行われた事例がある。

(3) B型とD型の面接過程

第2に、B型とD型では、精神的健康度は異なったが、ともに現実的課題への対処、情報提供が中心になり、A型やC型に比べて面接過程の変化が少なく、面接過程を期として分けることが難しかった。

これらの事例では、卒業期の現実的な課題が相談内容の中心となることが多く、現実的な課題への対処および決意の報告が主となった。事例3などB型の事例では、背後に卒業を前にしている不安や社会人となることへの不安がうかがわれる事例も見られたが、面接ではこのような不安が中心的な話題とはならず、内面的な課題にまで至らない事例が多く見られた。事例7、事例8などD型の事例では、卒業、就職、休学などの現実的な問題が話題となった。面接回数が多い場合には、面接が進展して現実的問題が安定するにつれて、症状や親子関係をめぐる内面的課題を語ったり、将来への希望のなさや快復への希望を語ったりして、今までの生活を振り返ることが見られた。

また、退学を前にした事例では、今までの学生生活を振り返ることが見られた。

(4) 大学院修了期の面接過程

第3に、卒業期と大学院修了期の面接過程には多くの共通点が見られたが、大学院修了期では、事例6に見られたように、指導教官との現実的な対人関係と父親との内面的関係が重なるなど、現実生活の具体的問題を通して内面が語られることが多く見られた。

(5)面接関係の特徴

A型およびC型の事例では、カウンセラーには、内面的な課題に取り組む治療者としての役割だけでなく、学生の発達を援助する役割が求められた。

A型の事例では、学生はカウンセラーに対して自分を位置づける役割、内面的課題に取り組むための治療者の役割、現実的な課題に取り組むための共同作業の相手の役割などを求めた。カウンセラーの役割は、親・教官・友人とは違う立場から学生の発達を見守ることであった。事例1では、学生はカウンセラーに、自分を位置づける役割を期待し、短期間の面接の中で、依存的な関係からしだいに依存的でない関係へと変わった。事例2では、学生はカウンセラーに対して、一方で挑戦的で一方で依存的であったが、カウンセラーが学生の感情を受けとめるにつれて関係が安定した。

B型の事例3、事例4では、学生はカウンセラーに対して情報を提供する役割、自分の考えを確認する役割を求めた。

C型の事例では、学生はカウンセラーに対して自分を位置づける役割、内面的課題に取り組むための治療者の役割を求めた。学生はカウンセラーとの信頼関係を通して、現実的課題や神経症の問題への対処からしだいに内面を整理する方向に向かった。事例5では、現実的課題からしだいに時間感覚を語る形で面接が進展した。事例6では、学生はカウンセラーに不安を訴え、吃音を治すことを期待したが、面接の経過を通して、しだいにともに内面を見つめる形で面接が進展した。

D型の事例7では、卒業期の現実生活への対応を中心に面接が進展した。事例8では、学生生活を中心に面接が進展した。ともに学生はカウンセラーに学生生活を援助する役割を期待した。

(6)まとめ

研究Ⅲでは、卒業期の28名および大学院修了期の17名の来談事例について、精神的健康度と、面接で行われた心理的作業を軸として4つの類型に分け、その面接過程を記述した。

4類型とは、自分らしさを探究する群（A型）、情報や確認を求める群（B型）、過去の未解決な課題に取り組む群（C型）、精神的な混乱を示す群（D型）であり、それぞれの面接過程に特徴がみられた。

A型およびC型では、面接過程は、現実的課題への直面期、学生期以前の生活レビュー期、学生生活レビュー期、統合期と分けられた。学生生活レビュー期は、学生生活を振り返る時期であり、学生の過去と現在を橋渡しする重要な時期であった。

B型とD型では、現実的課題への対処や情報収集が中心になり、面接過程の変化は少なかった。

2.4.1 目的と方法

本研究では、卒業生が就職活動を通じて経験した面接過程の類型を明らかにし、その特徴を明らかにし、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係について検討し、学生の就職活動に対する支援策を提言することを目的とした。

本研究は、卒業生を対象としたアンケート調査と面接調査を行った。アンケート調査は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係について検討するために実施された。面接調査は、面接過程の類型の特徴を明らかにするために実施された。アンケート調査の結果は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係を示している。面接調査の結果は、面接過程の類型の特徴を示している。

本研究では、卒業生を対象としたアンケート調査と面接調査を行った。アンケート調査は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係について検討するために実施された。面接調査は、面接過程の類型の特徴を明らかにするために実施された。アンケート調査の結果は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係を示している。面接調査の結果は、面接過程の類型の特徴を示している。

2.4.2 先行研究の概観

就職活動に関する研究は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係について検討するために実施された。面接調査は、面接過程の類型の特徴を明らかにするために実施された。アンケート調査の結果は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係を示している。面接調査の結果は、面接過程の類型の特徴を示している。

本研究では、卒業生を対象としたアンケート調査と面接調査を行った。アンケート調査は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係について検討するために実施された。面接調査は、面接過程の類型の特徴を明らかにするために実施された。アンケート調査の結果は、就職活動の進捗状況と面接過程の類型との関係を示している。面接調査の結果は、面接過程の類型の特徴を示している。

2.4 卒業期以前からの継続来談学生の卒業期の特徴 (研究Ⅳ)

2.4.1 目的と方法

研究Ⅳでは、卒業期以前に来談した学生が卒業期を迎えた事例の面接過程を示し、学生相談において、入学から卒業までという大学キャンパスの時間的枠組みがどのような意味をもつかについて検討し、特に卒業期の意味について検討した。

以下に概観するように、卒業期以前に来談した長期継続事例がどのように卒業期を迎えるかについては、従来、卒業期に終了した事例の報告は少なく、卒業時に終了できなくて卒業後も面接を続けた事例の報告、4年間で卒業が困難であり卒業までに長期間の面接を必要とした事例の報告、あるいは大学キャンパス以外の場所での大学生への援助活動の報告がある。また、従来の研究においては、精神的健康度が低く、重い病理をもった学生の事例報告が多く、長期事例の卒業期の特徴に注目した事例報告は少ない。

本研究では、卒業期に終了した長期事例の面接過程を記述し、長期事例にとっての卒業期の意味を検討する。そのため、卒業期以前から来談した事例を類型ごとに示し、学生期の下位時期にそって面接過程を記述する。

2.4.2 先行研究の展望

卒業期に終了した長期継続事例の報告は多くない(岡, 1986、岡, 1987、下山, 1987、末廣, 1992、竹内, 1995)。岡(1987)は、試験恐怖を訴えて来談した1年生の男子学生が、4年間の危機介入、自己催眠、対話療法によって自己発見に至った事例を報告している。下山(1987)は、離人症を訴える学生との入学から卒業までの面接過程を報告し、大学の4年間で大きな箱庭のような枠組みとなり、その中で退行的で創造的な活動が行われたことを指摘している。また、竹内(1995)は、2年生で「自分が分からない」と来談した女子学生が卒業するまでの面接過程を報告し、卒業期には現実生活を中心に考えて背後の問題に触れないようにしたこと、終結を話題とした後に見捨てられ不安が生じたことを報告している。

卒業期に終了できず、卒業後も面接を継続した事例の報告がある（岡，1991、小柳，1992、池田，1992）。小柳（1992）は、新入生の時点で自己臭を訴えて来談した男子学生との学生期の間面接過程と、卒業後の電話による4年間のフォローアップの過程を報告し、学生期の間面接関係が成立して主訴が消失したが学業や進路などの現実的な課題に圧迫されることが多かったこと、卒業期にさまざまな課題を克服して何とか卒業したこと、卒業後も電話による面接が必要で終了できなかったことを報告している。また、岡（1991）は、大学入学後、離人感や抑うつを訴えた男子学生が、サークル活動などを通して父親と母親を見直し、卒業後もしばらく面接を続けることによって自己成長を遂げていった過程を記述している。

これらの報告では、卒業期に現実的な課題への取り組みが行われて卒業という形となったが、学生のもつ問題の深刻さゆえに、卒業が面接の終点とならなかったことが報告されている。

また、4年間で卒業が困難であり、長期間の面接を必要とした事例の報告がある（藤原，1985、羽下，1993、岩村，1995、下山，1988、下山，1992）。下山（1992）は、抑うつ、自殺未遂の問題で来談した学生との6年間にわたる面接過程を報告し、学生の病的混乱に対して、カウンセラーが人間的な付き合いを通して支えることによって、学生のライフサイクルの流れをつなぐ役割を果たしたこと、休学後の卒業期に学生が混乱の意味を見直したこと、その後就職の準備を行ったことを報告している。また、藤原（1985）は、不登校、不眠、生活の乱れを相談内容とする精神病圏の大学生との8年間の面接過程を報告し、面接過程が、導入と治療形態の確立の時期、現実生活の安定と自己認知の支持の時期、生活の拡大と適応増進への援助の時期と分けられること、学生が精神病圏から神経症圏へと緩やかに移行したこと、8年間かかって卒業への見通しができたことを報告している。

これらの報告では、学生のもつ心理的、精神的問題のために、4年間での卒業が難しかったこと、休学や留年が結果として学生の心理的成長に寄与したことが報告されている。

また、大学キャンパスにおける学生相談以外の場所での、大学生年代の青年への援助活動の報告がある（細野，1986、吉田，1995）。吉田（1995）は、分裂病学生の大学在学中から退学後の期間までの病院での援助の経過を報告している。

これらの報告では、大学キャンパスの時間的枠組みを強くは意識しない援助活動が報告されており、卒業が重要な枠組みとなっていない場合がある。

以上の文献では、面接過程が必ずしも学年や下位時期によって区分されているわけでは

ない。そのため、学年や下位時期ごとの面接過程の特徴が記述されていない報告も見られる。

2.4.3 結果

ここでは、A型（自己探究型）、C型（内面整理型）、D型（混乱対処型）の長期継続事例の面接過程について述べる。B型（確認型）の事例は短期間で終了するケースが多く、長期間継続した事例は見られなかったため、ここでは取り上げない。本節で示す事例は、卒業期以前に来談した長期継続事例であるため、第2節で取り上げた卒業期の来談事例とは異なった事例である。

ここでは大学キャンパスの時間的枠組みにそって、長期継続事例の面接過程の特徴について考察する。大学キャンパスの時間的枠組みの特徴とは、学年・学年暦といった大学キャンパス特有の時間的枠組みがあること、発達上青年期後期にいる大学生に特有の時間感覚があること、面接の構造としての時間的な枠組みがあることを言う。

2.4.3.1 A型の事例(事例9)

A型とは精神的健康度が高く、面接の中で内面的作業を行った学生を言う。A型の事例は比較的短期間で終了するケースが多く、卒業期以前に来談して、卒業期に終了した長期継続事例は多くない。ここでは、1年生で来談した事例を示す。

事例9は、入学期にクラブについての相談を契機に来談した文系男子学生である。卒業までの4年間に64回の面接を行った。

(1)事例の概要

「体育系のクラブに入ったが、自分に合わなくて迷っている」と、1年生の5月に来談した。家族は父親（50歳代）、母親（40歳代）と妹の4人家族である。生育歴上特別な問題はないが、長男ということで厳しく育てられた。中学、高校は体育系クラブ中心の生活を送った。大学は父親と同じ理系学部に行くことを期待されたが、自分で合わないと考えて文系学部を決め、1年間浪人して入学した。

(2)面接過程

1) 入学期：面接回数18回

初回では、「クラブで感じが合わない。突っ込んだ話をしなくて、一緒に何かをやる感じがない」と述べ、その後「クラブに代わることをしたい」とクラブをやめた。面接の目的を再確認して、学生の希望で、「自分を見つめる」ことを目的とした面接を継続することとした。夏休みは、「時間を自由に使えることが初めてで戸惑っている」と語った。秋以降は、ゼミ合宿に参加したりアルバイトを始めたりして、「やっと大学生になった」、「もっと緊張感が欲しい」と語った。このころ父親について、「考え方が違う」と語った。冬以降、「高校時代からの友人が芸術家をめざしている姿に圧倒された」と語り、一方では、「懐かしさが接点。少しずつ離れて行く」とも語った。春休みは「スケッチをしたり、本を読んだりして自分のために使った」と語った。

カウンセラーは、クラブへの違和感の背後に大きな問題はないと判断し、「自分をどうやっていっかが課題」などと、学生が青年から大人への移行過程にいるという理解を伝えた。冬以降は、学生が内面的な日記を書くような作業をするために来談していると感じた。

入学期では、現実生活の報告が面接の中心となった。学生はこれまでの生活を継続し、講義やクラスでの交流以外は大学外での生活を展開した。しかし後半では、今までの対人関係が変わりつつあること、新しい生活を摸索していることを語った。

2) 中間期

a) 2年生：21回

異性との付き合いをめぐって面接が展開し、恋愛感情、友人関係を中心に語った。また、生活の節目ごとに叔父に相談して、「将来の仕事の話を分かってもらえた」、「父が苦労人であることが分かった」と、父親への見方の変化を語った。夏休みは、恋愛や友人関係に忙しく、一方で読書やスケッチの時間をもった。冬以降、ゼミの選択と決定を経て自分の関心を明らかにし、研究室での行事を通して新しい対人関係を作って行った。また「好きな先生の所へ話しに行った」と、語学の教師について語った。

学生は面接の中で、恋愛をめぐるさまざまな感情を言語化し、対人関係や学生生活について報告し、読書の話題を通して内面を語った。カウンセラーは学生の興味や関心を整理するよう努め、友人関係のトラブルについては助言した。

この時期は、学生が1年生からの生活を継続する一方で、恋愛が中心となった時期であり、学生は刻々と変化する感情を報告した。また、学業や進路の領域において、少しずつ将来の方向性を語った。

b) 3年生：14回

ゼミでの発表や友人との交流で忙しく、アルバイトでの人間関係を通して自信をなくす体験をした。進路についての考えをまとめようとして、叔父と話したり、入門書を読んだり、先輩の大学院生に会ったりしながら、何に興味があるかを見出そうと積極的に動いた。

学生はカウンセラーから心理的に少し離れて、大学やアルバイトでの体験や、進路について外で得た情報を報告し整理した。進路をめぐる質問することが多く、カウンセラーは助言を交えながら、時々不安に陥る学生を支えた。

この時期は、ゼミを中心とした生活を展開した時期であり、将来への準備を行い、少しずつ進路を具体的に決めた。

3) 卒業期：11回

学生は、「進路が固まった」と、大学院への進学を決め、さまざまな人と会いながら関心を明らかにした。受験勉強をし、卒業論文を書き、大学院に合格した。研究内容の話題が多く、研究への関心を語ることを通して自分の内的関心を語った。

学生は、進路を決定し卒業研究をまとめることに時間を使った。進路決定後、それまでの忙しくてあわただしい時間感覚が、いくらか緩やかなものへと変化した。卒業までの残された時間をはかるようにして現実的な作業を行った。

この時期は、およそ月に1回の面接であり、学生が考え感じたことを報告して整理した。学生は、具体的な行動や読書を通して、自分の関心を明らかにし、進路を決定した。学生とカウンセラーが一緒になって進路決定という目標に向かった。

(3) 卒業期の面接過程の特徴

事例9のように、精神的健康度が高く内面的作業を行った長期継続事例が卒業期を迎えた場合、卒業期の面接過程の特徴は以下の通りであった。

1) 全体的特徴

入学期に、新しい生活への移行が課題となり、中間期に、恋愛とゼミを中心に学生生活が展開して自分を見つめる作業を行ったのに対して、卒業期では、研究と進路決定が面接の中心的な話題となり、学生はカウンセラーからいくらか距離をとり、学生生活を振り返り報告する場として面接を利用した。

2) 面接関係の特徴

入学期から中間期にかけては、カウンセラーは学生生活上の出来事を聞き、内面を見つめることを援助する役割を期待されたが、卒業期には、このような緊密な関係が弱まり、現実的課題に取り組む相手、時々帰る繋留点としての役割を期待された。面接過程の進展にともなってカウンセラーへの期待とカウンセラーの役割が変わった。

3) 時間の特徴

a) 入学から卒業までという時間的枠組み

入学期では、学生は活動的に学生生活を開始し、一方で自分を見つめる時間をもった。中間期では、対人関係が深まり、将来について考えることが増えた。卒業期では、自分の関心を明らかにし、将来への準備のために時間を使った。

b) 学生の内的な枠組みとしての時間感覚

入学期では、自由な時間への戸惑いを行動で埋め、一人旅をするなどして内面を見つめた。中間期では、対人関係と進路決定に忙しく、「立ち止まる暇がない、自分の時間がもてない」と述べた。卒業期では、進路決定後それまでのあわただしい時間感覚がいくらか変化し、卒業までの残された時間の中で卒業のための準備作業を行った。

c) 面接の構造としての時間的枠組みの特徴

入学期では、例外を除いて毎定期的に来談した。中間期では、忙しい現実生活のため間隔をあけて定期的な面接を行った。卒業期では、現実的課題を優先して面接の回数を減らした。このように、しだいに面接の間隔が開いた。面接が、学生が自分を見つめる場所、学生生活を振り返る場所から、しだいに学生生活を報告する場所となり、学生にとって時々帰る繋留点となった。

4) 学生生活の領域ごとの特徴

ここでは学生生活を、学業、進路、学生生活、対人関係、親子関係という5つの領域に分け、それぞれの領域ごとの変化過程について述べる。

a) 学業

入学期では、学生は受験勉強から離れ、興味や関心の方向を漠然と定め、講義や読書を通して自分の関心を探った。中間期では、少しずつ関心を明らかにし、ゼミの発表や卒業論文のテーマを話題とした。卒業期では、教官と相談しながら自分の関心を焦点づけ、受験への準備を行い、卒業論文に取り組んだ。卒業論文の主題は、学生の対人関係のあり方と関連するものであったが、学生は一定の距離をもってその主題と取り組んだ。

b) 進路

入学期では、これまでの進路選択の過程を振り返った。将来については曖昧であった。中間期では、しだいに具体的な進路の話題が面接の中心を占め、さまざまな人と会って進学を決めた。卒業期では、進路のための準備を行い、合格して進路を決めた。

c) 学生生活

入学期には、新しい学生生活を展開した。クラブをやめた後は、アルバイトからさまざまな刺激を受けた。中間期に入って、ゼミを中心とした生活を送ったが、「何もなくて毎日が過ぎて行く。地に足がついていない」と述べた。卒業期では、関心が進路に集中し、学生生活は余り話題とならなかった。

d) 対人関係

入学期には、高校時代の友人関係を継続したが、後半では関係が変化し、「自分に合った友達が欲しい」と繰り返し語った。中間期では、恋愛感情、異性との気持ちのズレなどについて感情を込めて語った。また、尊敬する教官のところへ機会を見つけては話しに行った。3年生では、ゼミでの緊密な付き合いが始まり、「ユニークな人が多い」と述べた。卒業期では、進路と関連して多くの人と会って自分の関心を焦点づけた。

e) 親子関係

入学期では、父親との進路をめぐる意見の違いを語った。中間期では、父親を客観的に見るようになったと語った。卒業期では、両親に進路についての考えを伝えたこと、両親ともに進路について理解を示したことを報告した。入学期を除いて、過去の親子関係が話題となることは少なく、現在の親子関係が話題の中心となった。

5)まとめ

本事例の卒業期の特徴は、学生にとって現実生活が中心となり、学生がカウンセラーからしだいに離れ、面接の場が学生にとって時々帰る繋留点となったことである。学生は、面接の中で現実生活の課題に取り組みながら、学生期や学生期以前の生活を振り返った。また、卒業期には学生の時間感覚が現実的なものへと変化した。卒業期には、現実的課題への対処を優先し、面接の間隔が開いた。進路決定後、学生はは自分を見つめる時間をもった。

2.4.3.2 C型の事例(事例10)

C型とは、精神的健康度が低く、面接の中で内面的作業を行った学生をいう。C型の事例は、比較的長期間継続するケースが多く、卒業期以前に来談して卒業期に終了した長期継続事例が見られた。

事例10は、「友達を作る資質がない」と、1年生の6月に来談した理系の男子学生であり、卒業までの5年間(留年1年を含む)に164回の面接を行った。

(1)事例の概要

「友達ができない。友達を作る資質がない。教室で息苦しく、押さえつけられる感じがする」と来談した。家族は、父親(50歳代)、母親(40歳代)と弟であった。小学時代にいじめられた体験をもち、高校時代には孤立していた。大学に入ってから、講義を聞くだけの生活で、音楽系のクラブに入ったが打ち解けられず、家に帰るとホッとすると、と生育歴について述べた。

(2)面接過程

1)入学期：面接回数30回

前半では、相談内容について語った後、「人の話が分からず、いつも一人。自分だけ異質」と語った。次いで「母がヒステリーのように、小さい頃父母がいつもけんかをしていてさみしかった」と、家族の問題を語った。その後、「家では母が問題というより、父に対して緊張する」、「人より劣っているのではないかと緊張する」と述べた。このころ、クラブをやめたことを報告

した。後半では、「友達が欲しいが自分の基準がズレていて、負担に思われるのではないか」、「自分を出していじめられたため引っ込めている」と、人とのズレをめぐる感情を語り、「電車で肩を怒らせている人と目が合うのが怖い」と、対人恐怖のエピソードを語った。これらの連想から「いつも人の言葉を押さえこむ父親」の話題となった。その後、「面接を続けて先生に迷惑では」と面接関係に触れたのを契機に、「ここでも同じことを感じる？」と聞くとうなずき、父親に対する緊張感を語った。そして、「父親への気持ちが出せて楽になった」、「今までは他人がみんな一枚岩に見えたが、違うことが分かった」などと次々と過去に遡って連想を語った。1年生の3月に宅配便と家庭教師のアルバイトを始めた。

学生は前半では、小さな声で依存的に話した。カウンセラーは話を整理しながら聞き、家族の問題を強く感じたことを伝えた。後半では父親の話から急に話題を変え、沈黙が増えた。カウンセラーは、学生がクラブに求めた同年代の人々との対人関係に入る前の準備段階として面接が位置づけられていること、学生に欠けている対人関係を補う役割を期待されていることを感じた。カウンセラーが学生の辛い感情や依存感情を受けとめながら面接場面における緊張を扱うと、父親への否定的な感情を語った。そして、その後面接関係は安定した。

入学期では、「友達ができない」という相談内容と家族の問題を語った。その後、対人恐怖症的な対人関係を具体的に語り、それが面接関係での緊張感と結び付けられ、さらには家族関係における緊張感とも結び付けられた。面接関係はしだいに安定し、アルバイトなどの現実的な動きが少しずつ見られた。

2) 中間期

①2年生：4 2回

家庭教師を始め、現実生活の話題が増えた。「子供と打ち解けられない」難しさにぶつかると、「周り一枚岩で自分だけが違う」という確信が再び強くなった。ほとんど孤立しており「話しかけてきた人はノートを借りるため、利用だけされる」と泣きながら語った。そしてそのことから、「小さい頃から母にあしろうしろとうるさく言われ、自分から人に働きかけられない」と、母親と結びつけて内面を語った。留年が決まった後、しだいに現実生活と内面を結びつけて語ることが増えた。映画や小説を通して「周りに敵意が満ちている世界で一人宇宙船に乗っている」などと内面を語った。また宗教に関心を示し、友人に利用される辛さを繰り返し語った。

カウンセラーは家庭教師を始めることは少し早いと感じたが、学生の意欲が高かったため支持し、その後「初めは難しい」などと助言した。確信に一直線に進んでしまう考え方を話題として

扱おうとしたが難しかった。後半は母親をめぐる感情の聞き手となった。

アルバイトを中心とした現実生活が増え、生活場面での対人関係の難しさ、希薄さ、利用される関係が話題となり、それを幼い頃の母子関係と結び付けた。また、映画や小説を通して、孤立した自分について語った。

②留年時代：44回

「家族がいつもけんかしていたため、何が常識か分からない」、「父の押しつけに強い反発感情がある」、「電車での孤独感は親に監視されている感じ」などと自分の問題を家族関係と結びつけ、家族への否定的な感情を述べた。生活は昼夜逆転していたが、コンピュータに強い関心をもった。その後、「講義を聞いているだけでは友達はできない」と語る学生を、カウンセラーは学生相談室主催のグループ合宿に誘った。「グループに参加して初めて大学の人を身近に感じた」と語り、下宿を始め、グループで知り合ったP君との関係を深め、そのことを通して対人関係を広げた。その後「家に帰るとゆううつ。父は自分の考えを押しつける。初めて家の居心地の悪さを実感した」と、新しい視点から家について語った。この時期学生は転学科を考えたが、希望はかなえられなかった。また異性への淡い恋愛感情を語った。

学生は現実生活の難しさを内面と結びつけ、その意味を考え始めた。カウンセラーは家族をめぐる話題では聞き手となった。後半では、学生はしだいに面接室を基地にのようにして対人関係を広げ、カウンセラーの役割が少しずつ小さくなった。時には不安が強くなったが、「変化しているがゆえの不安」と位置づけて支えると、学生は家族への否定的な感情をしっかりとした言葉で語り始めた。

留年中は生活が昼夜逆転し、内面的世界に目を向けることが増えた。後半はグループ合宿への参加を契機として、友人関係が出来始め、対人関係を通して家族関係を見つめ直した。

③3年生：39回

友人のP君と共同生活を始め、「固い話とか女の子の話とか色々する。仲間外れの感じはない」と語り、「P君は将来への夢をもっている。自分もちたい」と、P君への憧れを語った。学部での生活について、「自分のような人間も結構いることが分かった。自分から人に話しかけた」と語った。また「家族の話をしたが、みんなうまく行っているわけではないことが分かった」と語り、「母の力強さは年とともに小さくなっている。父も言葉では色々言うが自分に似た人」と、両親への多面的な感情を語った。

学生は、今までカウンセラーと話してきた事柄を、友人関係の中で話すようになり、カウンセラーは疑似友人的役割から離れて、学生が時々帰る繫留地のような存在となり、学生の生活上の変化を言葉で定着させようとした。学生は、対人関係が増えるにつれて、さみしさを語るが増えた。

学部に入って対人関係がいくらか広がり、具体的な対人関係を通して自分の問題を整理することが続き、自分について、父母について、多面的な見方を語るようになった。

3) 卒業期：9回

4年生になり、「研究室は運動部のようで親しめそう」と語り、ぎくしゃくしながらも家族的な雰囲気の研究室に居場所を見つけ、縦横の対人関係を広げた。初めて面接を忘れる回があった。学生の忙しさ、必要性を考えて月に1回の面接とした。進路について迷った後、会社訪問を行い、進路を決め、卒業研究に追われ、卒業し、共同生活を終えて面接を終了した。

進路の報告が主となり、研究室の対人関係について言葉では不安を語るが多かったが、表情は自信に満ちていた。カウンセラーは現実生活での行動の報告を聞き、「研究室という、こことは違う柱ができた」ことを支持した。

研究室に入り、自分の居場所を見つけ、対人関係を広げた。卒業研究、進路決定などの現実的課題が面接の中心的话题となった。「二人で実験しているが、相手は仕事が早く自分はゆっくりでペースが違う」などというズレを感じながらも、卒業研究を通して何とか研究室にとけ込んだ。生活は忙しく、「さみしさが無い」と語り、夏休みは進路決定に追われた。卒業研究が忙しくなるにつれて、終わりのない時間感覚を話題にすることが減り、生活の報告、進路、将来についての話題が増えた。現実生活が忙しくなるにつれて、昼夜逆転した生活がしだいに変化した。最後に大学での4年間を振り返った。研究室での生活が中心となったため、月に1回の面接とした。現実生活の忙しさため面接を忘れた回があった。

(3) 卒業期の面接過程の特徴

1) 全体的特徴

入学期には、相談内容と家族の問題を語り、対人恐怖症的な対人関係の持ち方が、家族関係における緊張感と関連していることが明かとなった。中間期には、生活場面での対人関係の難しさ、希薄さを語り、それが母子関係と関連していることが明かとなった。友人

関係を通して家族関係を見つめ直し、父母についての見方が変化し、自分についての見方も変化した。卒業期には、家族の問題が一段落し、現実生活が展開し始めた。研究室に入り、自分の居場所を見つけ、対人関係を広げた。卒業研究や進路決定といった現実的課題に取り組み、最後に内面を振り返った。

このように、卒業期以前に来談して面接の中で一定の心理的作業を行った長期継続事例が卒業期を迎えた場合、卒業期には、卒業研究などの現実的な課題に取り組み、そのことを通してそれまでの面接の成果を統合し、内的世界と現実生活を結びつける作業が行われた。

2) 面接関係の特徴

入学期では、学生はカウンセラーに対して依存的で現実生活の辛さを語った。カウンセラーは家族の問題を強く感じ、学生に欠けている対人関係を補う役割を期待されていると感じた。中間期では、カウンセラーは家族をめぐる話題の聞き手となった。後半では、学生は面接室を基地のようにして対人関係を広げ、カウンセラーの役割がしだいに小さくなった。卒業期では、現実生活での進路の報告が主となり、カウンセラーは生活の報告を聞く役割を取った。

このようにカウンセラーの役割は、学生を支えることから、内面の聞き手へと変化し、その後友人との関係を見守る時期を経て、卒業期には現実的課題に取り組むことを支えることへと変化した。

3) 時間の特徴

a) 入学から卒業までという時間的枠組み

入学期では、講義を中心とした生活を送ったが、しだいに欠席が増えた。中間期の2年生から留年時にかけては、講義の遅刻や欠席が多く、生活上の変化が少なく、不規則な生活を送った。しかし対人関係の展開にともなってこのような生活が変化し、3年生では、学部生活に入り、現実生活を広げるとともに内面を整理し直した。卒業期では、他の学生と同じペースで卒業研究に取り組み、卒業後の準備を行った。

b) 学生の内的な枠組みとしての時間感覚

入学期では、高校時代までの規則的な生活リズムがしだいに崩れ始めた。中間期では、

現実生活から距離をとる行動が増え、他人とのテンポの違いを語った。生活が昼夜逆転し、「終わりのない時間」や「時間に縛られない生き方」への憧れを語り、秒針だけの時計を作ったが、一方では日記を書き始めた。卒業期では、現実生活が忙しくなるにつれて、「終わりのない時間」について語るものが減り、昼夜逆転していた生活リズムが変化した。

c) 面接の構造としての時間的枠組みの特徴

入学期では、規則的な来談の後、遅刻が増えるなど不規則となったが、面接の進展とともに再び規則的になった。中間期の2年生から留年時にかけては、学生は時間通りに来談し、面接を中心に一週間を過ごした。内面の整理が一段落して3年生となり、現実生活での出来事が増えると、時々連絡の上での欠席がみられた。4年生では面接の間隔をあげ、現実生活を重視した。

大学キャンパスの時間的枠組みの中で、学生はしだいに内面へと目を向け始め、入学以前からの規則正しい時間感覚が変化して、「終わることのない時間」への憧れを語るなどしたが、卒業期近くになって内面と現実生活を統合して現実的な時間を生きるようになった。

2. 4. 3. 3 D型の事例(事例11)

D型とは精神的健康度が低く、面接の中で現実的な作業を行った学生を言う。D型で卒業期以前に来談して卒業期に終了した事例は少ない。ここでは、事例11をあげ、D型の学生の卒業期の特徴および援助方法を明らかにする。

事例11は、自己臭を訴えた1年生が卒業するまでの4年間、193回の面接記録である。筆者は、スーパーバイザーとして関わった。

(1) 事例の概要

事例11は、大学に入学直前の時期に来談した19歳の1年生男子である。相談内容は、「息が臭ったらどうしようと、勉強ができなくなった」であり、父親(50歳代)、母親(40歳代)、兄の4人家族であった。小学時代から心配症で、母親に「大丈夫?」と聞かないと安心できなかった。高校1年生の時、女子生徒に臭いと言われて以来、人が多い場面はだめになった。

以前から医学的治療を継続している。

(2)面接過程

1)1年生 (52回)

春(4～6月)には、学生は、「臭ったらどうしよう。まわりから監視されているよう」と語り、入学式や入学後の合宿での臭いをめぐる嫌な体験を語った。また、「父を避けたい」、「母といると楽」と父母について述べた。面接には意欲的で、学生が一方的に話すことが多く、連休による面接の休みに対して不安を示した。夏(7～9月)には、試験やクラス合宿を前にした臭いへの不安、コンパでうまくしゃべれなかった体験を語った。父親について、「うっとうしい」と嫌悪感を述べたが、その後しだいに「頼りたい」という依存感情や両価的感情を語った。また、「合宿が不安。面接を増やして」と依存的になった。秋(10～12月)には、「女性に対して臭いが気になる。親しくなろうとすると嫌われるのでは」と語り、高校時代に劣等感をもって以来臭いが気になることを述べた。そして「生活の中で怒りを感じることが多い」と語った。前回の面接とのつながりのない回が続いた。冬(1月～3月)には、「人気者になりたいのに臭いが邪魔する」と述べ、カウンセラーへの依存感情が強くなり、一方で、家で自傷行為(かすり傷)が見られた。その後、この行動が面接の休みと関連していることが明らかになった。

最初に臭いをめぐる相談内容を語り、その後、大学での合宿やコンパ場面での症状のあらわれ方、家族への見方の変化を語った。学生は面接に意欲的であり、カウンセラーに対して依存的、両価的になった。面接関係と関連した行動化が見られた。

2)2年生 (48回)

春には、「ゼミで自分だけ相手にされていない」と、大学での人間関係について語った。初めて将来が話題になり、「自分は企業向きでない」と語った。学生は面接の中で行動化の意味を少しずつ言語化するようになった。夏には、「母と自分は胴体がくっついている」と語り、大学での対人関係が不安定になると母親との関係にしがみついた。面接の構造は守られ、具体的な話題が増え、しだいで対話的となったが、後半では再び独語調に戻った。秋には、「グループの金魚の糞のよう」など、クラスでの人間関係を具体的に語った。また「ゼミを決める不安からトイレが気になる」と述べ、数を数えるなどの強迫症状を初めて語った。学生は「不安のため面接回数を増やしてほしい」と訴えた。冬には、「母の敷いたレールの上を走りたい」と、母親への依存

感情を語り、面接の中でもカウンセラーへの依存感情を強めた。

学生はしだいにクラスやゼミでの人間関係について語り、時には将来について語った。一方では、母親への強い依存関係や強迫症状について語った。カウンセラーへの強い依存感情を面接の話題とした。

3)3年生 (47回)

春には、「臭いがすると皆が騒いだ」など、臭いをめぐる話題を多く語った。関係は安定し、臭いの意味をめぐっていくらか知性化された説明が見られた。夏には、「覗かれている」といった訴えが繰り返された。しだいに「悪い方へ考えるのをやめよう」と語り、一人で映画に行ったり、「ここへ来るのが楽になった」と、カウンセラーへの親近感を語った。秋には、確認強迫について語り、「数えないと守ってくれるものがない」と、その意味を述べた。また、ゼミの司会に緊張し、カウンセラーに相談することが見られた。冬には、「母の期待を満たすため人の上に立ちたい」と語り、「公務員がいい」と進路について語った。「父親を悪く言い息子を自慢する」母親への批判を語り、「いつも母の期待を満たそうとしてきた」と語った。独語から対話の方向へと少しずつ変化した。

生活場面での症状、精神病への不安を語った。一方で、一人で行動するなど現実的な行動が増え、カウンセラーへの信頼感を語り、面接関係は安定した。

4)4年生 (46回)

春には、「母と違う世界に近づくと臭う」と語り、「高校に入って、皆に追い抜かれる感じがして、母に頼った」と語った。現実生活では就職のための会社訪問を始め、「緊張したが何とかできた」と語り、就職活動の進め方について具体的に語った。そしてしだいに「公務員がいい」と述べた。就職の話が具体化するにつれて、「近所の人が就職の邪魔をしないか」と不安を強めた。そして第2志望の企業に合格後も就職活動を続けた。また、母親について、「母の自慢の息子で言いなりになってきた」、「中学で異性に関心が出てきた頃、母に勉強の妨げになると言われていると思った」と語った。カウンセラーに報告する形で就職活動について考え、母親との関係についても感情を込めて語った。

夏には、就職面接の方法、どこの試験を受けるかなど、カウンセラーに相談し報告した。「就職してからクビになるのではないかと不安を語り、「人にあとをつけられた」と語った。また「デパートの中をパジャマを着て歩いた」夢を報告した。その後第1志望の進路に合格した。

「父に嫌われるのが怖い」、「僕の頭にあるのは母を通しての父」などと父親の話題が多くなり、「父の姉にかわいがられた」と幼児期からの叔母との関係を振り返った。学生は前半、就職という課題に直面して、自分の気持ちを整理し不安を解消するために面接を利用した。後半では、父親との関係を振り返る場として利用した。

秋には、進路が内定し、「誰かが自分の履歴を調べて就職がだめになるのではないか」と不安を語った。その後、「卒業論文のための本を読んでいる」と語り、卒業論文の内容、ワープロの操作について語った。その後も、「近所の人が家を覗いている」と語ったが、一方では将来に目を向け、仕事の準備のためにコンピュータを買い、「車の免許が欲しい、早く働きたい」と述べた。卒業論文を仕上げ、ゼミの友人との付き合いについて語った。現実生活の報告が増えた。しかし一方では不安に陥ることが多く、カウンセラーに確認することが多かった。

冬には、卒業論文を出したこと、卒業を前にして「うまく行かなくなるのでは」と不安が高まり調子が悪くなったこと、母親がそばにいと疲れること、父親がいると安心すること、父方の叔母が好きだったことなどを語り、カウンセラーへの感謝の言葉を語った。その後、ゼミの友達に誘われて卒業旅行に行ったが、「悪口を言われた」などと被害感を強め、一方では「旅行に行きただけでいい」とも述べた。卒業式の翌日、「心配だったが、何とかうまく行った。1年生から2年生にかけては苦しかったが、4年生では楽になった。自分も他人もそんなに悪人でないことが分かった。今までは母の言葉をそのまま自分の言葉としていたが、今は違う。父も一人の人間であることが分かった。仕事が内定して視界が晴れた」と述べた。被害感をもちながらも何とか学生生活を終えようとしていることを報告した。

生活場面での症状、母親との関係について語る一方で、就職活動を始め、現実的な話題を多く語るようになった。進路決定、卒業が現実的な目標となり、就職活動、卒業論文といった卒業期の現実的課題に取り組むことを通して、現実生活への自信を強めた。現実生活の報告が増えるにつれて、今までの漠然とした不安が現実場面での不安として語られるようになった。就職の内定後は、父親の話題を語るようになり、卒業論文を話題とし、卒業旅行に行き、面接を振り返った。学生は、カウンセラーからしだいに距離を取ろうとした。

(3)卒業期の面接過程の特徴

1)全体的特徴

入学期、中間期には症状と学生生活をめぐる問題が大きな割合を占めたが、卒業期には

現実的課題に取り組み、進路決定後に再び社会生活への不安が主題となった。

本事例のように、精神病水準の学生との面接においても、卒業期においては現実的な課題への取り組みが行われ、卒業期の現実的課題が内面に影響した。卒業期の学生相談では、学生の内面だけでなく、現実的な課題への取り組みと内面との相互関係に注目することが大きな意味をもった。また、卒業期以前の面接関係が卒業期の現実生活を支えた。

症状については、4年間で大きな変化は見られなかったが、学生がしだいに症状と付き合い合う方向へと変化した。卒業期では、卒業期の不安という文脈で症状の一部を理解するようになった。

学業については、試験および卒業論文以外は主要な話題とはならなかった。学生は、卒業期に卒業論文に取り組み、何とか仕上げた。進路については、3年生までは話題とならなかったが、卒業期になって、きわめて具体的な話題となった。進路の内定という成功体験が、学生の内面に影響を与えた。学生生活では、学生はさまざまな大学の行事に参加したが、そのたびに不安を示した。卒業期には、卒業旅行に参加した。対人関係においては4年間で大きな変化は見られなかったが、卒業期には、面接の中でしだいに対人関係の難しさを具体的に語るようになった。親子関係については、父親に対して、嫌悪感を語ることからしだいに肯定的な感情を語る方向へと変化した。母親に対して、一体感を語ることからしだいに否定的な感情を語り距離をとる方向へと変化した。面接関係については、学生が一方向的に語る関係からしだいに相互的な関係へと変化した。

2) 時間の特徴

a) 入学から卒業までという時間的枠組み

入学期では、学生は症状をもちながら大学の学年暦に合わせようと努力し、行事に参加することから生じた不安が話題となった。中間期では、ゼミやクラスでの対人関係の難しさや夏休みの過ごし方が話題となり、症状の話題が面接の中心となった。卒業期では、進路決定と卒業が現実的な目標となり、就職のために会社訪問を行い、進路を決めた。そして卒業旅行や卒業式に参加した。卒業期に学生は現実的課題に取り組むことを通して、現実生活への自信を強めた。

b) 学生の内的な枠組みとしての時間感覚

入学期では、悩みや症状を語るとともに、過去に目を向けた。また、現実の生活に追わ

れた。中間期では、症状、親子関係の話題が中心となり、現実的な時間感覚から離れた内面的な話題を語った。3年生では、進路について具体的に語った。卒業期では、進路が現実的な課題となり、就職や卒業論文について語り、生育歴や学生生活を振り返る形で内面に目を向けた。

c) 面接の構造としての時間的枠組みの特徴

入学期では、長期休暇も含めて定期的に来談した。面接の休みの後に行動化が生じた。中間期の2年生では、安定した面接関係となったが、学生は不安のたびに面接回数を増やすことを要求した。3年生では、安定した定期的な面接となった。卒業期では、定期的で安定した関係が続き、カウンセラーから距離を取ろうとすることも見られた。

2.4.4 考察

(1) 長期継続事例についての卒業期の意味

以上の結果として第1に、卒業期以前の面接過程で、ある程度の心理的作業が行われた事例の場合、卒業期には現実生活を重視した心理的作業が行われた。一般に長期継続事例では、入学期には現実的課題への対処が、中間期には内面的課題への取り組みが、卒業期には再び現実的課題への取り組みが、主として行われた。内面的作業が一段落した後に卒業期を迎えたA型の事例9およびC型の事例10では、学生は面接室を繋留点としながら卒業期の現実的課題に取り組んだ。内面的作業が一段落する前に卒業期を迎えたD型の事例11では、学生は内面的課題を一時的に保留する形で卒業期の現実的課題に取り組み、その後再び内面的課題に取り組んだ。卒業期にはさまざまな形で現実的課題への取り組みが行われたが、そのことが内面的課題への取り組みを促進した事例がある。

また、卒業期の来談事例で短期間のうちに行われたことが、卒業期以前からの来談事例では長期間にわたって行われた。

第2に、精神的健康度が高い事例ほど、よりはっきりと学生期の下位時期、学年暦、学期、試験、長期休暇、卒業といった大学キャンパスの時間的枠組みを意識して心理的作業を行った。また、長期継続事例の場合には、精神的健康度が低いD型においても大学キャンパスの時間的枠組みを意識した心理的作業が行われた。

(2) 学生相談における時間の意味

1) 入学から卒業までという時間的枠組み

a) 大学の時間的枠組み

学生にとっての現実的な枠組みとして、大学には入学から卒業までという時間的枠組みがある。そして、この中にはさらに学年や、学期・試験・長期休暇といった学年暦にもとづく時間的枠組みがある。卒業期はこのような枠組みをもつ学生生活の終点を前にした時期であり、社会生活への移行期である。

b) 事例のまとめ

学生生活の時間的枠組みの終点である卒業期にどのような心理的作業が行われたかは、事例の型によって異なった。

精神的な健康度が比較的高いA型の実例では、よりはっきりと卒業が意識された。事例9では、学生は中間期から学生生活の終点を意識し始め、卒業期では、はっきりと学生生活の終点を意識し、自分の関心を明らかにして将来への準備のために時間を使った。

精神的な健康度が低い事例では、卒業期以前に大学キャンパスの時間的枠組みを意識することは少なかったが、卒業期に至って終点を意識する事例が見られた。事例10のように、面接の中で一定の心理的作業を行った長期継続事例が卒業期を迎えた場合、卒業期には、卒業研究などの現実的な課題に取り組み、そのことを通してそれまでの面接の成果をまとめ、内面的世界と現実の生活とを結びつける作業が行われた。

精神的健康度がより低い事例11では、卒業を意識して内面的課題を保留して現実的課題に取り組んだ。事例11では、入学期から中間期にかけては、学生は行動としては学年暦に合わせていたが、症状や生活の中での不安が話題となった。卒業期では、それまでと変わって、進路決定、卒業が現実的な目標となり、就職活動を始めて、進路を決めた。学生は卒業期の現実的課題に取り組むことを通して、現実生活への自信を強めた。

c) 学年暦の意味

先に述べたように、学期や試験を意識する度合いは学生の精神的な健康度によって異なり、精神的健康度が高いほど、これらを意識することが多かった。また、精神的健康度が

低い事例でも、卒業期には終点である卒業を意識する事例が見られた。

A型的事例9では、学生は学期や試験を常に意識しており、面接の中で時々報告した。また、面接の話題は、学期、学年によって異なり、卒業期では進路の問題が主要な話題となった。C型的事例10では、2年生までは試験を意識せず単位を落とすことが多かったが、内面の整理が一段落した3年生では、初めて試験を意識し、「後がない」とがんばった。卒業期では、研究室に入り、学年暦に沿って卒業研究に取り組んだ。D型的事例11では、中間期までは、学年暦に合わせた生活を送ろうとしたが、症状のため難しかった。卒業期では、就職が具体的目標となり現実的課題に取り組んだ。

学生は学期始めを心機一転の契機としようとするものが多く、精神的な健康度が高い事例ほど、新しいことに取り組む姿勢を見せることが多かった。しかし多くの事例では、しばらくすると生活リズムの乱れや講義への欠席などという形で中だるみが生じやすかった。しかし、卒業を前にした時点で、現実的課題に取り組む事例が見られた。

次に、長期休暇については、学生の精神的健康度、および面接過程の進展にともなって長期休暇の意味が変化した。

A型的事例9では、入学期では、時間の使い方に戸惑ってさまざまな活動を増やし、中間期では、恋愛や友人関係など学生生活を展開することに忙しかった。卒業期では、進路決定と卒業研究を中心に、将来のために時間を使った。C型的事例10では、入学期から留年時までは、変化が少ない長期休暇であり、肉体労働のアルバイトで時間をうめた。現実生活が忙しくなった3年生では休息という意味が大きくなり、4年生では進路の準備に追われた。D型的事例11では、入学期では、夏休みの行事である合宿への不安が話題となり、長期休暇による面接の休みに反応した。中間期では、映画に行くなど、現実生活上の変化が見られた。卒業期では、夏休みは就職活動に使い、不安を語った。春休みは、学生生活を振り返った。

山木(1990)は、長期休暇によって学生が面接者との分離と再会の体験を繰り返すこと、長期休暇には退行促進的方向(帰省し住み慣れた環境に戻るなど)と成長促進的方向(働く経験、ゼミやクラブの合宿への参加など)の意味があることを指摘している(499-500頁)。事例9や事例10のように、精神的健康度が比較的高い学生の場合には、学年の変化や面接の進展にともなって、長期休暇の意味が、山木の言う退行促進的方向から成長促進的方向へと変化した。そして旅行やアルバイトを体験することが、学生の心理的成長に大きな意味をもった。また、事例11に見られるように、精神的な健康度の低い学生の

場合には、長期休暇を前にして、カウンセラーから見捨てられることへの不安を語った事例がある。

2) 卒業期大学生の内的な枠組みとしての時間感覚の特徴

a) 内的枠組みとしての時間感覚

学生にとっての内的な枠組みとして主観的な時間感覚（時間体験）がある。ここで時間感覚とは、生活リズムなどの現実生活上の時間感覚、および時間の流れや過去・現在・将来のとらえ方などの内的な時間感覚の両方を言う。卒業期の大学生の大部分は、ライフサイクル上青年期後期に位置している。そのため、青年期後期に特有な時間感覚が語られる場合がある。また時間感覚が、面接過程の中で変化する場合がある。Erikson, E. H. (1959) は、アイデンティティの拡散の視点から「非常な危険が切迫しているという切迫感」と「時間意識の喪失」とが青年期の時間感覚の特徴であると述べている（小此木訳、166頁）。また、樋口（1986）はユング心理学の視点から、永遠の少年の特徴として、「無時間的で年をとらない」ことをあげている（35頁）。

b) 事例のまとめ

A型の事例9では、入学期では、自由な時間への戸惑いを語り、中間期では、対人関係、進路決定に忙しく、将来に目を向けた。卒業期では、進路決定までは忙しい時間を過ごしたが、進路決定後はあわただしい時間感覚が変化した。C型の事例10では、入学期では、規則的な生活リズムがしだいに崩れ、中間期では、現実生活から距離を取る行動が増え、留年時には生活が昼夜逆転した。卒業期では、現実生活が忙しくなり、生活リズムが変化した。卒業期近くになって内面と現実生活を統合した。D型の事例11では、入学期から中間期にかけては、現在の悩みとともに過去に目を向け、親子関係などを語り、現実の時間が止まっている感じであった。卒業期では、進路が現実的な課題となり、就職、卒業論文について具体的に語り、生育歴や学生生活を振り返る形で内面に目を向けた。

c) 卒業期における時間感覚の変化

一般に入学期には、受験勉強から解放され、それまでの勤勉さ、強迫性をしだいに緩める学生が多い。中間期は、大学によって異なるが、大学からの現実的課題の要請が比較的少ない時期であり、時間感覚が拡散しやすく、多くの事例において曖昧な枠組みの中で内

面的な深まりが見られた。そしてこの時期の深まりが、その後の面接の進展に大きな意味をもった。

長期継続事例においては、卒業期に時間感覚が変化した事例が多く見られた。卒業期は学生相談の転換点となることがあり、時間感覚に変化が見られることが多かった。それは停滞した時間感覚から生きた時間感覚への変化であり、流される時間感覚から時間の流れを受け入れる方向への変化であり、拡散した時間感覚からまとまりをもった時間感覚への変化であった。

また、特に卒業期に、学生が生活リズムの変化、時計、時間、カレンダー、締め切りなどについて語ったり、面接への遅刻といった形の行動を示した場合、そのことを面接の主要な話題とすることによって、面接が転換点を迎える場合が見られた。そして学生とカウンセラーが、学生の時間感覚の変化や、両者の時間感覚のズレについて話し合うことによって、時間感覚がしだいに共有されることが見られた。

3) 面接の構造としての時間的枠組みの特徴

a) 面接の構造としての時間的枠組み

三つ目の枠組みとして、面接の構造としての時間的枠組みがある。学生相談は他の心理臨床的援助活動と同様に、原則として一定の時間的枠組み（曜日・時間・間隔などの面接の構造）の中で行われる。学生は大学キャンパスの時間的枠組みという客観的・現実的な時間の流れの中に身を置きながら、自分自身の内的な枠組みとしての時間感覚をもっている。これらはズレたり、ぶつかり合ったり、影響を与え合ったり（留年など）しながら、面接の構造としての時間的枠組みのあり方を規定している。

先に述べたように、卒業期の学生相談の特徴は終点が決められていることである。May, R. (1988) は、大学キャンパスでの心理療法には終点があること、長期休暇などの学年暦上の特徴があることを指摘し (64頁)、山木 (1990) は、小此木 (1990) の治療構造論を学生相談に順応させる視点から、学生相談における時間の特徴について、「卒業までの時間制限がある」こと、「各学期は15週間で、その間に長期休暇が入る」ことなどをあげている (499頁)。

b) 事例のまとめ

A型の事例9では、入学期、中間期では、定期的に面接を行った。卒業期では、現実的

課題を優先して面接の回数を減らした。しだいに面接の間隔が開き、面接場面が、自分を見つめ、学生生活を振り返る場所から、学生生活を報告をする場所へと変化して終了した。C型の事例10では、入学期では、面接への遅刻が見られたが、面接の進展とともに学生の来談が規則的となった。中間期では、学生は時間通りに来談し、面接という枠組みが学生を保護して、内面を語ることを保証する場所となった。現実生活での出来事が増えると、時々欠席が見られた。卒業期では、面接の間隔をあけて現実生活を重視した。面接がしだいに学生にとっての繋留点となり、学生は面接の時間的枠組みから大学キャンパスの時間的枠組みの中へと入って行った。D型の事例11では、入学期では、毎回定期的に来談したが、連休の後に行動化が生じた。中間期では、安定した面接関係となったが、学生は不安のたびに面接回数を増やすことを求めた。卒業期でも、定期的で安定した関係が続いたが、カウンセラーから距離を取ろうとする動きも見られた。

このように、卒業期以前に来談した長期継続事例では、時間的枠組みの意味は、面接の進展とともに、学生が内面を語るための枠組み、自分を見つめるための場所から、学生生活を報告する場所へと変化した。

筆者は複数の学生に対して、「面接という時間的枠組みは生け簀のようなものである。学生という魚は面接という枠組みによって一時的に保護されるが、面接が進展するにつれて大学キャンパスの時間的枠組みという川に出て行く。そしてやがては社会という海に出て行く」という感覚をもつたことがある。

c) 大学キャンパスの時間的枠組みと面接の構造

一般に面接の進展につれて、大学キャンパスの時間的枠組みと、面接の構造としての時間的枠組みとがぶつかりあう場合があった。たとえば、学期の変わり目に授業時間と面接時間がかち合うことが多い事例でみられたが、そのこと自体を面接の主要な話題として扱うことに意味があった。

卒業期には進路・卒業研究などの現実的な課題があり、多くの事例ではこれらを面接の枠組みよりも優先させることが意味をもった。しかし精神的健康度の低い学生の場合など、現実的課題よりも内面的課題を優先させ、現実的課題を先送りすることが必要な場合があった。筆者の経験では、事例9、事例10のような精神的健康度が比較的高い学生に対しては、卒業期の現実的課題の要請によって、面接と面接との間隔はあけるが、面接時間は一定にする場合が多かった。これは現実生活の報告だけでなく現実生活をめぐる内面を扱

うにはある程度の時間が必要であったためである。そしてこのような形でカウンセラーが学生にとっての心理的繋留点となることに意味がある場合が多く見られた。また、精神的な健康度の低い学生に対しては、間隔をあけずに面接時間を短くするが多かった。これは学生が不安定な場合など、間隔をあけることが難しい場合が多かったためである。このような場合には、短時間であっても面接を継続して、枠を守ること、規則性を保つことが意味をもった。田寫(1991)が述べるように、学生相談においては境界例水準の学生との時間的枠組みの設定はむづかしい場合が多く(33頁)、面接時間を一定に死守して、面接回数を一時的に増やすことで対応した事例がある。

また、進路・卒業論文などの現実的な課題が一段落した後で、面接の間隔や時間を元に戻すことに意味があった事例がある。現実課題が一段落してから卒業までの、短い期間に深い内面的作業が行われた事例がある。

全体として、面接の時間的枠組みには、大学キャンパスの時間的枠組みと学生の内的な時間感覚を結びつける機能があった。

(3)まとめ

研究IVでは、長期継続事例にとっての卒業の意味、現実的課題に取り組むことの意味、および大学キャンパスの時間的枠組みの意味について明らかにした。

学生相談において、学生が大学キャンパスの時間的枠組みのどこに位置しているか、学生の内的な枠組みとしてどのような時間感覚(時間体験)をもっているか、面接の構造としてどのような時間的枠組みが適切か、という時間の観点から、長期継続事例にとっての卒業期の学生相談の特徴を明らかにした。これらの観点は、学生の現実生活を重視するとともに、現実生活と内面とを結びつける接点となるものであり、面接の進展に大きな意味をもった。

卒業期は大学生生活の終点を前にした時期であり、社会生活への移行期であり、青年期後期の重要な一時期である。このような位置にいる卒業期の大学生が、面接の中で大学生生活を終えるための心理的作業を行った事例が見られた。そして卒業期の面接の中で時間感覚の変化を報告した事例が見られた。

第3章 総合的考察と今後の課題

3.1 まとめと総合的考察

3.1.1 研究のまとめ

本研究では、学生の来談時期に注目して学生相談事例を検討し、学生期の下位時期という観点の重要性を指摘し、学生相談の成長・発達促進機能を明らかにするための基礎的資料を得た。

本研究の方法は事例研究法であり、305事例の全体的概観と22事例の詳細な分析を行い、来談時期、来談形態、心理的作業、面接過程を明らかにした。

研究Ⅰと研究Ⅱでは、来談学生の全体像を明らかにした。研究Ⅰでは、来談形態の特徴と面接の主題を中心に記述し、研究Ⅱでは、類型ごとの特徴を中心に記述した。また、研究Ⅲと研究Ⅳでは、来談学生の卒業期の面接過程の特徴を明らかにした。研究Ⅲでは、卒業期来談学生の面接過程を記述し、研究Ⅳでは、卒業期以前に来談した学生の面接過程を記述した。

3.1.2 総合的考察

(1) 本研究の意義

1) 来談時期への注目

研究Ⅰの意義は、学生相談の実践および研究において、従来一括して扱われてきた学生期を下位時期に分けて、卒業期を中心にそれぞれの時期の心理学的特徴を明らかにしたことである。学生相談の来談事例を精神的健康度の観点から見ると、精神的健康度の低さや病理に目が向いてしまうことが多いが、来談時期あるいは下位時期という観点から見ると、多くの学生が一定の時期にそれぞれの形で共通した問題に直面していると考えることができる。

このような観点は、これまでの先行研究に見られないものであった。また、この観点は、

学生相談室への来談学生と、来談しない一般学生との共通点を見出そうとするものであり、学生が自分の問題を理解する上でも、カウンセラーが学生の問題についての理解を学生と共有する上でも有効なものであった。

2) 来談学生の全体像への注目

研究Ⅱでは、従来並列的であった、来談学生の分類を2つの軸で4つに類型化し、卒業期学生相談の全体像を示した。4類型への分類は、学生相談の実践に即した意味のあるものであった。

本研究では、精神的健康度の低い学生だけでなく、従来、学生相談の対象と考えられて来なかった、精神的健康度の高い学生も学生相談の対象であり、精神的健康度の高い学生の内面的作業を援助することが、学生相談の重要な仕事の一部であることを明らかにした。このことは、大学に学生相談機関が設置されていることの一つの意味を示すものである。

3) 面接過程への注目

研究Ⅲでは、卒業期および大学院修了期の来談学生の面接過程を明らかにし、卒業期の面接過程の特徴を示した。その結果、A型とC型の面接過程においては、「学生生活レビュー期」が重要であること、「学生期以前の生活レビュー期」において父親の意味が大きいことが明らかとなった。

卒業期においては進路決定が大きな意味をもつたため、進路決定の時点を基点として、卒業期をさらに細分できることが推察された。

4) 長期継続事例についての卒業期への注目

研究Ⅳでは、入学から卒業までという学生期の時間的枠組みへと視野を広げ、下位時期の移行や学年暦の進展といった時間的経過の中で、長期間来談する学生が卒業期に現実的課題と内面的課題を統合する過程を示した。そして、長期継続事例にとっても、卒業期が特別の意味をもつ場合が多いことを明らかにし、学生が卒業期に現実的課題に取り組むことの意味、および、大学キャンパスのもつ時間的枠組みの意味を明らかにした。

本研究では下位時期の区分を便宜的に学年に基づいて行ったが、今後このような長期継続事例の面接過程の分析を積み重ねることによって、「位相」(Parsons, T. 他 1953)の変化過程として学生期をとらえることができると思われる。

(2) 学生相談における卒業期の意味

1) 時間の観点をもつ意味

学生相談において、学生が大学キャンパスの時間的枠組みのどこに位置しているか、学生の内的な枠組みとしてどのような時間感覚（時間体験）をもっているか、面接の構造としてどのような時間的枠組みが適切か、という観点は、学生の現実生活を重視するとともに、現実生活と内面とを結びつける接点となるものであり、面接の進展に大きな意味をもった。

2) 卒業期に注目する意味

従来の学生相談の研究においては、来談時期に注目した場合にも、入学期に注目した研究が多く見られたが、本研究では、卒業期に注目した。

卒業期は、学生生活の終了と社会生活への移行を前にした時期であり、青年から成人へと至る節目の時期であった。この時期は学生にとって、危機であり、好機であった。

3) もう一つの卒業論文

卒業期の学生相談では、卒業期の現実生活の課題を通して内面を整理することが課題となった。

卒業期には、学生生活を振り返り整理することが行われた。学生生活を振り返る作業は、過去の生育歴を振り返る作業とも、現在の課題に取り組むこととも重なる作業であり、過去と現在、現実的な課題と内面的な課題との橋渡しをするものであった。学生はこのような作業を通して、学生生活に「ふんざり」をつけ、「もう一つの（内面的世界の）卒業論文」を書くような心理的作業を行った。

また、大学入学以前からの未解決な問題を振り返り整理することが行われた。学生の性差にかかわらず、一般に新入生の時期には母親からの分離が主題となることが多く見られ、卒業期には父親との関係を整理し直すことが主題となることが多く見られた。

4) 進路決定の意味

卒業期には、進路決定が大きな意味をもった。進路決定は、今までの学生生活をまとめ

る作業であり、これからの社会生活への準備の作業でもあった。学生が進路決定の前後に来談した場合、進路選択の過程を振り返ることが意味をもった。また、学生が選択しなかった進路に注目することが意味をもった。学生が選択しなかった進路には、親からの期待や、学生の願望などが込められていた。

(3) 卒業期来談学生の理解

1) 4つの類型による理解

本研究では、卒業期来談学生の4つの類型の特徴を見出すことができた。A型では主として「自分らしさの探究」が、B型では「情報の探索および決心や決意の確認」が、C型では「未解決であった内面の整理」が、D型では「混乱や障害にともなう現実生活への対処」が行われた。

2) 面接過程からの理解

本研究では、卒業期来談学生の面接過程の特徴を明らかにすることができた。A型とC型では、面接過程は、「現実的課題への直面期」、「学生期以前の生活レビュー期」、「学生生活レビュー期」、「統合期」と分けられた。これらの期は、直線的に進展するのではなく、状況に応じて行きつ戻りつした。残された時間を意識し、学生生活と面接の終点である卒業を意識することによって、短期間に集中的な作業が行われた。

(4) 卒業期来談学生への援助方法

本研究では、卒業期来談学生への援助方法を明らかにした。各類型ごとに援助方法は異なった。A型の学生に対しては、学生が自分らしさを探究して成長することを援助した。B型の学生に対しては、現実的な問題を整理し、情報提供や助言を行い、決心の聞き手となった。C型の学生に対しては、心理療法的援助を行い、内面の整理を援助した。D型の学生に対しては、危機介入的な面接を行い、障害をもちながら学生生活を送ることを援助した。

わが国の学生相談は、米国のSPS（厚生補導, Student Personnel Services）に端を発し、学生生活の援助を通して学生の人格的成長に寄与することを主要な目的としてきた。そこでは精神的健康度の観点とともに、発達援助の観点が重要なものと考えられてきたが、

発達援助についての実証的な研究は極めて少なかった。本研究では、学生相談事例の全体像を示し、4つの類型に対応する形で、カウンセラーが多様な接近方法を取る必要性を明かにした。

従来、学生相談の相談内容が、「発達上の問題」、「病理的問題」、「環境的問題」と分けられる（Grayson, 1989）のに対応する形で、援助の方法が「成長・発達促進」、「治療」、「仲介」と大別されてきた（平木, 1994）。しかし、これらの方法は互いに排除し合うものではなく、重複が可能であり、学生相談では、どの方法に重きを置く場合でも、学生の成長や発達を促進する働きかけが大きな意味をもつことが明らかとなった。

3.2 今後の課題

本研究では、事例研究法で得られた知見に基づいて卒業期来談学生の臨床心理学的特徴を明かにしたが、

1) 学生相談室に来談しない一般学生の下位時期ごとの心理学的特徴については言及できなかつた。

2) 来談学生の男女比はおよそ6対1であったが、性差については実証的な形で検討できなかつた。

3) 学部差については、詳細に言及できなかつた。

4) 来談学生への具体的な援助方法については、詳細に言及できなかつた。

これらの点を踏まえて研究を進めていくことが今後の課題である。

引用文献

- Adams, G. R. & Fitch, S. A. 1982 Ego Stage and Identity Status Development: A Cross-sequential Analysis. *Journal of Personality & Social Psychology*, 43, 574-583.
- American Psychiatric Association 1994 *DSM-IV (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, 4th ed.)*. American Psychiatric Association, Washington, DC.
- 安藤延男 1991 座談会 キャンパスライフと学生相談の役割. 全国学生相談研究会編 『現代のエスプリ 293 キャンパス・カウンセリング』, 至文堂, 5-30.
- Arnstein, R. L. 1984 Developmental Issues for College Students. *Psychiatric Annals*, 14, 647-651.
- Butler, R. N. 1963 The Life Review: An Interpretation of Reminiscence in the Aged. *Psychiatry*, 26, 65-76.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. New York, International Universities Press. (小此木啓吾訳 1973 『自我同一性』. 誠信書房.)
- 藤原勝紀 1985 心理臨床における「手応え」—精神病圏事例のカウンセリングから—. 九州大学教養部カウンセリング学科論集, 77-97.
- 福井裕子 1995 大学2回生・3回生の心理的混乱と自己吟味の様相. 甲南大学学生相談室紀要, 3, 18-34.
- Grayson, P. A. 1989 The College Psychotherapy Client: An Overview. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds) *College Psychotherapy*. New York, London: The Guilford Press, 8-28.
- 羽下大信 1993 在学中発病 (Psychotic Level) した学生の面接と、卒業後の経過フォロー. 第26回全国学生相談研究会報告書, 高知大学, 107-117.
- Havighurst, R. J. 1953 *Developmental Tasks and Education*. New York: McKay. (荘司雅子訳 1958 『人間の発達課題と教育』. 牧書店.)

- 早川千恵子・佐藤成子・林さち子 1994 不安・悩みに関する調査. 東京女子大学学生相談室報告書, 1, 3-44.
- 林仁忠 1984 誰ともつき合いたくない 対人恐怖を訴えた学生の事例. 細木照敏・平木典子編, 『学生相談室』, 同文書院, 207-234.
- 早坂浩志 1996 大学院学生の心理・社会的適応に関する一考察—学生相談にみる「研究室」—. 東北大学学生相談所紀要, 23, 17-29.
- Heppner, P. P. & Neal, G. W. 1983 Holding up the Mirror: Research on the Roles and Functions of Counseling Centers in Higher Education. *Counseling Psychologist*, 11, 81-98.
- 樋口和彦 1981 ポスト・スチューデント時代. 笠原嘉・山田和夫編, 『キャンパスの症状群—現代学生の不安と葛藤—』, 弘文堂, 253-283.
- 樋口和彦 1986 『「永遠の少年」元型／女神の元型』. 山王出版, 34-38.
- 平木典子 1994 学生相談理論の構築に向けて. 都留春夫監修『学生相談』, 星和書店, 219-228.
- 細野正美 1986 強迫観念に悩む男子大学生の治療過程—すれ違い、関わり合い、そして終結まで—. 日本心理臨床学会編『心理臨床ケース研究4』, 誠信書房, 151-173.
- 一丸藤太郎 1995 もう一つの卒業論文—内田論文へのコメント—. 九州大学心理臨床研究, 14, 38-40.
- 池田豊應 1992 長期化した学生の援助・技法—ケーススタディ ボーダーライン. 全国学生相談研究会議編『現代のエスプリ 296 キャンパスでの心理臨床』, 至文堂, 103-119.
- 乾吉佑・シュアー Y 允子 1978 Brief Psychotherapyの観点からみた学生精神衛生相談. 精神分析研究, 23(1), 40-42.
- 乾吉佑 1980 青年期治療における“new object”論と転移の分析. 小此木啓吾編, 『青年の精神病理 2』, 弘文堂, 244-276.
- 乾吉佑 1984 青年期後期の精神療法. 小此木啓吾他編, 『精神分析セミナーV 発達とライフサイクルの観点』, 岩崎学術出版社, 205-239.
- 岩村聡 1995 退学によって自分を取り戻しつつある青年. 第28回全国学生相談研究会議報告書, 旭川医科大学, 48-53.
- Johnson, E. A. & Schwartz, A. J. 1989 Returning Students. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds) *College Psychotherapy*. New York, London: The Guilford Press, 316-333..

- 垣田康秀・石田元男 1991 卒業間際の学生の相談. 早稲田大学学生相談センター報告書, 23, 3-12.
- 上地雄一郎 1992 父親コンプレックスからみた神経症男子学生の問題. 学生相談研究, 13 (1), 9-17.
- 笠原嘉 1976 今日の青年期精神病理像. 笠原嘉他編, 『青年の精神病理』, 弘文堂, 3-28.
- Keniston, K. 1971 *Youth and Dissent : The Rise of a New Opposition*. New York: Harcourt Brace. (高田明彦他訳 1977 『青年の意義申し立て』. 東京創元社.)
- 吉良安之 1993a カウンセリングの窓口からみた学生期前半の心理的課題の諸相. カウンセリング学科論集 (九州大学教養部), 7, 49-60.
- 吉良安之 1993b 大学入学後の心理的混乱の諸側面—講義における大学1年次生の体験報告から—. 九州大学教養部カウンセリング・レポート, 5, 50-61.
- 京都大学学生懇話室 1985 昭和58年度における学生懇話室の来談状況について. 京都大学学生懇話室紀要, 14, 95-98.
- Levinson, D. J. 1978 *The Seasons of a Man's Life*. Knopf. (南博訳 1992 『ライフサイクルの心理学 (上)』. 講談社.)
- Malan, D. 1976 *The Frontier of Brief Psychotherapy*. New York : Plenum Medical Book Company.
- Mann, J. 1973 *Time-Limited Psychotherapy*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (上地安昭訳 1980 『時間制限療法』. 誠信書房.)
- Margolis, G. 1976 Unslumping Our Sophomores : Some Clinical Observations and Strategies. *Journal of the American College Health Association*, 25, 133-136.
- Margolis, G. 1980 Learning to Leave: Problems of Graduating - Clinical Observations and Strategies. *Journal of the American College Health Association*, 28, 336-338.
- Margolis, G. 1981 Moving Away: Perspectives on Counseling Anxious Freshmen. *Adolescence*, 16, 633-640.
- Margolis, G. 1989 Developmental Opportunities. In Grayson, P. A. & Cauley, K. (Eds) *College Psychotherapy*. New York, London: The Guilford Press, 71-91.
- 丸田俊彦 1981 短期集中精神療法. 精神分析研究, 25 (5), 307-315.

- 松原達哉 1990 生活分析的アプローチ. 土川隆史編『スチューデント・アパシー』, 同朋舎, 215-233.
- May, R. 1988 The Scope of College Psychotherapy. In May, R. (Eds) *Psychoanalytic Psychotherapy in a College Context*, New York: Praeger, 57-100.
- Medalie, J.D. 1981 The College Years as a Mini-Life Cycle: Developmental Tasks and Adaptive Options. *Journal of the American College Health Association*, 30, 75-79.
- 南博文・澤田英三 1991a 記念の作業(2)大学卒業時の象徴的記念対象の形成をめぐって. 中四国心理学会論文集, 24, 45.
- 南博文・澤田英三 1991b 記念の作業-危機的移行過程における象徴的行為のはたらき-. 広島大学教育学部紀要第1部, 40, 139-148.
- 峰松修・冷川昭子・山田裕章 1989 学生相談における分裂病圏の学生の援助. 心理臨床, 2(3), 221-230.
- 光岡征夫 1979 新入生危機の諸問題. 藤土圭三編『現代学生の精神衛生』, 北大路書房, 30-43.
- 文部省大学学術局学生課編 1953 『学生助育総論-大学における新しい学生厚生補導-』. 文部省.
- 森田眞子 1989 四年生の悩み-女子学生の立場から. 山崎久美子編『現代のエスプリ 大学生のメンタルヘルス』, 168-174.
- 長尾博 1991 『ケース青年心理学』. 有斐閣, 23-27.
- 名古屋大学学生相談室 1994 学生相談実施状況. 名古屋大学学生相談室紀要, 6, 41-42.
- 名古屋大学学生相談室 1994 新入生アンケートの結果. 名古屋大学学生相談室紀要, 6, 43-47.
- 名古屋大学学生部 1995 学生生活状況調査報告書(第16回). 名古屋大学学生部.
- 名古屋大学自己評価実施委員会(編) 1993 『明日を拓く名古屋大学 名古屋大学の活動の現況と展望(1992~1993)』. 名古屋大学.
- 中村雅知 1992 大学院生の相談事例の考察. 東北大学学生相談所紀要, 19, 15-25.
- Nelson, R.L. 1971 文理科大学院における大学院生の特殊な問題. 石井完一郎他監訳 1975 『学生の情緒問題』, 文光堂, 267-276. (Blaine, G.B. & McArthur, C.C. 1971 *Emotional Problems of the Student (Second Edition)*. Prentice Hall.)

- 小川俊樹 1989 学生相談からみた女子学生の不適応—その第2の関門について—. 日本カウンセリング学会第22回大会論文集, 78-79.
- 岡昌之 1986 思春期妄想症から精神的自立へ. 第19回学生相談研究会議報告書, 山形大学, 64-72.
- 岡昌之 1987 恐怖症から自己発見への4年間. 第20回学生相談研究会議報告書, 香川大学, 55-60.
- 岡昌之 1991 離人感の訴えに始まり泥臭い世界を通り抜けた長期継続事例. 第24回学生相談研究会議報告書, 東京農工大学, 84-93.
- 小此木啓吾 1990 治療構造論序説. 岩崎徹也他編, 『治療構造論』, 岩崎学術出版社, 1-44.
- 小此木啓吾 1979 『対象喪失』. 中央公論社.
- 大河内浩人・杉若弘子 1993 大学4年生の心理相談. 大阪教育大学紀要第IV部門, 41(2), 183-193.
- 小柳晴生 1989 学生カウンセリングの歴史的変遷—国大協「会報」を中心に—. 大学と学生, 281, 8-14.
- 小柳晴生 1992 ある自己臭学生との面接過程(3)—卒業後の関わりを中心として—. 第25回学生相談研究会議報告書, 京都大学, 73-83.
- Parsons, T., Bales, R. F. & Shils, E. A. 1953 *Working Papers in the Theory of Action*. New York, Free Press.
- Reinhold, J. E. 1991 The Origins and Early Development of Mental Health Services in American Colleges and Universities. *Journal of College Student Psychotherapy*, 6(1), 3-14.
- Rockwell, W. J. K. 1984 Brief Psychotherapy with University Students. *Psychiatric Annals*, 14(9), 637-646.
- Roulet, N. L. 1976 Success Neurosis in College Seniors. *Journal of the American College Health Association*, 24, 232-234.
- 斎藤憲司 1993 学生期における心理的な発達プロセス—東京大学における学生と教育環境の現状に沿いつつ—. 第26回全国学生相談研究会議発表資料(未公開).
- 讃岐真佐子 1991 各学年における心理的課題と学生相談—カウンセラーとして感じていること(その1)—. 駒沢大学学生相談室年報, 1, 38-40.
- 澤田英三・井上弥・石井眞治・山本多喜司 1988 大学卒業・就職に伴うパーソナル・プ

- プロジェクトの構造の微視発達に関する研究. 広島大学教育学部紀要第1部, 37, 171-180.
- 澤田英三・岡田猛・光富隆・山口修司・井上弥 1992 大学から職場への移行. 山本多喜司・S・ワップナー編『人生移行の発達心理学』, 北大路書房, 205-222.
- Sifneos, P. 1979 *Short-term Dynamic Psychotherapy. Evaluation and Technique.* New York: Plenum Medical Book Company.
- 下山晴彦 1987 離人症の青年の浪人から大学卒業まで—大きな箱庭としての大学4年間の意味—. 第20回学生相談研究会議報告書, 香川大学, 101-106.
- 下山晴彦 1988 ある学生(分裂病)との4年間の付き合い—入院、退院、人間、仲間、世間—. 第21回学生相談研究会議報告書, 山口大学, 37-45.
- 下山晴彦 1989 現代社会における学生相談の課題と役割Ⅱ—「学生相談の活動分類」を媒介として—. 東京大学学生相談所紀要, 6, 49-75.
- 下山晴彦・峰松修・保坂亨・松原達哉・林昭仁・斎藤憲司 1991 学生相談における心理臨床モデルの研究—学生相談の活動分類を媒介として—. 心理臨床学研究, 9(1), 55-69.
- 下山晴彦 1992 抑鬱・自殺未遂の学生に対する「つなぎモデル」による援助—6年間の時間的つながりを中心に—. 第25回学生相談研究会議報告書, 京都大学, 11-29.
- 下山晴彦 1994 「つなぎ」モデルによるスチューデント・アパシーの援助 「悩めない」ことを巡って. 心理臨床学研究, 12(1), 1-13.
- 唄中達 1995 学生相談—現在、過去、未来—. 第28回全国学生相談研究会議報告書, 旭川医科大学, 91-97.
- Stone, G. L., Archer, J. Jr. 1990 College and University Counseling Centers in the 1990s: Challenges and Limits. *The Counseling Psychologist*, 18(4), 539-607.
- 末廣晃二 1992 長期化した学生の援助・技法—ケーススタディ グループの中で寂しさを克服して卒業した男子学生. 全国学生相談研究会議編『現代のエスプリ 296 キャンパスでの心理臨床』, 至文堂, 144-154.
- 鈴木康之 1995 アイデンティティ形成に関する研究. 鎌幹八郎他編『アイデンティティ研究の展望Ⅱ』, ナカニシヤ出版, 46-59.
- 田畑洋子 1978 女子大学生とのカウンセリング—卒業期の問題をめぐって—. 相談学研究, 11(1), 11-18.
- 田嶋誠一 1991 青年期境界例との「つきあい方」. 心理臨床学研究, 9(1), 32-44.
- 竹内厚子 1995 卒業と別離—見捨てられ不安の解決に向けて旅立った学生との面接過程

- 一. 明治学院大学学生相談室研究紀要, 6, 73-81.
- 鐘幹八郎・名島潤慈 1991 事例研究法論. 河合隼雄・福島章・村瀬孝雄編『臨床心理学大系 第1巻 臨床心理学の科学的基礎』, 金子書房, 271-288.
- 豊嶋秋彦・遠山宣哉・芳野晴彦 1994 高校期・大学受験期の生活体制と大学生期の適応 (1) -入学直後の適応および自我同一性との関連性-. 弘前大学保健管理概要, 16, 5-34.
- 土川隆史 1984 キャンパスの精神健康の最近の動向について. 名古屋大学学生相談室報, 14, 5-10.
- 塚田展子 1992 学生相談における短期カウンセリング. 学生相談研究, 13(2), 20-25.
- 都留春夫監修 1994 『学生相談-理念・実践・理論化-』. 星和書店.
- 鶴田和美 1990 学生相談における卒業の問題. 全国学生相談研究会議報告書23号, 弘前大学, 109-119.
- 鶴田和美 1991a 大学生の相談事例からみた大学二年生の心理的特徴. 全国学生相談研究会議報告書24号, 東京農工大学, 131-141.
- 鶴田和美 1991b 大学生の個別相談事例から見た入学期の意味-学生自身が行う「もう一つのオリエンテーション」とその援助-. 名古屋大学学生相談室紀要, 3, 3-14.
- 鶴田和美 1992 卒業期に来談した大学生の個別相談事例の全体像. 名古屋大学学生相談室紀要, 4, 3-20.
- 鶴田和美 1993a 卒業期学生相談の終わり方. 心理臨床, 6(3), 155-160.
- 鶴田和美 1993b 来談学年からみた大学生の個別相談事例の心理学的特徴. 名古屋大学学生相談室紀要, 5, 3-29.
- 鶴田和美 1994a 大学生活サイクルにおける学年別の心理学的特徴. 全国学生相談研究会議報告書27号, 鳥取大学, 86-96.
- 鶴田和美 1994b 大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味-比較的健康な自発来談学生についての検討-. 心理臨床学研究, 12, 97-108.
- 鶴田和美 1994c 大学院学生の相談事例の心理学的特徴. 学生相談研究, 15(2), 11-21.
- 鶴田和美 1994d 卒業期来談学生についての文献的研究. 名古屋大学学生相談室紀要, 6, 3-16.
- 鶴田和美 1995a 学生相談における時間の意味. 心理臨床学研究, 12(4), 297-307.
- 鶴田和美 1995b 卒業期来談学生の面接過程. 名古屋大学学生相談室紀要, 7, 3-16.

- 鶴田和美 1996 卒業期に来談する大学生の臨床心理学的特徴. 名古屋大学学生相談室紀要, 8, 3-13.
- 上地安昭 1980 時間制限心理療法による青年期治療. 精神分析研究, 24 (2), 105-113.
- 渡部美沙 1990 卒業 (initiation) の学生相談についての一考察. 日本心理臨床学会第9回大会発表論文集, 176-177.
- Waterman, A. S., Geary, P. S., & Waterman, C. K. 1974 Longitudinal Study of Changes in Ego Identity Status from the Freshman to the Senior Year at College. *Developmental Psychology*, 10, 387-392.
- Waterman, A. S., & Goldman, J. A. 1976 A Longitudinal Study of Ego Identity Development at a Liberal Arts College. *Journal of Youth & Adolescence*, 5, 361-369.
- 山田和夫 1981 大学院生. 笠原嘉・山田和夫編『キャンパスの症状群—現代学生の不安と葛藤—』, 弘文堂, 79-89.
- 山田和夫 1985 就職恐怖・卒業恐怖について. 第23回全国大学保健管理研究集会報告書, 弘前大学, 116-118.
- 山木允子 1990 大学学生相談室における精神療法. 岩崎徹也他編『治療構造論』, 岩崎学術出版社, 490-505.
- 山本多喜司・S・ワップナー編 1992 『人生移行の発達心理学』. 北大路書房.
- 山崎史郎 1988 学生相談における面接方略について—現実課題の処理と内面的価値の探究の扱い方—. 日本心理臨床学会第7回大会発表論文集, 278-279.
- 吉田幸宏 1995 病院臨床から見た精神病理 (寡症状性分裂病の1例をめぐって). 第28回全国学生相談研究会議報告書, 旭川医科大学, 116-119.